東洋通史

第六卷

6

220.
K4745t
S

文學士久保天隨著

東洋通史

第六卷

東京博文館藏版

220.Ku745t

東洋通史　分本第六卷目次

第二編　中古期　漢族繁榮時代

(九)　隋唐の盛時

第八五章　西域諸蠻の沿革と突厥の極盛……三二九
第八六章　隋初の治……三四四
第八七章　文帝四方の經略……三五一
第八八章　煬帝の即位……三五八
第八九章　煬帝の驕奢……三六五
第九〇章　疆外諸國の征服と交通……三七二
第九一章　朝鮮の沿革と煬帝の東征……三八三
第九二章　群雄の並起……三九五
第九三章　唐の統一……四一二

32838

(一〇) 唐の初世

第九四章　高祖の諸政……四三〇
第九五章　太宗の內治……四四一
第九六章　太宗の疆外經略と漢族の極盛……四五三
第九七章　則天武氏……四九〇
第九八章　韋氏及び太平公主……五〇九
第九九章　玄宗開元の治……五一九
第一〇〇章　疆外唐威の弛衰……五三〇
第一〇一章　唐室衰亂の因……五三九

(一一) 唐の中世

第一〇二章　安史の亂(上)……五五七
第一〇三章　安史の亂(下)……五八二
第一〇四章　回紇吐蕃の入寇……五九三

第一〇五章　藩鎮跋扈の起原……五九九
第一〇六章　內廷の腐敗……六〇三
第一〇七章　藩鎮の暴動及び僭號(上)……六〇八
第一〇八章　藩鎮の暴動及び僭號(下)……六一七
第一〇九章　南詔と吐蕃……六二八

東洋通史　略目次

（是れ大體の規矩のみ紙數の都合によりて時に伸縮することあるべし）

上卷
第一冊　第二冊　漢族生育時代……太古より春秋の終に至る
第三冊　……戰國より楚漢に至る
第四冊　……前漢
第五冊　漢族繁榮時代……後漢・三國・四晉
第六冊　……東晉・南北朝
第七冊　……隋・唐
中卷
第八冊　蒙古優勢時代……唐・五代
第九冊　……宋
下卷
第十冊　……宋・蒙古
第十一冊　歐人東漸時代……明
第十二冊　……清

分本刊行に就いての注意

一、本書は大約三千六百頁、著者及び出版者相互の便宜の課り、假りに分つて十二冊となし、隔月一回發刊、來る明治三十七年十二月を以て完成す。

二、全部完成の後は、上中下三卷に合袋し得べく各一千二三百頁、頁付等すべて之に依る。

三、分本各冊に目次あり、全部完成の後は、更に詳細なる總目、次を調製せむ。索引・大事年表・帝王系譜・沿革地圖等は、便宜上、別に一冊として附刻すべし。

(九) 隋唐の盛時

第八十五章　西域諸蠻の沿革と突厥の極盛

隋主楊堅が、江南の陳を亡ぼし、天下を統一したるは、時勢自ら然るところとはいへ實に秦漢以後の大業にして、その後、三百年、李唐の世を終るまでの間、東方亞細亞に於ける漢族の最盛時期たるに負かず、塞外諸國との交渉、愈よ頻繁にして、東洋史の局面一大開展をなせしこと、前古に比なし。而して、この際、特に注意すべきは、這般大勢の激轉、亦た漢族以外諸種蠻族の中に於て、愈よ甚しきものありしこと、是れなり。西域の諸小國に就いては、一々縷述を値せずとするも、嚈達の興廢を中心として、次いで起りし突厥の勃興及び侵入は、漢族の歴史に大關係を有するものといはざるべからず。

嚈達は、大月氏の種族なり、亦た高車の別種といふ。その源は、塞北より出て、金山より南して、于闐の西、都馬許水の南二百餘里に在り、長安を去ること、一萬一百里、その王都拔底延城は、蓋し王舍城にして、印度の西北部を根據とす。その城、方十里

餘、寺塔多く皆飾るに金を以てす。風俗突厥と略ぼ同じく、兄弟一妻を共にし、夫に兄弟なきものは、その妻、一角を帽に載せ、若し兄弟あれば、その多少の數に依つて、更に角を加ふ。衣服の類、加ふるに纓絡を以てし、頭皆髪を剪る。その語は蠕蠕、高車及び諸胡と同じからず。衆十萬ばかり、城邑なく、水草に依隨し、氈を以て屋となし、夏は涼土に遷り、冬は煖處を逐ひ、その諸妻を分つて各別所に在らしめ、相去ること、或は二百三百里、その王、巡歷して行き、毎月一處、冬寒の時は、三月徙らず、王位必ずしも子に傳へず、子弟任に堪ふれば、死して便ち之に授く。その國、車馬なく、輿あり、駝馬多し。刑を用ふる嚴急、偷盜多少となく、皆腰斬す。一を盜めば十を責む。死するとき、富者は石を累ねて藏となし、貧者は地を掘つて隨身諸物を埋め、皆冢内に置く。その人、凶悍にして、能く鬪戰し、西域の康居・于闐・沙勒・安息及び諸小國三十許、皆之に役屬せしといふ。

その極盛

梁の武帝天監の初、嚈噠兵を出して、高車を擊ち、その王侯倍窮奇を殺し、その子彌俄突を擁立し、柔然と戰はしめ、之を蒲類海に敗り、佗汗可汗を殺す。その十六年佗汗可汗の子醜奴立つて、豆羅伏跋可汗と號し、勇健善く兵を用ひ、高車を擊つて大に之を敗り、彌俄突を殺し、父の讎を報ゐ、その頭を以て飲器となし、再び國を興すや、彌俄突の部衆、悉く遁れて嚈噠に入る。數年を經、嚈噠、彌俄突の弟伊匐を聽るして、國に還らしむ。伊匐、表を魏に奉じ、拜されて鎮西將軍開國公高車王となり、因つて又、柔然と爭ふ。梁の普通三年に至りて、柔然の婆羅門可汗、魏に叛き、亡げて嚈噠に歸し、魏の平西長史費穆と戰ひしが、涼州軍の爲に執へられ、後、洛陽に死せしこと、かつて前に述べたるが如し。柔然・高車、蟠蜂相爭ふの間、嚈噠は、漁夫の利を擅にし、その勢、最も盛なり。

その衰滅

嚈噠極盛時代の版圖、南は印度河口に抵り、北は　爾河に及び、東は天山南路の殆んど全部を併略し、西は波斯を歷し、安息王朝の振はざるに乘じ、その王位繼承に干渉し、之を羈縻すること百餘年といふ。この間、魏と通じ、使を遣して入朝し、梁の普通五年、獅子一を貢して、高平に至りしも、万俟醜奴の反に遇ひ、因つて留められ、醜奴平いて、京師に送られしが、その後、朝獻通交、遂に絶ゆ。これより先、北印度の烏萇國に、毗訖羅摩迭多大王(即ち超日王)出てゝ、數ば嚈噠を破り、之を印度以外に驅逐せしを以て、嚈噠漸く振はず。加ふるに、突厥の柔然を併すや、又その侵逼する

吐谷渾

ところとなり、且つ西北には波斯の入寇あり、四面敵を受けて、力支ふる能はず。陳の初に方り、突厥の破るところとなり、部落分散し、北朝への職貢、遂に絶え、その地の大部分は、悉く突厥に入り、餘衆各地に聚散するのみ。

突厥の柔然を併せし顚末は、かつて前に述べたり。而して、その嚈噠を破るや、次いで吐谷渾に及ばむとせり。はじめ、宋の元嘉八年、吐谷渾王慕璝、騎三萬を遣し、夏主赫連定を執らへて歸り、之を魏に送り、因つて好をなせしが、後に弟慕延立つや、魏の太武帝、軍を遣して、延を擊ち、大に之を破りしに因り、部落を率ゐて、西、白蘭に走り、于闐を攻破し、南、罽賓に依りしが、七年にして、舊土に還れり。延死して、姪拾寅立ち、兩つながら、宋魏の爵命を受け、居止出入、王者に擬せしを以て、魏人之を忿り、陽平王新成等を遣し、諸軍を督し、道を分つて出でゝ擊ち、虜獲甚だ衆し。拾寅走つて南山を保ち、始めて、伏羅川に邑す、次いで、その孫伏連籌の時に至り、魏の孝文帝、屢ば之を召せども、至らず。而かも、洮陽・泥和の二戍を修めて、兵を置く。魏、兵を遣して、之を伐ち、二戍を拔く。馮太后の喪に及び、人をして、哀を告げしむ。伏連籌、命を拜して、又不恭なり。群臣之を討たむを請ふ。魏王許さず。又その貢物を還さむを請ふ。魏王曰く、貢物は乃ち人臣の禮、今にして受けざれば、これ之を棄絶す。彼自ら新にせむと欲すと雖も、その路、由るなし、と。因つて命じて、洮陽・泥和の俘を還さしむ。こゝに於て、伏連籌、その世子賀慮頭をして、魏に入朝せしむ。梁の普通五年、魏の秦州の人、莫折大提及びその子念生の反をなすや、河西の道絶ゆ。涼州城の人、萬千菩提等、東、念生に應じ、刺史宋穎を囚ふ。穎、密に使を遣して援を伏連籌に求む。伏連籌、親ら大衆を率ゐて、之を救ひ、遂に保全を得たり。その後、關徼通ぜず、貢獻遂に絶ゆ。伏連籌死して、子夸呂立ち、はじめて、自ら號して可汗となし、伏俟城に居る。青海の西十五里に在り、城廓ありと雖も、而かも、居らず、恒に穹廬に處り、水草に隨つて畜牧す。その地、東西三千里、南北千餘里、官に王公・僕射・尚書及び郎中・將軍の號あり。梁の大同六年、はじめて使を遣し、道を柔然に假りて、東魏に聘す、すでにして又、西魏に通ぜしも、寇掠已まず、緣邊多く、其害を被る。廢帝の時、周の文帝、大兵を勒して、姑臧に至る。夸呂震懼、方物を貢す。この歲、又齊に通ず。涼州刺史史寧、その還るを覘うて、之を襲ひ、次いで、突厥の木杆可汗と兵を率ゐて之を擊ち、大に勝つ。吐谷渾が突厥

の兵を被る、この時に始まる。

突厥は、西域諸國を侵掠すると同時に兵を移して、東胡の諸國に及べり。前に述べたる如く、契丹は、ツレグス族の一種にして、その先、匈奴の爲に破られて鮮卑山を保ちしが、後又、魏の破るところとなりて、勢太だ振はず。わづかに潢水の南、黄龍の北を保ち、拓跋魏の時に至りて、自ら契丹と號し、その後、魏に內附して、白狼水の東に居りしが、梁の承聖二年、齊の邊塞を侵せしに由り、文帝親戎、北討して平州に至り、遂に西、長塹に趣き、司徒潘相樂に詔して、精騎五千を帥ゐて、東道より、青山に趣き、復た安德王韓軌に詔して、精騎四千を帥ゐて、契丹の走路を斷たしめ、帝親ら山嶺を踰え、奮擊して、大に之を破り、十餘萬口、雜畜數十萬頭を虜にす。相樂又青山に於て、大に契丹を破り、虜にするところの生口、皆諸州に分置す。その後、復た突厥の逼るところとなり、又萬家を以て、高麗に寄る。契丹は、こゝに一時殆んど滅亡の姿をなせり。

契丹

黠戛斯は、古しへの堅昆國なり。伊吾の西、焉耆の北、白山の旁に在り。或は居勿といひ、結骨といひ、その種、丁零を雜ゆ。即ち匈奴の西鄙なり。匈奴、漢の降將李陵を封じて、右賢王となし、衛律を丁零王となす。後、郅支單于、堅昆を此地に破る、東、單于の庭を距ること、七千里、南、車師へは五千里、郅支留都の故に、後世その地を得るもの、訛して、結骨となし、稍にして、結骨と號し、亦た紇扢斯といふ。衆數十萬、勝兵八萬、南は貪漫山に依り、その地、夏は沮洳、冬は積雪、人皆長大、赤髮皙面、綠髮黑髮を以て不祥となし、黑暗なるものは、必ず陵の苗裔といふ。男少くして女多く、環を以て耳を貫く。その俗趫伉、男子勇あり、その手を黥し、女すでに嫁せば、項に黥し、雜居して、淫佚多し。その他、習俗一一縷述せず。堅昆本と彊國にして、地、突厥と等し。突厥女を以て、その酋豪に妻はし、東は骨利幹、南は吐蕃、西南は葛邏祿に至る。

結骨

突厥の極盛

前に述べたる如く、突厥は、匈奴の別種にして、土耳古族中、最も慓悍勁烈なるものなり。木杆可汗すでに柔然を亡ぼせし後、又西、嚈噠を破り、東、契丹を走らし、北、黠戛斯を并せ、梁の太平元年に至り、道を涼州に假りて、吐谷渾を襲ひ、その地の刺史史寧、之に隨ふ。吐谷渾、南山に奔る。寧曰く、樹敦(西寧府邊外曼頭山北賀眞の二城、吐

谷渾の巣穴なり、その本根を拔けば、餘衆自ら破れむ、と。木杆之に從ひ、寧と道を分つて、二城を破り、復た與に青海に會す。こゝに於て、その地、東は遼東より、西は西海即ちアラル海に至り、長さ萬里。南は沙漠より、北は北海、即ちバイカル湖に至り、五六千里、皆屬し、中國に抗衡し、後魏と齊を討つて、並州に至りしことあり。

その風俗

史に突厥の風俗を記する、甚だ詳かなり。その俗、髮を被つて左衽、穹廬旃帳、隨つて水草を逐うて遷徙し、畜牧射獵を以て事となし、肉を食ひ、酪を飲み、身に裘褐を衣、老を賤み、壯を貴び、廉耻寡く、禮儀なきこと、なほ古しへの匈奴のごとし。その主、はじめて立つや、近侍重臣等、之を輿するに氈を以てし、日に隨つて轉ずること九回、毎回臣下皆拜をなし、拜し訖れば、乃ち扶けて馬に乘らしめ、帛を以て其頸を絞し、纔に絶に至らざらしめ、然る後に釋し、急に之に問うて曰く、儞能く幾年の可汗となる、と。その主、すでに、神情瞀亂、多少を詳定する能はず、臣下等、その言ふところに隨ひ、以て修短の數を驗す。大官には、葉護あり、次は特勒、次は俟利發、次は吐毛發、及び餘の小官、凡そ二十八等、皆世之を爲す。兵器には、角弓鳴鏑、甲矟刀劍あり。佩飾は、兼ねて伏突あり。旗纛の上、金狼頭を施す、侍衛の士、之を附離といふ。夏言亦た狼なり。蓋し狼生れて、志、舊を忘れざるに本づく。騎射を善くし、性殘忍、文字なく、その兵馬及び諸稅雜畜を徵發するや、木を刻して數となし、一の金鏃箭と併せ、蠟にて之を封信し、以て信契となし、月の將に滿たむとするを候して、寇抄をなす。その刑法、反叛殺人及び人の婦を姦し馬絆を盜むもの、皆死し、淫なるものは、勢を割いて之を腰斬し、人の女を姦するものは、重く財物を責め、即ち其女を以て、之に妻はす。鬪つて人を傷くものは、輕重に隨つて、物を輸し、目を傷くものは、償ふに女を以てし、女なければ婦財を輸し、支體を折くものは、馬を輸し、馬及び雜物を盜むものは、各十餘倍にして、之を徵す。死すれば、屍を帳に停め、子孫及び親屬男子、各羊馬を殺し、帳前に陳して之を祭り、帳を遶つて、馬を奔らすこと七匝、帳門に至り、刀を以て、面を剺き、且つ哭し、血淚ともに流る。かくの如きもの七度、乃ち止み、日を擇んで、亡者乘るところの馬及び服用を經たるの物を取り、屍に併せて、ともに之を焚き、その餘灰を收め、時を待つて葬る。春夏に死するものは、草木の黃落を候し、秋冬に死するものは、華茂を候し、然る後、坎して之を瘞む。葬るの日、親屬祭を設け、及び馬を走らし、面を剺ぐこと、初死の儀の如く、表して塋を爲り、屋中に立て、死者の形儀及

びその生時戰陣するところの狀を圖し、常に一人を殺せば、一石を立て、往々にして千百に至るものあり。又以て之を祭り、羊馬の頭、盡く標上に懸く。この日や、男女皆盛服して、葬所に會す。男、女に悅愛するものあれば、即ち人を遣して、聘問す。その父母、多く違はざるなり。父母伯叔、死すれば、子弟及び姪等、その後母世叔母・嫂を妻とす。唯だ尊者は、下淫するを得ず、移徙常なく、而かも各地あり。可汗恒に都斤山に居り、牙帳東に開く、蓋し日の出づるところを敬するなり。毎歲諸貴人を率ゐて、その先窟を祭り、又五月中旬を以て、他人を集めて禮拜し、天神を祭る。都斤の西、五百里に、高山あり、迥かに上に出でゝ、草樹なし。謂うて勃登凝梨となす。夏言地神なり。その書字、胡に類する、至れり、年曆を知らず、唯だ草青きを以て記となす。男子樗蒲を好み、女子は踏鞠し、馬酷を飲んで醉を取り、歌呼相對し、鬼　を敬し、　を信じ、兵死を重んじ、病終を耻とする、大抵匈奴と同じ。

この時、支那本部に在りては、北朝周齊二國に分れ、江南の陳と相並んで、三國巴字の爭をなすに際せり。陳の天嘉四年、周の武帝、使を突厥に遣し、木杆可汗の女を納れ、立てゝ后となし、翌年、その騎十萬の援を得て、大に晉陽に戰ひしが、突厥の兵

突厥と周齊

震駭し、引いて西山に上りしが爲に、功を成さず。可汗遂に兵を縱つて、大に掠めて還る。次いで、又使を遣し來り獻じ、更に東伐を請ひしに因り、周主師を出せしも、又利あらず。ずてにして、突厥齊に貳あり。幾もなくして、木杆可汗死し、その子大邏便を捨てゝ、その弟を立つ、是を他鉢可汗となす。他鉢、亡兄乙息記可汗の子攝圖を以て、爾伏可汗となし、その東面を統べしめ、又その弟褥但可汗を以て步離可汗となし、西方に居らしむ。木杆より以來、その國富强、中夏を凌轢するの志あり、周すてに之と和親し、歲に綵絮錦綵十萬段を給し、突厥の京師に在るもの、又待つに優禮を以てし、錦を衣、肉を食はしめ、常に千を以て數ふ。齊人その寇掠を懼れ、亦た府藏を傾け、以て之に給す。他鉢彌よ復た驕傲、乃ちその徒屬に令して曰く、たゞ我が南に在るの兩個兒をして孝順ならしむれば、何ぞ物なきを憂へむや、と。齊に沙門惠琳といふものあり、掠められて、突厥の中に入る。因つて他鉢に謂つて曰く、齊國富强、皆佛法あるが爲なり、と。遂に說くに、因緣果報の理を以てす。他鉢聞いて之を信じ、一伽藍を建て、使を遣して、齊に聘し、淨名・涅槃・華嚴等の經十八、幷に誦律を求めしめ、他鉢亦た躬ら齊戒し、塔を遶つて道を行ひ、內地に生まれざりしを恨む。陳の大

沙鉢略

獻九年、齊の定州刺史范陽王高紹義、馬邑より之に奔る。他鉢、紹義を立てゝ、齊帝となし、所部を召集し、之が爲に讎を復せむといひ、その翌年、遂に入寇す。幽州柱國劉雄拒戰し、兵敗れて之に死す。武帝親ら六軍を總べ、將に北伐せむとせしが、帝崩じて、乃ち師を班へす。この冬、他鉢復た邊に寇し、酒泉を圍み、大に掠めて去る。幾もなくして、他鉢復た和親を請ひしに因り、周の宣帝、趙王招の女を策して千金公主となし、以て之に嫁せしめ、幷に紹義を執へて、闕に送らしむ。他鉢許さず、仍つて幷州に寇せしが、尋いて、使を遣して、奏獻し、且つ公主を迎へて親をなす。而かも紹義は、尙ほ留めて遣らず。帝、賀若誼をして、往いて之に諭さしめ、はじめて紹義を送る。他鉢、且さに死せむとするや、その子菟邏に謂つて曰く、吾聞く、親は父子に過ぐるなし、吾が兄、その子を親とせずして、位を我に委す、我死せば汝當に大邏便を避くべし、と。卒するに及び、國中將に大邏便を立てむとす。その母賤きを以て、衆服せず。竟に菟邏を立てゝ嗣となす。大邏便、立つを得ず、心、菟邏に服せず、每に人をして之を詈辱せしむ。菟邏、制する能はず、因つて國を以て、攝圖に讓る。國中相與に議して曰く、四可汗の子、攝圖最も賢なり、と。因つて迎へて之を立て、伊利俱盧設莫何始波羅可汗と號し、一に沙鉢略と號し、都斤山に居る。菟邏降つて獨洛水に居り、第三可汗と稱す。大邏便、乃ち沙鉢略に謂つて曰く、我と爾と、ともに可汗の子、各父の後を承く。爾今極めて尊、我ひとり無位なるは何ぞや、と。沙鉢略、之を患ひ、以て阿波可汗となし、還つて所部を略し、從父玷厥、達頭可汗と號し、西方を統ぶ。沙鉢略、勇にして衆を得たり、北夷皆之に歸服す。隋の文帝、禪を受け、之を待つこと甚だ薄し。北夷大に怨む。會ま營州刺史高寶寧、亂を作す。沙鉢略、之と軍を合し、攻めて、臨渝鎭を陷る。帝、緣邊に敕し、保障を修し、長城を峻にし、以て之に備ふ。沙鉢略の妻千金公主、絕滅を傷む。これに由つて、衆を悉くして、來り寇す。控弦の士四十萬。帝、柱國馮昱屯乙汨蘭州總督叱李崇をして、幽州に屯せしめ、奚長壽に達し、周槃に據り、皆虜の爲に敗らる。こゝに於て、兵を縱つて、木硤石門、兩道より來り寇し、武威・天水・安定・金城・上郡・弘化・延安の諸郡、六畜咸な盡く。帝、詔を下して、之を討つ。こゝに於て、衛王爽等に命じて、行軍元帥と爲し、八道を分ち、塞を出でゝ、之を擊たしむ。爽、總管李充等を督し、朔州道より出でゝ、沙鉢略と白道に遇ふ。充、爽に言て曰く、突厥驟ば勝に狃れ、必ず我を輕じて備なからむ。精兵を以て之を襲はゞ、破るべきなり、と。諸將多く以て疑と

なす。唯だ長史李徹、之を贊成す、遂に充と精騎五千を帥ゐ、突厥を掩擊して、大に之を破る。沙鉢略、服すところの金甲を棄てゝ遁る。その軍、食なく、骨を粉して、糧となし、加ふるに、疾疫を以てし、死者甚だ衆し。幽州總管陰壽、羅龍塞を出てゝ、高寶寧を擊つ。突厥救ふ能はず。寶寧、その下の殺すところとなり。和龍悉く平ぐ。

長孫晟の建議

はじめ、周、長孫晟をして、千金公主を突厥に送らしむ。突厥、之を留めて、歳を竟ふ。晟、因つて悉く山川の形勢、部衆の彊弱を知る。還るに及び、隋主に上書し、密に籌策を運らし、以て諸部を離れしめむを請ふ。以爲へらく、玷厥の攝圖に於ける、兵彊くして位下、外は名相屬し、内は隙すでに彰はる、攝圖の弟處羅侯、姦多くして勢弱、衆心を曲取す。阿波首鼠、その間に介在し、唯だ彊是れ與みし、未だ定心あらず。今宜しく遠交して、近攻し、彊を離れて弱に合し、使を玷厥に通じ、説いて阿波を合し、又處羅を引き、奚・靺を連ね、攝圖をして、首尾猜嫌、腹心離阻せしむべく、而して、釁に乘じて、之を討てば、一舉して、その國を空うすべし、と。隋主、書を省て、大に悅び、皆納用す。これに由つて、諸部果して相猜貳す。晟、復た反間を縱行し、達頭・阿波・沙鉢略と、遂に兵を連ねて、已まず。こゝに至りて、達頭降を隋に請ふ。

莫何可汗

達頭、屢ば沙鉢略を伐ち、復た故地を得、兵勢日に彊く、沙鉢略の部衆多く叛いて之に歸し、又數ば隋の爲に敗らる。こゝに於て、和親を約し、千金公主自ら請うて、姓を楊氏と改め、隋主の女となり、隋更め封じて大義公主となす。

隋の開皇七年、沙鉢略の死するや、隋爲に朝を廢すること三日。遺令して、その弟葉護處羅侯を立つ。處羅侯、沙鉢略の子雍虞閭と相讓るもの五六、遂に立つ、是を莫何可汗となす。乃ち雍虞閭を以て葉護となす。莫何勇にして謀あり、隋の賜ふところの旗鼓を以て、西、阿波を擊つ。阿波の衆、以て隋兵之を助くとなし、多く風を望んで降附し、遂に阿波を生擒す。阿波上書して、その死生の命を請ふ。隋主以て長孫晟に問ふ。晟對へて曰く、阿波の惡、國家に負きしに非ず、その困窮に因り、取つて戮をなせば、恐らくは、招遠の道に非ず。兩つながら、之を存するに如かず、と。僕射高熲、亦た宜しく存養し、以て寛大を示すべきを言ひ、隋主之に從ふ。後、莫何西征し、流矢に中つて死し、その衆、雍虞閭を奉じて、頡伽施多那都藍可汗となす。

その翌、開皇元年、隋主陳を滅ぼし、江南を下し、はじめて、四海を統一し、その内治、亦た觀るべきものあり。

官制の改革

第八十六章　隋初の治

はじめ、文帝の位に即くや、崔仲方、之に勸め、周の六官を除き、漢魏の舊に依らしむ。こゝに於て、三師(太師・太傅・太保)三公(太尉・司徒・司空)及び尚書・門下・內史・秘書・內侍の五省を置く。尚書には、左右僕射あり。統べざるところなく、門下には、納言・給事等の官を置き、內史には監・令等を置き、秘書は著作を領し、內侍は宦官なり。この外、御史は彈劾を主り、都水は作造を主り、合せて二臺となし、太常・光祿・衛尉・宗正・太僕・大理・鴻臚・司農・太府・國子・將作の十一寺、左右衛・左右武衛・左右領・左右監門・左右領軍の十二府あり、以て司を分つて職を統べ、又柱國・大將軍・開府儀同三司、皆上あり。凡そ八等。都督大あり、副あり、凡そ二等。合せて十一等の勳官を置き、以て勤勞に酬ゐ、特進より、左右光祿・金紫光祿・銀青光祿・朝議大夫を經て、朝散大夫に至るまで、七等の散官を置き、以て文武の德聲あるものに加へ、侍中を改めて納言となし、すでにして、度支尚書を改めて民部となし、都官尚書を刑部となし、左僕射をして吏農兵三部を判せしめ、右僕射をして民刑工三部を判せしめ、光祿・衛尉・鴻臚寺及び都水臺を廢す。

幣制

この歲、散樂を放ち雜戲を禁じ、次いで、五銖錢を鑄る。はじめ、周齊鑄るところの錢、凡そ四等、民間の私錢に及びては、名品甚だ衆く、輕重等しからず。隋主之を患ひ、更めて五銖錢を鑄る、背面肉好く、皆周郭あり、一千毎に重四觔二兩、悉く古錢を禁じ、私錢樣の如くならざるものは、官に沒して、銷毀す、これより錢幣はじめて一、民間之を便とす。

法制

周の法たるや、齊律に比し、煩にして要ならず。こゝに於て、高熲・鄭譯及び楊素・裴政等に命じ、更めて修定改練を加へ、典故に習ひ、從政に達す。乃ち魏晉の舊律を采り、下は齊梁に至り、沿革重輕、その折衷を取り、梟轘鞭法を去り、謀叛に非ざれば族罪なく、始めて、死刑二、絞斬を制し、流刑は三にして、二千里より三千里に至り、徒刑は五にして一年より三年に至り、杖刑は五にして六十より百に至り、笞刑は五にして、十より五十に至り、又議請減贖官當の科を制し、以て士大夫を優にし、訊囚の酷法を除き、民に枉屈あり、縣爲に理せざるものは、次を以て郡州省を經るを聽し、若し仍ほ理せられざれば、闕に詣つて伸訴するを聽るす。これより、法制遂に定

稅法及び其他

まる。

開皇三年、新都成つて之に遷るや、はじめて令し、民二十一を成丁とし、役を減ずるものは、歳に二十日となし、調絹を二丈となし、周末、酒坊・盬池・盬井を置するこゝに至りて皆之を罷む。尋て、秘書監牛弘、上表して曰く、典籍屢ば喪亂を經、卒に散逸多く、周氏書を聚むる、僅に萬卷に盈ち、齊を平げ、得裁するところ、五千を益す。興集の期、屬膺す。聖世國を爲むるの本、これより先なるはなし、と。隋主之に從ひ、詔して書一卷を獻ずれば、縑一匹を賚す。隋主、長安倉廩尚ほ虛しきを以て、詔して、西は蒲陝より、東は衛汴に至るまで、水次の十三州、丁を募つて米を運び、又衛州に於て、黎陽倉を置き、陝州には、常平倉を置き、華州には廣通倉を置き、轉じて相灌し、關東及び汾晉の粟を輸漕して、長安に給す。その翌、渭水沙多く深淺常ならず、漕者之に苦むを以て、宇文愷に詔し、渠を引いて、大興城東より潼關に至るまで、三百餘里、廣通渠と名づけ、漕運利を通じ、關內之に依る。

分田の改革

陳を亡ぼすの翌、開皇十年、詔して曰く、魏末喪亂、軍人權りに坊府を置き、南征北伐、居處定まるなし、今悉く州縣に屬し、その聖田籍帳、一に民と同じうせむ。軍府の統領、宜しく舊式に依るべし、と。仍つて、緣邊を罷め、新に軍府を置く。その後、制して、民五年役を免じて、庸を收めしめ、六十に至れば、并せて、その庸を除く。こゝに於て、戶口歳に增し、京輔及び三河、地少くして人衆く、衣食給せず。帝乃ち使を發して、四出し、天下の田を均うし、その狹鄉、每丁總に二十畝に至り、老少又少し。これより先、臺省府寺及び諸州、皆公廨錢を置き、息を收め、給を取る。工部尚書蘇孝慈、以爲へらく、官司出舉して生を興す、百姓を擾亂し、風俗を敗損す、請ふ皆禁じ、地を給し、以て農を營ましめむ、と。仍つて、はじめて公卿以下に詔し、皆職田を給し、生を治めて民と利を爭ふことなからしめ、後、又工商をして仕進を得ざらしむ。

雅樂の制定

これより先、踐祚の初、柱國鄭譯、雅樂を修正せむことを請ひ、五音を調して、五夏・二舞・登歌・房內等、十四調となし、賓祭に之を用ひ、太常に清商署を置き、以て之を掌らしむ。こゝに至り、牛弘又奏す、中國の舊音、多く、江左に在り、今梁陳の舊樂を得たり、請ふ修緝を加へ、以て雅樂を備へむ。その後魏・後周の樂は邊裔の聲を雜有す、請ふ悉く之を停めむ、と。乃ち弘に詔し、許善心・姚察及び虞世南と之を參定せしむ。協

律郎祖孝孫、陳の陽山太守毛爽に從つて、京房の律法を受く。牛弘、孝孫をして、雅樂を參定せしめ、布管飛灰順月、皆驗す。又每律五音を生じ、十二律六十音となし、因つて、之を六にして、三百六十音となし、一歲の日に分直し、以て七音に配す。而して旋相宮となすの法、これに由つて著明なり。弘等乃ち奏請して、復た施宮の法を用ひむとす。帝聽かず。弘等復た帝の意に附き、前代の金石を銷毀し、以て異議を息め、又武舞を作り、以て功德を象る。こゝに於て、樂成り、十四年四月、詔して之を行ひ、乃ち民間造るところの繁聲を禁ず。これより先、樂工萬寶常、鐘律に妙達す。帝、諸樂器を造らしむ。その聲雅淡、時人の好むところとならず、竟に寢んで行はれず。こゝに及びて、新樂成るや、寶常之を聞き、泫然として泣いて曰く、淫厲にして哀し、天下久しからずして盡きむと。寶常竟に餓死す。その死せむとするや、悉く其書を取り、之を燒いて曰く、これを用ひて何をか爲さむと。

はじめ張賓の歷、すでに行はる。劉孝孫及び劉焯、並に其失を言ふ。賓方に龍あり、劉輝之に附して、孝孫等を斥罷す。その後、賓卒するや、孝孫復た其事を上る。詔して太史に直し、累年調せず。乃ち其書を抱き、弟子をして、輿櫬せしめ、闕下に詣つて伏哭す。執法拘へて之を奏す。帝以て何妥に問ふ。妥その善きを言ひ、張冑元とともに賓の歷を校せしむ。之に久うして、定まらず。帝令して、日食の事を參問す。楊素等曰く、太史奏す、日食二十有五、皆驗なし、と。而して、冑元の刻するところ妙中し、孝孫驗亦た過半なり、と。こゝに於て、帝、孝孫・冑元等を引いて、親ら之を勞す。孝孫先づ劉暉を斬り、乃ち歷を定むべきを請ふ。帝、擇ばず、又之を罷むず。てにして、楊素・牛弘等、復た冑元の歷術を薦む。帝、素をして術數の人と、立どころに六十一事を議せしめ、皆舊法通じ難きもの、劉暉と冑元とをして、之を辨析せしむ。暉は一も答ふるところなく、冑元は通ずるもの五十四、即ち太史令に拜し、新術を參定せしむ。十七年四月新歷成り、之を頒ち、暉等除名せらる。

仁壽元年詔し、學徒生徒多くして精ならざるを以て、唯だ國子學生七十人を簡留し、太學四門及び州縣學、並に廢す。劉炫上表して、切諫すれども、聽かず。尋いで國子を改めて、太學となす。これより先、識緯を藏するを禁じ、又猫鬼蠱毒厭魅野道を畜ふを禁ず。はじめ、獨孤皇后の弟、延州刺史陁、婢あり、猫鬼に事へ、能く之を使うて人を殺す。會ま后、楊素の妻鄭氏とともに疾あり。醫皆曰く、猫鬼の疾なり、と。帝、陁の

歷法の制定

學制

爲すところたるを意ひ、高熲等をして、之を雜治せしめ、具さに、其實を得、詔して、陁の夫婦、皆死を賜ふ。后之が爲に請うて曰く、陁もし盛政民を害すれば、妾敢て言はず、今妾の身の爲にす、敢て其命を請ふ、と。陁の弟整、亦た闕に詣つて哀を求む。こゝに於て、陁の死を免じ、詔して、今より犯すものあれば、四裔に投ず。然れども、帝晩年に及びて、深く佛道鬼神を信じ、詔して、佛天尊及び神像を毀つを禁じ、諸州の名山に僧寺を建てゝ莊田を賜ひ、京師の法界尼寺に浮圖を造り、佛舍利を安置し、經論を譯すこと、甚だ多し。

文帝の治法

文帝性嚴重にして、政事を勤め、令行はれ、禁止む。財に嗇なりと雖も、功を賞して吝ならず。百姓を愛養し、農桑を勸課し、徭を輕くし、賦を薄くし、自ら奉ずること儉薄。乘輿服御、故弊あるも、補修して用ひ、享宴に非ざれば、食すところ一肉に過ぎず、後宮皆澣濯の衣を着く。故を以て、受禪の初、民戸四百萬に滿たざりしも、末年には、八百萬に踰え、その間、諸方の叛亂、二三之ありと雖も、皆直に剿平に歸し、その治世を通じて、隋室は、益す富强に赴き、從つて、國威亦た塞外に及びたり。

第八十七章　文帝四方の經略

江表の亂

江表は、東晉より以來、刑法疏緩、陳を平ぐるの後、盡く其政を反し、蘇威復た五教を作り、民をして之を誦せしむ。士民嗟怨す。すでにして民間復た訛言す、隋、之を徙して關に入れむと欲す、と。遠近驚駭す。開皇十年、冬、越州の高智慧、蘇州の沈元憎、皆兵を擧げて反し、自ら天子と稱し、州縣を攻陷し、陳の故鄉、大抵皆反し、縣令を執らへ、之を殺して曰く、更に能く儂をして五教を誦せしむるか、と。こゝに於て、詔して、楊素を以て、行軍總管となし、之を討たしむ。素、舟師を帥ゐ、楊子津より入つて賊を擊つ。元憎、敗走す。追うて、之を擒にす。智慧、浙江の東岸に據つて、營を爲り、周亘百餘里、船艦江を被ふ。子總管來護兒、輕舸數百を以て直に江岸に登り、襲うて其營を破り、因つて、火を縱ち、烟焰天に漲る。素、兵を縱つて奮擊し、大に之を破る。智慧、逃れて海に入り、走つて閩越を保つ。遂に追うて、海に泛び、泉州に奄至す、賊衆皆散ず。素、兵を分つて、賊黨を追捕し、執らへて智慧を送つて之を斬り、江南遂に定る。

番禺の叛

この歲、番禺の夷王仲宣反す、嶺南の首領、多く之に應じ、兵を引いて、廣州を圍み、

章洸流失に中つて死す。詔して、その副慕容三藏を以て、軍事を檢校せしめ、又給事郎裴矩に詔し、嶺南を巡撫せしむ。矩、南康に至り、兵數千人を得、擊つて仲宣を斬り、別將進んで、南海に至る。高凉洗夫人、その孫を遣し、三藏等に會し、合せて仲宣を擊たしむ。仲宣の衆潰ゆ。洗氏親ら甲を被り、白馬に乘じ、錦繖を張り、殼を引くの騎、衛從す。裴矩、二十餘州を巡撫し、蒼梧の首領陳坦等、皆來つて謁見す。矩、制を承け、署して刺史縣令となし、還つて、その部落を統べしむ。嶺表定まる。帝、矩を以て、民部侍郎となし、馮盎を以て高州刺史となし、馮寶に譙國公を贈り、洗氏を冊して譙國夫人となし、幕府を開き、官屬を置き、印章を給し、便宜事を聽くを許す。

南蠻の征平

十七年、南寧蠻を討つ。はじめ、梁睿、王謙を平げ、夷獠皆附く。唯だ南寧州の酋帥爨震、服せず。睿上疏し、平蜀の衆に因つて、之を略定せむを請ふ。帝未だ許さず。こゝに至り、太平公史萬歲を以て、行軍總管となし、衆を帥ゐて、之を擊たしめ、蜻蛉川(姚安府姚川南)より入り、諸葛亮の紀功碑を過ぐ。背に銘あり曰く、萬歲之後、勝我者過此、と。萬歲その碑を仆さしめて進み、西、洱河を渡り、渠濫川に入り、行くこと千餘里、その三十餘部を破り、男女二萬餘口を虜にす。諸夷大に懼れ、使をして、降を請はしめ、明珠徑寸なるを獻ず。こゝに於て、石を勒して、隋德を頌す。萬歲、その酋長爨翫を帥ゐて入朝せむを請ふ。翫、萬歲に賂す。萬歲之を捨く。

この歲、桂州の俚帥李光伏、亂をなす。周法尙を遣して、討つて之を斬る。帝、夷越數ば反するを以て、令狐熙を桂州總管となし、許すに、便宜夷に從ひ、制授を承くるを以てす。熙、部に至り、大に恩信を弘む。その溪洞の渠帥、更も相謂つて曰く、前時の總管皆兵威を以て、相脅す。今や乃ち手を以て相諭す。我輩其れ違ふべけむや、と。こゝに於て、相帥ゐて歸附す。これより先、州縣生、長吏を梗し、多く總管府に寄治す。熙、悉く之を遣し、爲に城邑を建て、學校を開き、華　咸化す。

吐谷渾と高麗

更に眼を轉じ、文帝の對外政策に就いて觀るところあるを得むか。吐谷渾の夸呂可汗死し、子世伏立ち、方物を獻ず。帝、光化公主を以て之に妻はす。開皇十七年、國內大に亂れ、國人世伏を殺し、その弟伏允を立てゝ主となし、使を遣して、陳謝し、且つ俗に依つて、公主を尙せむことを請ひ、これより朝貢絕えず。その翌十八年、高麗遼西に寇せしに由り、漢王諒をして、兵に將として、之を討たしめしが、克たず、むな

しく兵を罷む。これ實に後年煬帝が敗亡の先にして、乘ねて又、漢韓兩族が、我が日本と、朝鮮の地に於て、最初の交渉をなすに至りし因といふべく、朝鮮王國の歴史は、多少細微なる論述を要するを以て、次に特に一章を設くることゝなし、こゝには、次いで突厥との關係に就いて、述ぶところあらむとす。

大義公主

はじめ、帝の陳を滅ぼすや、陳叔寶の屏風を以て、突厥の大義公主に賜ふ。公主、その宗國の覆りしを以て、常に不平なり。因つて、屏風に書して、詩を爲り、陳の亡を叙し、以て自ら寄す。曰く、盛衰等朝暮、世道若浮萍、榮華實難守、池臺終自平、富貴今安在、空事寫丹青、杯酒恒無樂、絃歌詎有聲、余本皇家子、飄流入虜廷、一朝覩成敗、懐抱忽縱横、古來共如此、非我獨申名、唯有昭君曲、偏傷遠嫁情、と。帝聞いて、之を惡み、禮賜漸く薄し。公主遂に都藍可汗を溺惑せしめ、頗る邊患をなす。帝、將軍長孫晟を遣して、突厥に使し、因つて公主の私事を發して、之を廢す。內史侍郎裴矩、請うて都藍に說き、公主を殺さしむ。時に莫何可汗の子染干、突利可汗と號して、北方に居り、使を遣して、婚を求む。帝、矩をして之に謂はしめて曰く、能く大義公主を殺さば、乃ち婚を許さむ、と。突利遂に公主を都藍に譖す、都藍因て怒を發して公主を殺し、更に表して、

突利可汗

婚を請ふ。朝議將に之を許さむとす。長孫晟曰く、雍虞閭、反覆信なし、玷厥と隙あるを以ての故に國家に依倚せむと欲す、與に婚をなすと雖も、終に當に叛き去るべし。今若し主を尙せば、寵靈を承藉し、玷厥染干、必ずその徵發を受けむ、彊くして更に反せば、後恐らくは圖り難からむ。且つ染干は處羅侯の子、素より誠款あり、前に嘗て婚を乞ふ、之を許し、招いて南に徙らしむるに如かず。兵少く力弱ければ、以て撫馴し易く、雍虞閭に敵し、以て邊扞たらしめむ、と。帝曰く、善し、と。復た晟を遣して、染干を慰諭し、公主を尙するを許す。十七年七月、突利來つて女を逆ふ。帝之を太常に舍し、六禮を敎習し、妻はすに宗女安義公主を以てす。帝、都藍を離間せむと欲するが故に、特に其禮を厚うし、長孫晟をして、之に說かしめ、衆を帥ゐて、南に徙り、度斤の舊鎭に居らしむ。

突厥の都藍可汗、突利可汗が主を尙し賜賚優厚なるを聞き、怒つて曰く、我は大可汗なり、反つて染干に如かざるか、と。こゝに於て、朝貢遂に絶え、亟ば邊鄙を掠む。突利伺ひ知り、輙ち奏聞せしむ。十九年二月、突利、都藍が大同城(吳喇忒旗、故の天德軍城西南)を攻めむと欲するを奏す。詔して、漢王諒を以て元帥となし、高熲は朔州

突厥の大敗

道より出で、楊素は靈州道より出で、燕榮は幽州道より出で、以て都藍を討ち、皆諒が節度を取る。然れども、諒遂に行かず。都藍之を聞いて、達頭可汗と盟を結び、兵を合せ、突利を掩擊して、大に之を敗る。突利の部落散亡し、夜、長孫晟と五騎を以て南走し、旦に及び、數百騎を收め得、その下と玷厥に走らむを謀る。晟、之を知り、密に使者を遣して、伏遠鎮に入り、連に烽を擧げしむ。突利大に懼れて、投誠す。晟、その達官執室を留めて其衆を領せしめ、自ら突利を將ゐ、驛を馳せて入朝し、四月長安に至る。帝大に喜び、厚く之を待ち、晟を以て、左勳衛驍騎將軍持節護突厥となす。高熲、柱國趙仲卿をして、兵三千を將ゐて、前鋒となり、突厥と戰はしめ、大に之を破る。突厥復た大擧して、至る。仲卿方陣を爲り、四面拒戰すること、凡そ五日、會ま高熲の大兵至り、之を合擊し、突厥敗走す。追奔七百餘里にして還る。楊素の軍、達頭と遇ふ。これより先、諸將突厥と戰ひ、その騎兵の奔突を慮り、皆戎車步騎を以て相參し、鹿角を設けて、方陣を爲り、騎、その內に在り。素曰く、これ自ら固うするの道、未だ以て勝を取るに足らざるなり、と。こゝに於て、騎陣を爲る。達頭喜んで曰く、天、我に賜ふなり、と。馬を下り、天を仰いで拜し、騎兵十萬を率ゐて、直に前む。周羅喉曰く、賊陣未だ整はず、請ふ之を擊たむ、と。先づ精騎を率ゐて、逆へ戰ひ、素、大兵を以て是に繼ぐ、突厥大に敗れ、殺傷勝えて數ふべからず。

史萬歲の戰功とその寃死

その冬十月、突利を以て啓民可汗となす。突厥、啓民に歸するもの、男女萬餘。帝、長孫晟に命じ、朔州に於て、大利城(歸化城西)を築き、以て之に處らしむ。時に安義公主、すでに卒せしに因り、復た宗女義成公主を以て之に妻はす。晟、奏して、五原に徙し、河を以て固となし、夏勝の間に于いて、東西河に至り、南北四百餘里、堀つて橫塹を爲り、その內に處り、畜收を得せしめむを請ふ。帝之に從ひ、又趙仲卿をして、屯兵二萬、啓民の爲に、達頭を防がしむ。その十二月、帝、楊素・史萬歲を遣し、道を分つて、都藍を擊たしむ。素、都藍を擊ちて出でず、都藍之を下の數すところとなり、達頭自立して步迦可汗となり、その國、大に亂る。長孫晟、請うて、染干の部下を遣し、道を分つて、招慰す。帝、之に從ひ、降者甚だ衆し。明年四月、步迦、塞を犯す。晉王廣等に詔して之を擊たしむ。史萬歲、塞を出でゝ、虜と遇ふ。虜問ふ、將、誰と爲す、と。候騎報じて曰く、史萬歲なり、と。步迦懼れて引いて去る。萬歲、馳せて追ひ、大に之を破り、遂に北、磧に入ること數百里にして還る。これより、突厥大に亂れ、鐵勒・僕骨等十餘部、皆叛いて、啓民に降り、

歩迦、遠く吐谷渾に走る。史萬歳、すでに功を立てゝ還るや、楊素之を忌み、奏して其功を寢む。會ま太子勇を廢するの事あり。萬歳方に將士と朝堂に在り、寃を稱す。帝問ふ、萬歳何に在る、素曰く、東宮に謁す、と。帝以て然りとなし、之を召す。すでに帝を見るや、將士功あるも朝廷の抑ふるところとなりしを言ひ、詞氣憤厲なり。帝大に怒り、左右をして、之を撲殺せしむ。すでにして悔ゐ、之を追へども及ばず、天下ともに惜す。

太子勇の廢黜

第八十八章　煬帝の即位

文帝の子五人、太子勇を長とし、その下、晉王廣・秦王俊・越王秀・漢王諒といふ。廣は、かつて陳を亡ぼして功あり、諒はさきに高麗の寇を防いで敗れしものなり、はじめ、帝、太子勇をして、政事を參決せしめ、時に損益あるも、帝皆之を納る。勇、性寛厚、率意矯飾なし。帝、素と節儉にして、勇は服用侈靡、かつて蜀鎧を飾る、帝見て悅ばず。後冬至に遇ひ、百官皆勇に詣る。勇、樂を張つて、賀を受く。帝又悅ばず。詔を下して、之を停む。これより、恩寵はじめて衰ふ。勇、內寵多し。昭訓雲氏、尤も幸せらる。その妃元氏、寵なく、疾に遇うて薨ず。獨孤皇后、その他あるを疑ひ、深く以て勇を責む。然れども、昭訓これより遂に內政を專にし、長寧王儼及び平原王裕・安威王筠を生み、諸姬の子又數人、后彌よ平かならず。人をして、勇の過を伺求せしむ。晉王廣、之を知り、彌よ自ら矯飾す。これより、帝、后と廣を愛する、特に諸子に異なれり。廣、揚州より入朝し、將に還らむとし、宮に入り、后に辭し、地に伏して流涕して曰く、臣性愚下、知らず何の罪か、愛を東宮に失し、恒に盛怒を畜へ、鴆毒を加へむと欲するか、と。因つて、又拜し、嗚咽して止む能はず。后、亦た悲自ら勝へず。こゝに於て、意を決して、勇を廢し、廣を立てむを謀る。廣又計を以て、楊素に結び、素入つて宴に侍し、微に晉王の孝悌恭儉、至尊に類するあるを稱し、又太子の不才を言ひ、獨孤后、之を助く。こゝに於て、帝益す勇を疑ふ。二十年十月、帝戎服、兵を陳して、武德殿に御し、百官諸親を集め、勇及び諸子を引いて、殿庭に列せしめ、詔を宣べて、勇及びその男女を廢し、並に庶人となし、その十一月、晉王廣を立てゝ皇太子となす。帝、故の太子勇を東宮に囚へ、廣に付して、之を掌らしむ。勇、頻りに帝を見て寃を申べむことを請ふ、廣、之を遏めて、聞くを得せしめず。

蜀王秀

晉王廣、すでに太子となり、諸弟三人あり。すでにして、秦王俊薨ず。蜀王秀、容貌瓌傑、膽氣あり、武藝を好み、益州總管となり、頗る奢れり。又潛かに廣の太子となりしを聞き、意甚だ平かならず。太子その後患をなさむことを恐れ、陰に楊素をして、其罪を求めて之を譖せしむ。帝、因つて秀を徵して還らしめ、仁壽二年十二月、京師に至る。帝、與に語らず。使をして之を切讓せしむ。秀、罪を謝す。帝曰く、頃ろ秦王財物を糜費するや、我、父道を以て之に訓ゆ、今秀生民を蠹害す、當に君道を以て、之を繩すべし、と。こゝに於て執法者に附す。開府慶整諫めて曰く、庶人勇、すでに廢せられ、秦王すでに薨ず、陛下子を見ること多きなし、何ぞ是の如きに至る。蜀王性甚だ耿介、今重く責められれば、恐らくは自ら全うせず、と。帝大に怒り、其舌を斷たむと欲す。因つて群臣に謂つて曰く、當に秀を市に斬り、以て百姓に謝すべし、と。因つて楊素に命じて、獄を按じて、之を治せしめ、乃ち秀を廢して、庶人となし、之を內侍省に幽す。治書侍御史柳彧、秀と故あり、素、夙憾を以て、之を譖し、除名して民となし、懷遠鎭に戍せしむ。

文帝試ぜらる

楊素、すでに太子及び蜀王を廢し、威權愈よ盛なり。兄弟諸父、並に尙書列卿となり、諸子、位、柱國、刺史に至り、廣く資產を營み、家僮數千、妓妾亦た數千、第宅華侈、制、宮禁に擬し、違忤するものは、誅夷し、附會するものは進擢す。朝廷靡然として、畏附せざるなし。大理卿梁毗、封事を上り、之を極言す。すでにして、帝亦た寖や素を疎忌し、詔して、三五日一たび省に入り、大事を論ぜしむ。外は優崇を示し、實は之が權を奪ふなり。こゝに於て、吏部尙書柳述、益す事を用ひて、機密を參掌し、素、深く之を惡む。

仁壽四年四月、帝不豫なり。七月疾甚し。僕射楊素、兵部尙書柳述、黃門侍郎元巖、皆閤に入つて、疾に侍し、太子廣を召し、入つて殿中に居らしむ。太子帝の不諱なるを慮り、手づから書封を爲り、出でゝ素に問ふ。素、事狀を條錄し以て報ず。宮人慢つて帝の所に送る。帝覽て大に恚る。帝の寵するところ、宣華陳夫人、旦に出でゝ衣を更へ、太子の逼るところとなり、之を拒んで免るを得たり。帝、その神色異なるを怪み、故を問ふ。夫人泫然として曰く、太子無禮、と。帝恚り、牀を抵つて曰く、畜生、何ぞ大事を付するに足らむ。獨孤我を誤る、と。乃ち柳述・元巖を呼んで曰く、我が兒を呼べ、と。述等將に太子を呼ばむとす。帝曰く、勇なり、と。述・巖、閤を出でゝ敕書を爲る。素之を

聞いて、急に太子に白し、詔を矯めて述・巖を執へて、獄に繫ぎ、東宮の兵帖を追うて、臺に上つて宿衛し、門は出入を禁じ、並に宇文述・郭衍の節度を取り、右庶子張衡をして、殿に入つて、疾に侍せしめ、盡く後宮を遣し、出て〻別室に就かしむ。俄にして、帝崩ず。陳夫人、變を聞いて戰慄し、色を失ふ。晡後、太子小金盒を封じ、使者を遣して、夫人に賜ふ。夫人以て鴆毒となし、懼るゝこと甚し。之を發けば、乃ち同心結なり。夫人恚つて卻坐し、肯へて謝を致さず。諸宮人ともに之に逼る。乃ち使者を拜す。その夜、太子烝す。明日喪を發して、即位す。是を煬帝となす。曾ま楊約伊州より來朝す。太子、約を遣して、長安に入り、矯つて高祖の詔を稱し、故の太子勇に死を賜うて、之を縊殺せしめ、然る後、兵を陳し、衆を集め、凶問を發し、勇を追封して、房陵王となし、爲に嗣を置かず、述・巖の名を除いて、之を嶺南に徙す。

文帝の治、稱すべきもの少からずと雖も、自ら詐力を以て、天下を得、猜忌苛察、讒言を信受し、功臣故舊、終始保全するものなく、末路の慘禍、又自ら之を取る、まことに浩嘆すべきなり。

煬帝の同胞三人、すでに先つて亡び、存するものは、漢王諒のみ。諒、高祖に寵あり、并州總管となり、自ら居るところ、天下精兵の處なるを以て、太子勇・蜀王秀の罪を得たるを見、常に自ら安んぜず、乃ち高祖に言ひ、突厥方に强なるを以て、宜しく武備を修むべしとなし、器械を繕治し、私人を招集し、殆んど數萬ならむと欲す、諮議參軍王頍は、僧辯の子、倜儻にして、奇略を好み、蕭摩訶とともに志を得ず、每に鬱鬱として亂を思ひ、皆諒の親善するところなり。高祖崩じ、煬帝即位するに及び、高祖の璽書を以て、之を徵す。之より先、高祖諒と密かに約すらく、若し璽書汝を召せば、敕字の傍に一點を加む、と。又玉麟符を與へ、合へば徵に就かしむ。書を發するに及びて、驗なし。諒、變あるを知り、遂に兵を晉陽に發し、楊素の反を唱言し、諸將を遣し、道を分つて四に出づ。署兵曹裴文安、柱國となり、紇單貴・王聃等と、直に京師を指す。諒、精兵數百騎を簡し、羅離を戴き、詐つて宮人と稱し、長安に歸り、徑に蒲州に入る。城中の豪傑、頗る之に應ずるものあり。すでにして、圖を改めて、蒲州を守る。帝、楊素を以て、并州道行軍總管河北安撫大使となし、衆を帥ゐて、諒を討たしむ。諒、その將趙子開を遣し、衆十萬を擁して、屯して高壁に據らしめ、陳を布くこと五十里、素、諸

將をして、兵を以て之に臨ましめ、自ら奇兵を引いて、潛かに霍山に入り、崖谷に緣つて進み、馳せて北軍の北に出て、直に其營を指し、鼓を鳴らし、火を縱つ。北軍爲すところを知らず、自ら相蹂踐し、殺傷數萬、諒之を聞いて、大に懼れ、自ら兵十萬を將ゐて、素を拒ぐ。大雨に會して、引いて還る。素、進擊して大に之を破り、蕭摩訶を擒にす、諒、退いて、晉陽を保つ。素、兵を進めて之を圍む。諒窮蹙、降を請ふ。王頍自殺す。群臣奏す、諒、死に當すと。帝許さず、名を除いて、民となし、竟に以て幽死す。所部の吏民、坐して死徒するもの、二十餘萬家。はじめ、高祖、獨孤后と甚だ相愛重し、誓つて異生の子なからしむ。かつて、群臣に謂つて曰く、前代の天子、嬖幸に溺れ、嫡庶分爭、或は國を亡ぼすに至る、朕、旁に姬侍なく、五子同母、眞兄弟といふべきなり、豈に此憂あらむや、と。又周室諸王の微弱に懲りしが、故に、諸子をして、大鎭に分居せしむ。然れども、晩節遂に相猜忌し、五子皆壽を以て終らず、遂に國を亡ぼすに至る。

煬帝すでに即位す。章仇太翼、帝に言つて曰く、陛下本命、雍州破木の衝となる、久しく居るべからずと、又讖に云ふ、洛陽を修治して、晉家に還れ、と。帝以て然りとなし、晉王昭を留めて、長安を守らしめ、その十一月、終に洛陽に幸す、昭尋いで太子となる。

東都の營築

第八十九章　煬帝の驕奢

古しへより、驕奢荒淫、國を亡ぼせしもの、少からずと雖も、煬帝の如きは、殆んど希なり。その一世を通じ、唯だ功業を誇耀し、天下の耳目を聳動するを事とし、內は奢侈に耽りて、土木興役、罷まず、外は征戰を擅にし、兵革連年、內外すでに多故、その民勞れ國亂るゝや、社稷忽ち亡ぶ。而して、煬帝その人、毫も自ら悔ゐざるなり。即位の翌大業元年二月、楊素を以て尙書令となし、三月之に詔して、東京即ち洛陽に營せしむ。役丁二百萬人、洛州郭內の居民及び諸州の富商大賈數萬戶を徙し、以て之に實たしめ、將作大匠宇文愷と、內史舍人封德彝等とに敕し、顯仁宮を營せしめ、江嶺の間、奇材異石を發し、之を洛陽に輸し、又海內の嘉木異草、珍禽奇獸を求め、以て苑囿を實たしむ。その五月、西苑を築く。一名は芳華苑、洛の西に在り、苑の周二百里、その內に海を爲り、周十餘里、方丈蓬萊瀛洲の諸山を爲る。高さ百餘尺、臺觀宮殿、山上に羅絡し、海北に渠あり、海內に縈注し、渠に緣つて、十六院を作り、門皆渠に臨む。

毎院四品夫人を以て、之を主らしめ、華麗を窮極し、宮樹凋落すれば、綵を剪つて、花葉を爲り、之を綴り、沼内又綵を剪つて、荷芰菱芡と爲し、色渝れば易ふるに新なるものを以てす。十六院、競うて、殺羞の精麗を以て相高うし、恩寵を市せむを求む。帝好んで月夜を以て宮女數千騎を從へ、西苑に遊び、清夜曲を作り、馬上に于いて之を奏す。

汴渠の開鑿

煬帝固より天下を巡遊するの志あり、これより先、即位の歳、丁男數十萬を發し、塹を掘り、龍門より、東、長平汲郡に接し、臨清關に抵り、河を度つて、浚儀襄城に至り、上洛に達し、以て關防を置く。又東京の宮室を營みしと同時に、詔して曰く、古しへ輿頌を聽採し、謀、庶民に及ぶ、故に能く刑政の得失を審にす。今將に淮海を巡歴し、風俗を觀省せむと欲す、と。遂に尚書右近皇甫議に命じ、丁百萬を發し、通濟渠を開き、西苑より穀洛水を引き、河に達し、復た板渚より河を引いて汴に入り、汴を引いて泗に入り、以て淮に達し、又民十萬を發し、邗溝を開いて江に入る。溝の廣さ四十歩、傍に御道を築き、樹ゆるに柳を以てし、長安より江都に至るまで、離宮四十餘所を置く。遣すところの黄門侍郎王弘等、江南に往いて、龍舟及び雜船數萬艘を造る。

江都の遊幸

官吏督役嚴急、役丁死するもの、什の四五といふ。

この歳八月、帝江都に幸す。龍舟四重、高さ四十五尺、長さ二百尺、上重は正殿朝堂あり、中二重、百二十房あり、皆飾るに金玉を以てし、下重は内侍之に處り。皇后は翔螭舟に乘ず、制度差や小、別に浮景九艘三重あり、皆水殿なり、餘の數千艘、漆綵朱鳥・倉螭・白虎・玄武・飛羽・青鳧・凌波五樓・道壇・玄壇・板艙・黄蔑等の名あり。後宮諸王公主、百官僧尼道士蕃客、之に乘じ、ともに挽士八萬餘人を用ふ。その漆綵以上、九十餘人、之を殿御といふ。皆錦綵を以て袍となし、衛兵の乘るところ、又數十艘、平乘・青龍・艨艟・艒艘・艇舸等の名あり。舳艫相接すること、二百餘里、騎兵岸を翊して行き、過ぐるところ州縣五百里内、皆食を獻ぜしめ、多きもの一州百餐に至り、水陸の珍奇を極め、後宮厭飫すれば、將に發せむとし、棄てゝ之を埋む。

服制

二年春、牛弘等に詔し、輿服儀衛の制度を議し、何稠を以て太府少卿となし、之をして營造して江都に送らしむ、稠、古今を參會し、增益するところ多く、袞冕を益し、日月星辰を畫き、皮弁は漆紗を以て之を爲し、大抵務めて華盛を爲し、以て上意に

稱ひ、州縣に課して羽毛を送らしむ。民求めて之を捕へ、殆んど遺類なし。烏程に高樹あり、百尺を踰え、上に鶴巢あり、民之を取らむと欲するも不可なり。乃ち其根を伐る、鶴その子を殺さむを恐れ、自ら氅毛を拔いて、地に投ず。時人或は稱し以て瑞となす。同月帝、江都を發し、四月伊闕より法駕を陳し、千乘萬騎を備へて、東京御端門に入りて、大赦し、五品以上の文官を制し、乘車朝に在り、幷に佩玉を服す、武官の馬は、珂を加へ、幘を戴き、袴褶を服す、文物の盛、近世及ぶなし。

楊素死す

すでにして、太子昭卒す。帝之を哭す數聲にして止み、尋いで聲伎を奏する、平日に異ならず、楊素又尋いで死す。素、大功ありと雖も、特に帝の猜忌するところとなり、外、殊禮を示し、內情甚だ薄し。太史言ふ、隋の分野に大喪あり、と。乃ち素の越公を徙して楚公となす。意、楚と隋と、分を同うし、以て之を厭せむと欲す。素、疾に寢ねて、肯へて藥を飲せず。弟約に謂つて曰く、我豈に更に活くるを須ゐむや、と。幾もなくして死す。

はじめ齊の高緯の世、魚龍山車等の戲あり、之を散樂といふ。周の宣帝の時、鄭譯奏して之を徹す。高祖禪を受くるに及び、牛弘樂を定め、悉く放つて、之を遣る。帝、啓民可汗、將に入朝せむとするを以て、富樂を以て、之に誇らむと欲す。太帝少卿裴蘊、旨を希ひ、奏して、天下前世樂家の子弟を括して、皆樂戶となし、その六品以下、庶人に至るまで、音樂を善くするものなれば、皆太常に直す。帝、之に從ふ。こゝに於て、四方の散樂、大に東京に集る。京兆河南に課して、その衣を製し、錦綵爲に空し。帝、多く艷篇を製し、樂正白明達をして、新聲を造り、之を播せしめ、音、哀怨を極む。

戲樂の採擇

煬帝の巡幸

その翌三年正月朔旦、大に文物を陳す。突厥の啓民可汗、入朝し、見て、之を慕ひ、冠帶を襲はむを請ふ。帝大に悅ぶ。すでにして、車駕北巡し、河北十餘郡の丁男を發し、太行山を鑿つて幷州に達し、以て馳道を通じ、雁門を過ぐ。太守邱和、食を獻する甚だ精。馬邑に至る、太守楊廓、ひとり獻ずるところなし。帝悅ばず。和を以て博陵太守となし、廓をして、博陵に至つて、之を觀せしむ。これに由つて食を獻ずる、競うて豐侈を爲す。榆林に至り、遂に塞を出で、兵を耀し、突厥中を徑せむと欲し、啓民の懼せむことを恐れ、先づ長孫晟をして、旨を諭さしむ。こゝに於て、榆林の北境を發し、東薊に達し、開いて御道を爲り、長さ三千里、廣さ百步、啓民及び義成公主、行宮に來

朝し、吐谷渾・高昌、又並に使を遣して入貢す。帝、宇文愷をして、大帳を爲らしむ、其下數千人を坐せしむべし。以て啓民及びその部落を宴して、散樂を作す。諸胡駭悅す。帝、啓民に路車乘馬鼓吹幡旗を賜ひ、贊拜名いはず、位、諸侯王の上に在り。

その秋八月、車駕、榆林を發し、金河を泝り、甲士五十餘萬、旋旗輜重、千里絶えず。宇文愷をして、觀風行殿を造らしめ、數百人を容れ、離合之を作し、下に輪軸を施し、倏忽推移す。又行城を作る、周二千步、布衣板を以てし、樓櫓悉く備る、諸胡驚いて神となす。帝、啓民の廬帳に幸す、啓民觴を捧げて、壽を上る、王侯以下、帳前に袒割し、敢て仰ぎ視るなし。帝大に悅び、詩を賦して曰く、呼韓頓類至、屠耆接踵來、何如漢天子、空上單于臺、と。蕭皇后、亦た義成公主の帳に幸し、賜予甚だ厚し。帝還りて太原に營し、晉陽宮に至り、遂に太行に上り、通道を開くこと九十里、濟源に至り、御史大夫張衡の宅に幸し、留宴三日、乃ち東都に還る。

翌くれば四年正月、河北諸軍百餘萬を發して、永濟渠を穿ち、沁水を引いて、南、河に達し、北、涿郡に通じ、丁男供せず、はじめて、婦人を供す。これより先、丁男百餘萬を發し、長城を築いて、西、榆林を距ぎ、東、紫河(歸化城西北)に至りしが、この年七月、復た

氷濟渠と長城

丁男二十餘萬を發して、之を築き、榆谷よりして東す。帝、五原に如き、行宮に六合板城を設け、載するに槍車を以てし、頓舍する毎に、其轅を外にし、以て外圍となし、內は鐵菱を布き、次いで弩牀を施し、繩を以て機を連ね、人來つて繩に觸るれば、弩機旋轉、觸るゝところに向つて發す。その翌年、河右を巡り、六年江南河を穿ち、京口より餘杭に至るまで八百餘里、廣さ十餘丈、東、會稽を巡らむと欲す。

巡遊每歲、而かも、此間に於て、はじめて進士の科を設け、高祖の末年、法令峻刻なりしを以て、牛弘等に詔して、大業律十八篇を造つて之を頒行せしむ。民久しく嚴刻を厭ひしを以て、大に之を喜びしが、その後、征役繁興、有司臨時に迫脅し、以て濟事を求めしが故に、復た律令を用ひず、次いで、官制を更定し、上柱國以下の官を改めて大夫となし、殿內省を置き、尚書・門下・內史・秘書と併せて五省となし、謁者司隸臺を增し、御史とともに三臺となし、太府寺を分つて少府監を置き、長秋・國子・將作・都水とともに五監となし、又左右翊衛を增改して、十六府となし、伯子男爵を廢す。文治施政、かくの如く、二三特記すべきものあれども、ともに帝の意に非ず。帝は巡

法令官制の更定

遊奢侈と同時に、大に兵を耀し、萬邦を威服せむと欲し、遂に武を黷すを顧みず。諸般の事、相並んで着々歩を進め、すでに南疆西域を綏撫せし後は、更に兵を東して、高麗を伐ち、その功成らざるや、遂に天下の爭亂を馴致せり。

林邑の征服

第九十章　疆外諸國の征服及び交通

はじめ、宋の文帝、林邑即ち今の安南を伐ち、宗慤の奇功、之を服してより、林邑は常に使を遣し、南朝に入貢したり。高祖の末年、群臣林邑に珍寶多きをいふものあり、乃ち劉方を驩州道行軍總管となし、林邑を經略せしむ。煬帝即位の初、大業元年四月、方、海口より出づ。林邑王梵志、兵を遣して、險を守る。方擊つて之を走らす。師、閭梨江(占城國北)を度る。林邑の兵、巨象に乘じ、四面よりして至る。方戰つて利あらず。乃ち多く小坑を掘り、草その上を覆ひ、與に戰ひ僞り北く。林邑之を逐ひ、象多く顛躓するや、弩を以て之を射る、象却つて其陳を走蹂す、因つて銳師を以て之に繼ぎ、林邑大に敗る。兵を引いて、之を追ひ、馬援の銅柱を過ぎ、南すること八日、その國都に至る。梵志走つて海に入る。方、城に入つて、其廟主十八を獲たり。皆金を以て之を爲る。石を刻し、功を紀して還る。士卒腫足、死者什の四五、方亦た疾を得て道に卒す。

日本との交通

大陸の支那と我が日本との交通は、後漢光武の後、時に之ありと雖も、その詳は、知るべからず。我が仁德天皇の朝、使を吳に遣はせしことあり、之に次いで、漢主劉宏の裔阿知使主父子、十七縣の人口を率ゐて歸化し、漢氏と稱せしことあり。五胡の亂、晉の江左に偏安するや、我が民、なほ之を呼んで吳と稱す。天皇阿知を吳に遣り、織縫女を求め、高麗の鄕導により、之を得て歸る。南史に曰く、晉末に倭王讚の使至る、宋初讚死し、弟珍上書し、使持節倭百濟新羅任那伽羅秦韓慕韓七國軍事と稱す。その後、興立ち、表疏して曰く、祖宗以來、東は毛人五十五國、西は衆夷六十六國、海北九十五國を平ぐ。高句麗、百濟の貢船を妨ぐ、先人將に大擧して、之を伐たむとす、俄に、喪に遇ふ、とこれ我が雄略の朝に處る、但し表疏は、我史に見えず、讚珍興等、諸人の名亦た考徵に由なし。梁初に至るまで、使を通ぜしも、その後、全く杜絕せり。北史に晉宋齊梁、朝聘絕えずと記せしは、遣吳使を指すに非ざるか。煬帝大業四年、倭國入貢し、書を帝に遺つて曰く、日出處天子、致書日沒處天子、無恙、と。帝之を覽て、悅

ばず。鴻臚に詔し、蠻夷の書、無禮なるもの、奏する勿からしむ。然れども、その明年、帝、文林郎裴清を遣し、海を泛んで、倭國に至らしむ。その王、清を迎へて、相見、與に語つて大に悅び、使を遣し、清に隨つて來り、方物を貢す。これ隋書等に見ゆるところなれども、我が國史に見ゆるものと、聊か出入するところあり。日本書記、推古天皇十五年の條に曰く、秋八月戊甲朔庚戌、大禮小野臣妹子を大唐に遣し、鞍作福利を以て通事となす。と。之に次いで、其翌十六年、妹子隋使とともに來り、因つて再び之を遣せしことを載す。推古の十五年は、煬帝大業三年に當り、十六年は四年に當るを以て、彼此の史乘、一歲の差を見る。書記の文、下の如し。曰く、十六年夏四月、小野臣妹子、大唐より至る。唐國、妹子臣を號して蘇因高といふ。即ち大唐使人裴世清、下客十六、妹子臣に從つて、筑紫に至る。難波吉師雄成を遣し、大唐の客裴世清等を召し、唐客の爲に更に新館を難波高麗館の上に造る。六月壬寅朔丙辰、客等難波津に泊す。この日、飾船三十艘を以て、客等を江口に迎へて、新館に安置せしむ。こゝに於て、中臣宮地連麻呂及び大河內直糠手、船吏王平を以て掌客となす。こゝに妹子臣、奏して曰く、臣參還の時、唐帝書を以て臣に授く、然れども、百濟國を經過するの日、百濟の人探り以て掠め取る。これを以て、上るを得ず、と。こゝに於て、群臣之を議して曰く、夫れ使人は死すと雖も、旨を失はず、この使、何ぞ怠つて大國の書を失ふや、と。則ち流刑に坐す。時に天皇之に勅して曰く、妹子書を失ふの罪ありと雖も、輙やすく罪すべからず、その大國の客等、之を聞く、亦た良からず、と。乃ち之を赦して、坐せざるなり。秋八月辛丑朔癸卯、唐客京に入る。この日、飾騎七十五疋を遣つて、唐客を海石榴の市衢に迎ふ。額田部連比羅夫、以て禮辭を告ぐ。壬子、唐客を朝廷に召して、使旨を奏せしむ。時に阿倍鳥臣、物部依網連二人を抱く、客の導と爲りしものなり。こゝに於て、大唐國の信物、庭中に置く。時に使主裴世清、親ら書を持して、兩度拜し、使旨を言上し、而して、立つ。その書に曰く、皇帝倭皇に問ふ、使人長吏大禮蘇因高等、至つて狀を具す。朕欽んで、寶命を受け、區宇に臨仰す、德化を弘め、含靈を覃被せむを思ふ。愛育の情、遐邇を隔つなし。知る、皇海表に介居し、民庶を撫寧し、境內安樂、風俗融和、深氣至誠、遠く朝貢を修む、丹欵の美、朕、嘉するあり、稍や暄、比ごろ常の如くならむ。故に鴻臚寺掌客裴世清等を遣して、往意を指宣せしめ、幷に物を送ること別の如し、と。時に阿倍臣出で進み、以て其書を受けて進み行く。大伴囓連、迎へ出でゝ、

書を承け、大門の前の机上に置いて、之を奏し、事畢つて退く。この時、皇子諸王諸臣、悉く金髻華を以て著頭し、亦た衣服、皆錦紫繡織及び五色の綾羅を用ふ。丙辰唐客等を朝に饗し、九月辛未朔乙亥、客等を難波大郡に饗す。辛巳唐裴世清罷めて歸る。則ち復た小野妹子臣を以て大使となし、吉士雄成を小使となし、福利を通事となし、唐客に副へて之を遣る。こゝに、天皇、唐帝に聘す、その辭に曰く、東天皇、敬んで西皇帝に白す、使人鴻臚寺掌客裴世清等至り、久憶方に解く。季秋薄冷、尊何如、想ふに清念、こゝにも即ち常の如し。今大禮蘇因高、大禮乎那利等を遣し、往いて謹んで白す、と。書記の文、こゝに止まる。而して、この書は、聖德太子起草せしところにして、我が天皇外國と親ら贈答せしは、古來唯だこの一例あるのみ。而して、明治の外交、實に之に接すと稱せらる。隋の交通は、實に日本と大陸と、國際通交の端緒にして、この後極東に於ける諸獨立國、相互の交渉、愈よ多事なるを豫想すべきなり。

赤土

大業四年十月、帝能く絕域に通ずるものを募る。屯田主事常駿、赤土に使せむことを請ふ。赤土は扶南の別種、今の暹羅國にして、占城の西南に在り。帝大に悅び、詔を賚らし、往いて其王に賜はしむ。駿、海に泛ぶこと百餘日にして、境に入り、月餘、乃ち其都僧祇城に至る。その王、姓は瞿曇氏、名は富利多塞、居る處、器用珍麗を窮極す、次いで王子那邪迦をして入貢せしむ。

流求

帝、又羽騎尉朱寬をして、海に入つて、異俗を訪求せしめ、流求に至つて、還る。即ち今の琉球なり。大業六年、復た寬を遣し、流求を招撫せしむ。從はず。乃ち虎賁將陳稜に命じ、兵を發し、海に泛んで之を擊たしめ、その王遏刺兜を斬り、其民を虜にして歸る。かくの如く、東南二面の綏撫、頗る多事なると同時に、煬帝は、又大に北虜西域を經略し、漢代の盛を回復せむと企てたり。

契丹の驅討

隋初塞外の強を稱せしものは、突厥なりしが、その分崩の結果として、今や初の如くならず。史萬歲、塞を出て、步迦を逐ひ、啓民可汗歸服して、禮を失はず。大業元年、契丹營州に寇す。通事謁者韋雲起に詔し、突厥の兵を護して、之を討たしむ。啓民可汗、騎二萬を發して、その處分を授く。雲起分つて二十營となし、四道ともに引き、營相去ること一里、交雜を得ず、鼓聲を聞いて行き、角聲を聞いて止まり、公使に非

されば、馬を走らすを得るなからしめ、三令五申、鼓を擊つて發す。紇干、約を犯す。斬つて以て徇ふ。こゝに於て、突厥の將帥、入つて謁し、皆膝行股栗、敢て仰ぎ視るなし。契丹本と突厥に事へ、相猜忌せず。雲起すでに其境に入り、突厥をして詐つて云はしめて曰く、柳城に向ひ、高麗と交易す、敢て事實を漏洩するものは斬らむと。契丹備を爲さず、その營を去ること五十里、馳せ進んで之を襲ひ、虜獲甚だ衆し、女子及び畜產の半を以て突厥に賜ひ、餘は皆之を收め、以て歸る。帝大に喜び、擢でゝ治書侍御史となす。

處羅可汗と莫何可汗

はじめ、西突厥の阿波可汗、莫何可汗處羅侯の虜ふるところとなり、國人執素特勒の子を立つ、是を泥利可汗となす。泥利卒して、子達漫立ち、處羅可汗と號す。處羅多く烏孫の故地に居り、撫御道を失ひ、國人多く叛き、復た鐵勒の困しむところとなる。鐵勒は元と匈奴の遺種、族類最も多く、僕骨・同羅・契苾・薛延陀等の部あり。その酋長、皆俟斤と號し、東西兩突厥に分屬す。この歲、處羅兵を引いて、鐵勒諸部を擊ち、厚く其物に稅し、又薛延陀を忌み、その酋長數百人を集めて、盡く之を殺す。こゝに於て、鐵勒皆叛き、俟利發俟斤契苾歌楞を立てゝ莫何可汗となし、又薛延陀俟斤字

四域の交通

也咥を立てゝ小可汗となし、處羅と戰ひ、屢ば之を敗る。莫何、勇毅絕倫、甚だ衆心を得、鄰國の憚るところとなる。伊吾・高昌・焉耆、皆之に附く。

煬帝北巡、榆林に次し、啓民可汗、義成公主とともに來朝し、吐谷渾・高昌、皆入貢せしこと、かつて前に述べたるが如し。大業三年、金河に至り、啓民可汗の帳に幸せしと前後して、又西域を經略せり。はじめ、西域の諸朝、多く張掖に至つて、互市す。帝、吏部侍郎裴矩をして、之を掌らしむ。矩、諸商胡を訪ひ、その國の山川風俗を以て西域圖記三卷を撰し、入朝して之を奏す。仍つて、別に地圖を作り、その要害を窮め、西傾より以て去り、縱橫亘るところ、將に三萬里ならむとす。燉煌より發して西海に至る、凡そ三道、北道は伊吾よりし、中道は高昌よりし、南道は鄯善よりす。矩、因つて盛に胡中諸珍寶多きを言ふ。帝、こゝに於て、慨然として、將に西域に通ぜむとし、矩を以て、黃門侍郎となし、復た張掖に致さしめ、諸胡を引至し、之に啗はすに利を以てし、勸めて入朝せしむ。これより、西域諸胡、往來相繼ぎ、經るところの郡縣、費を糜すること、萬萬を以て計る。

處羅可汗の歸服

突厥の啓民可汗、服すこと、すでに久しと雖も、西突厥は未だし。西突厥處羅可汗、の母向氏、本と中國の人、開皇の末、入朝し、遂に長安に留る。こゝに至りて、裴矩、燉煌に在り、處羅その母を思ふを聞き、使を遣して、之を招懷す。帝亦た、謁者崔君肅をして、詔を齎らし、往いて諭さしむ。處羅、甚だ倨り、詔を受くるも、肯て起たず。君肅之を責む。處羅瞿然として起ち、流涕再拜、跪いて詔書を受け、因つて使者を遣し、君肅に隨つて、汗血馬を貢せしむ。後、處羅その酋長射匱の襲ふところとなり、大に敗れて、走る。帝、裴矩を遣し、向氏を馳せて玉門關に至つて、之を招かしめ、遂に入朝す。乃ち之を待つに殊禮を以てし、五百騎を將ゐ、常に巡幸に從はしめ、號を曷娑那可汗と賜ふ。

吐谷渾

之に次いで、裴矩、鐵勒に說いて、吐谷渾を擊破せしむ。その可汗伏允、使を遣して、救を求む。帝、將を遣して、之を迎ふ。吐谷渾、隋兵の盛を畏れて、敢て降らず。衆を帥ゐて、雪山に走る。其地、東西四千里、南北二千里、詔して皆郡縣鎭戍を置く。こゝに至り、帝西巡し、將に吐谷渾を擊たむとす。伏允遁れ去り、その名王を遣し、詐つて伏允と稱し、車戎眞山を保つ。大將軍張定和等に詔して、追討せしむ。皆殺すところとなる。

惟だ衛府卿劉權、千餘口を虜にして還る。帝、燕支山に至る。高昌王麴伯雅、伊吾吐屯設等及び西域二十七國、道左に謁す。帝、乃ち武威張掖の士女に令し、盛飾して、縱觀せしめ、以て中國の盛を示し、衣服鮮ならざるものは、郡縣之を督課す。吐屯設、地數千里を獻ず。帝大に悅び、西海河源鄯善且末等の郡を置き、天下の罪人を謫して、戍卒となし、以て之を守らしめ、劉權に命じて、河源に鎭し、大に屯田を開き、吐谷渾を扞禦し、以て西域の路を通ぜしめ、裴矩を進めて、銀青光祿大夫となす。

はじめ、文帝儉素を以て國を治め、煬帝その後を承け、四方を撫服す。こゝに於て版圖俄かに增大し、すべて一百九十郡、一千二百五十五縣、民口八百九十萬。大業五年、民部侍郎裴蘊、民間版籍、多く戶口を脫漏するを以て、奏して閱實せしめ、若し一人實ならざれば、官司職を解き、又民を許し、一丁を糾し得たるもの、糾されし家をして、代つて賦役を輸せしむ。この歲、丁二十四萬、口六十四萬を進む。帝、百官に謂つて、曰く、前代賢才なく、この罔冒を致す、今戶口皆實、全く裴蘊に由る、と。因つて、擢て、御史大夫を授く。

驕奢の風

その翌六年正月、諸蕃來朝す。帝、命じて、百戲を端門街に陳し、絲竹を執るもの、萬八千人、昏より旦に達して、罷め、費すところ巨萬。これより、歲以て常とす。諸蕃東都の豐都市に入つて、交易せむことを請ふ。之を許し、因つて先づ店肆を整飾せしむ。珍寶充積、人物華盛、胡客酒食店を過ぐるもの、悉く邀へ入れて、醉飽せしめ、その直を取らずして之を給す。曰く、中間豐饒、酒食は、例、直を取らず、と。胡客皆驚嘆す。その黠なるものは、頗る之を覺り、見するに絹帛を以てし、樹に纏うて曰く、中國亦た貧者あり、衣、形を蓋はず、何如ぞ此物を以て之に與ふ、と。市人慙ぢて言ふ能はず。帝、裴矩の能を稱し、群臣に謂つて曰く、裴矩大に朕の意を識る、凡そ陳奏するところ、皆朕の成算、而して未だ發せざるものは、自ら非。國に奉じ、心を盡す、孰れか能く是の若くならむ、と。この時、矩及び大將軍宇文述、內史侍郎虞世基、御史大夫裴蘊、光祿大夫郭衍、皆諂諛を以て能あり。述、容止便辟、侍衛するもの、咸な則を取る。衍、かつて帝に勸めて、五日一たび朝を視せしむ。曰く、故の高祖、自ら勤苦するを爲すなきなり、と。帝朝に臨んで凝重し、發言觀るべし。而して、內、聲色を存し、日に苑中に於て、盛に酒饌を陳し、燕王倓・梁公蕭鉅・干牛左右・宇文皛及び高祖の嬪御に敕して、一席となり、僧尼道士女官、一席となり、帝、諸寵姬と一席となり、略ぼ相連接し、酒酣なるとき、淆亂至らざるなし。

大を好み、功を喜び、驕縱自ら喜ぶこと、此の如く、塞外險遠にして寇盜なほ多く、百姓業を失ひ、又亂を思ふ。而して、其勢を鼓煽したるは、實に高句麗征討の敗に因る。予は、曩に漢の武帝の疆外經略を叙せしとき、朝鮮の古史を略叙せしことあり、こゝに其後を承けて、紀述を續ぎ、高祖の時に於ける遼東の寇に及び、以てその源委を審にせざるべからず。

武帝以後の朝鮮

第九十一章　朝鮮の沿革と煬帝の東征

漢の武帝、すでに衛氏を滅し、朝鮮半島の北部、大同江畔の地を略し、之を分つて。眞番・臨屯・樂浪・玄菟の四郡となす。後、昭帝の始元中、平那・玄菟を以て、平州都督府となし、臨屯・樂浪を合せて、東府都督府となせり。朝鮮の地、漢の版圖に在ること、凡そ五十餘年。後漢の世、西域の經略、大に其績を留めしと雖も、その勢威、東方に及ばず。この舊地は、全く棄てゝ顧ることなく、諸種の蠻族の聚散に任したりき。

馬辰弁の三韓

武帝の征戍と前後して、この國東南の一部に於て、三國の興起せるあり。馬韓・辰韓・弁韓、これなり。是を三韓となす。この中、馬韓最も大にして、且つ古し。その始祖は、知るべからず。箕準の衛滿に逐はるゝや、その衆數十人を率ゐ、逃れて此地に入り、金馬郡(全羅道益山郡)に居り、遂に其國を奪ひ、自立して武康王と稱し、子孫世相續ぐ。辰韓一に秦韓といふ。秦の苛法を布くや、その民、往々にして、逃れ來り、馬韓より東界の地を受け、城柵を建てゝ境域を限りしに由る。辰韓は謂ゆる韓族にして、馬韓と同種なり。以上三國、分立の觀あれども、その實、馬韓の箕氏、皆之を管せしなりき。而して、三韓分立の末運に至り、又別に三國の新興を見たり。新羅・高句麗・百濟、即ち是れなり。

新羅

新羅の始祖蘇公伐は、もと辰韓六部落の一、高墟の村長たり。かつて楊山に樵し、林中に於て、馬嘶を聞き、往いて見れば、大卵を得たり、之を剖けば、嬰兒の出づるあり、養うて子となす。名は赫居世、幼にして岐嶷、大德あり。六部の民、皆之に歸し、年十三、立てゝ君となし、居西干と稱し、國を徐羅伐と號す。居西干は、猶ほ王といふが如し。而して、その剖きしところの卵、瓠に似たるが故に、姓を朴氏といふ。國俗瓠を謂うて朴となせばなり。その時を以てすれば、大抵我が崇神垂仁の間に當り、支那に於ては、前漢の末に際せり。後、幾もなくして、閼氏を立てゝ后となす。又賢德あり、國人之を稱して、二聖といふ。當時弁韓太だ衰へしを以て、其國を以て、來り降る。次いで樂浪の人來襲せしが、邊民門戸を閉さゝるを見、引いて去れり。東沃沮(咸鏡道)亦た使を遣して來貢す。

高句麗

高句麗の始祖、東明王朱蒙は、今の平安道の北部、古しへの扶餘に生れ、其王藁離に養はる。王、七子あり。而かも最も朱蒙を愛す。朱蒙幼にして魁梧、射を善くす。國俗善射を呼んで、朱蒙となす故に、此稱あり。兄弟之を妬み、將に害せむとす。朱蒙禍を畏れて、東南方、卒本扶餘(平安道成川府)に走り、都を拂流河上に定め、自ら高辛氏の後と稱し、又藁離王の養ふところたるを以て、音通に因り、國號を句麗といひ、後高の一字を冠す、時は新羅赫居世即位の後二十一年に當れり。

朱蒙の威、漸く盛に、四方來附するもの多く、挹婁(滿州吉林省東境)と隣りしも、其人來り侵さず。拂流の上源に同名の國あり、その主松讓、又降を納る。朱蒙、又若人國太白山東(及び北沃沮(馬蘇江近傍)を滅し、その國、愈よ大なり。

新羅王赫居世、その臣瓠公をして、馬韓に聘せしむ。其王倨つて從はず。瓠公却つて赫居世の德を稱して、之を屈せしむ。瓠公は、元と倭人、その族始を詳にせず、はじめ、瓠を以て腰に繫ぎ、海を超えて來りし故に、此名あり。すでにして、馬韓王死す、或は赫居世に說いて、之を伐たしむ、赫居世曰く、人の喪に乘ずるは、不仁なり、と。更に人を遣して、弔慰せしむ、人咸な其仁を稱す。

百濟

この時、高句麗王朱蒙、又死し、太子類利立つて、瑠璃明王と稱す。その兄二人、伯を沸流といひ、仲を溫祚といふ、はじめ、朱蒙、類利を愛し、之を嗣となす。故に二人後に容れられざるを恐れて南行し、沸流は彌鄒忽(京畿道仁川府)に居り、溫祚は河南慰禮城(忠淸道稷山縣)に都す。溫祚の南行するや、その臣烏干馬黎等十人を隨へ、大に事を濟さむとせしが故に、慰禮の地に至るや、國號を十濟と定めしが、歸服するもの愈よ多きに及び、百濟と改號し、遂に北漢山城(黃海道黃州)に徙り、又北して平壤に都し、扶餘王の系なるを以て扶餘を姓とす。これを百濟の始祖溫祚王となす。その時は、高句麗の興起に後ること二十年、我が垂仁天皇の十二年、支那に於ては、前漢成帝鴻嘉三年なり。かくの如くして、三國は、相並んで、王たるに至れり。

朴昔二氏

新羅の赫居世、在位六十九年にして薨し、その子南解王、繼いで立ち、次々雄と稱し、賢臣昔氏脫解を得て大輔となし、委ねるに政を以てす。南解死に臨み、太子儒理及び脫解に遺言し、朴昔兩氏、年長者を以て位を承けしむ。こゝに於て、儒理、脫解に讓る。脫解辭して受けず。儒理乃ち立つ。人となり仁惠、隣國來歸するもの、甚だ衆し。儒理薨し、脫解位を受く、因つて尙ほ政を瓠公に任じ、朴氏をして、州郡を分管せしむ。一夜城西の始林に鷄聲あり、明日瓠公往いて見るに、金櫝樹梢に懸り、その下、白鷄の鳴くあり、王、人をして櫝を取らしむ、之を發けば、一男子あり、姿貌奇偉、王大に喜び、養つて子となし、名を命じて金閼智といふ、閼智は小兒の義なり。因つて、始林を鷄林と名づけ、その後、亦た國號となる。

雞林の由來

高句麗の强盛

昔氏脫解、在位二十四年、位を朴氏に復し、儒理の第二子婆娑王立つ。この時、高句麗に於ては、瑠璃王の孫宮、位に在り。はじめ、瑠璃王、鮮卑を降し、又王莽が匈奴を伐たむが爲に、兵を徵せしも應ぜず、却つて漢の邊に寇せしが、その子太武王の時、樂浪及び薩水(平安道成川府)以南の地を失ひしを以て、慕本王、之を復さむと欲して兵を出し、遂に和を講ず。王、人となり暴戾、殺を好み、國人服せず。その臣杜魯、之を弑

して、宮を立つ、是を太祖王となす。王幼にして岐嶷、善く內外を治め、時に出でゝ東沃沮・朱那を略し、又屢ば馬韓及び漢を侵し、玄菟・樂浪を攻め、高句麗の勢、愈よ盛なり。その年老ゆるや、位をその弟遂成王に傳ふ。

任那

これより先、三國の外、又一國の起るあり、駕洛是れなり。その地は、故の辨韓の一部にして、阿羅伽耶(慶尙道咸安郡)古寧伽耶(同道咸昌縣)星山伽耶(同道星州)小伽耶(同道固城府)大伽耶(同道高靈縣)の五部に分れ、新羅の西南に僻在せしが、金首露立つて其王となり、都城を築き、金官國と號せり。我が國史に任那といふもの、即ち是れなり。

新羅、高句麗の對立

百濟・伽耶(即ち駕洛)の二國、屢ば新羅を侵陵す。新羅の婆娑王、之に備ふること、甚だ到れり。伽耶の人、南鄙を襲ふ、婆娑王、勇士五千を率ゐ、出でゝ戰つて、大に之を敗り、將に其地を攻めむとす。伽耶謝して罷め、百濟又和を請ひ、悉督(江原道三涉府)押督(慶尙道慶山縣)の諸小國、皆欵を通ず。こゝに於て、新羅は高句麗と相並んで、朝鮮半島に雄たり。然れども、高句麗の遂成王、剛愎にして、暴をなし、國人咸な怨むに因り、明臨答夫之を弑し、その弟伯國を立てゝ新大王となし、自ら相となりて、國政を簒正し、一時の難を濟へり。時に漢の遼東太守、兵を出して、來り攻む。新大王、自ら精騎を率ゐ、坐原に戰つて大に之を敗る。

神功征韓の疑問

新羅婆娑王の孫、阿達羅、薨じて嗣なく、昔脫解の孫伐林、位に即き、治績あり、數傳して沾解王に至り、倭人の寇あり、その臣于老、難に死す。或は我が國史、神功皇后の征韓を以て、之に擬するものあれども、彼此の對照、詳かならず。唯だ年代よりいへば、亦た他に之を求むべからず。要するに、新羅が日本の兵を被り、大に窘みしは、殆んど疑ふべからず。

昔氏統絕ゆ

この頃、高句麗に於ては、新大王すでに死し、數傳して東川王に至り、魏の明帝、幽州刺史毋丘儉を遣し、高句麗の丸都城を屠らしむ。王、南沃沮に走り、魏兵退いて後、國に還り、都を平壤に移せり。王、勵精治を爲し、民之を慕ひ、その薨ずるや、近臣殉死するものあり。後、西川王の時、肅愼來り侵せしが、討つて之を却く。時に、百濟は已婁王の後、肖古王の淫虐ありしも、幸に國を亡ぼさず。又數傳して古爾王に至り、はじめて官制を定めたり。新羅に於ては、沾解王薨後、嗣なきを以て、國人金閼智の後、味

郯を立つ、後、儒禮・基監・訖解の三王、昔氏を以て、立ちしが、奈勿王に至りて、味鄒王の姪、位を承け、昔氏の統、全く絶えたり。

之に次いで、高句麗は、西川王より藥盧王・相夫王を經、烽上王に至る。この時、支那に於ては、司馬氏、恰も政を失ひ、鮮卑漸く盛にして、慕容廆、來り侵す。後、故國原王の時、廆の子皝、燕王と稱し、自ら勁兵を帥ゐて丸都を攻む。王之を拒いて敗れ、單騎走り出づ。燕兵、王の父美川王の墳を發き、其尸を載せ、王母王妃を虜にして歸る。王、已むを得ず、臣と稱して、貢を輸し、母及び父の尸を請うて還る。すでにして、燕亂れしを以て、その羈絆を脱せり。高句麗の支那に於ける、その關係、頗る古く、その三面、境域を接するを以て、自ら然るなり。

高句麗と支那との交渉

時に、百濟は、古爾王の後、數傳して近肖古王となる。高句麗の故國原王、之を侵せしが爲に、近肖古王、その太子とともに、精兵三萬を帥ゐて、進擊し終に、平壤を攻む。故國原王、大に敗れ、流失に中つて薨じ、太子小獸林王立つ、これより濟麗二國、相惡しく、侵伐絶えず。時に秦王苻堅、使を遣し、浮屠順道及び佛像佛經を高句麗に贈る。これを佛教傳來の濫觴となす。その後、百濟より之を我が邦に傳ふ。

朝鮮、三國に分れ、高句麗の支那に於ける、新羅の日本に於ける、その交渉、常に絶えず。而して、百濟は、やゝ弱なるを以て、二國の間に介在し、常に日本に順服せり。新羅の後、炤智王より智大略に至るの間、三國の交戰、愈よ劇しく、疆域の爭鬪、常に絶えず。而して、智大略は、力を外に用ふるのみならず、又心を內事に盡せり。これ新羅が他日統一の業をなしゝ遠因なり。これより先、新羅は、新羅或は斯羅と稱して、一定の國號なかりしが、こゝに至り、國號を定めて、新羅といへり。德業日に新に、四方を網羅するの義に取りしなり。又その王は、始祖の時より、居世干・次々雄・尼師今・麻立干等の稱を用ひしが、智大略に至り、はじめて、新羅國王と稱し、法度を制し、州郡縣名を定め、殉死を禁ぜり。智大略の薨ずるや、諡して智證といふ。法興王、繼いで立つ。時は我が欽明即位の元年にして、支那に於ては、梁の武帝大同六年に當れり。

新羅智證王の治

三國の攻爭、なほ罷まず。百濟の聖王、都を泗沘(忠淸道扶餘縣)に移し、南扶餘と號し、高句麗を侵して敗死す。この頃、駕洛國主金仇衡、新羅に降り、その國、亡ぶ。始祖より仇衡に至るまで、凡そ七十二、五百二十年といふ。こゝに於て、高句麗・新羅、愈よ盛なり。就中、新羅は智證王の後、法興・眞興の二賢王あり。次いで、眞平王に至りて、官制

新羅の年號

益す備り、紀綱愈よ整ひ、佛教亦た盛行に赴く。朝鮮は、建國以來、支那の年號を奉ぜしも、法興王、はじめて年號を定めて、建元といひ、興王は鴻濟と改む。眞平王、畋獵を好む。金后稷、切諫を以て殺され、其子に遺言して、王を勉めしむ、こゝに於て、翻然改悟し、心を民事に用ひ、賢明の稱あり。

新羅が半島統治の權を掌握するや、高句麗は、到底之に抗する能はず。因つて、力を西方に伸ばさむと欲し、屢ば兵を出して、支那に入寇せり。嬰陽王、名は元、はじめて位に即くや、支那にては、隋の統一に當り、文帝因つて拜して遼東王となさしむ。開皇十八年、元、靺鞨萬餘人を帥ゐて、遼西營州に寇す。總管韋冲、擊つて之を走らす。帝、聞いて大に怒り、漢王諒を以て、水陸三十萬を將ゐて、之を伐たしむ。諒の軍、臨榆關に出て、水潦に値ひ、餽運繼かず、軍中饑疫す。ずてにして、元亦た使を請ひ、罪を謝せしに因り、兵を罷む。諒、兵に將として功なく、その翌十九年、突厥を伐つの元帥となれり。

高麗王元の入寇

大業三年、煬帝の啓民可汗の帳に幸するや、高句麗の使者、その所に在り。啓民敢て隱さず、以て帝に見えしむ。裴矩、帝に說て曰く、高麗は、漢晉皆郡縣たり、今乃ち不臣、先帝之を征せむと欲せしや久し。今其使者、親しく啓民の擧國化に從ふを見る。その悲懼に因つて、脅して入朝せしむべし、と。帝之に從ひ、使者に敕し、高麗王元に語つて入朝せしむ。之を久うして、至らず。乃ち之を討たむを謀り、天下の富人に課して、馬匹を買ひ、十萬錢に至る。七年遂に詔を下して、高麗を討つ。帝、龍舟に御して、永濟渠に入り、涿に赴き、幽州總管元弘嗣に命じ、東萊、海口に往いて、船を造らしむ。官吏役を督し、晝夜水中に立ち、敢て息まず、腰より以下、皆蛆を生じ、死する者什の三四。又河內、淮南、江南に敕して、戎車五萬乘を造り、高陽に送り、衣甲幔幕を供載し、兵士をして自ら之を挽かしめ、河南北の民夫を發し、以て軍須に供し、江淮以南の民夫及び船は、洛口諸倉の米を運び、舳艫千里、往還常に數十萬人、晝夜絕えず。死者相枕し、天下騷動す。こゝに於て、遂に諸軍を遣し、道を分つて進む。合水令庾質、道を倍して兼行し、その不意に出でむを勸め、左候衛大將軍段文振、水潦秋霖に先だゝむことを建議せしも、帝皆聽かず。左十二軍は、鏤方、樂浪等の道に出て、右十二軍は、黏蟬、襄平等道に出て、すべて平壤に集まるもの、凡そ一百十三萬人。餽運者、之に倍し、

煬帝の東征

隋兵の敗

營を連ねて漸進し、御營六軍、後れて發し、首尾千餘里に亘る。八年六月、諸軍遼水に到る。高麗の兵、水を阻して拒守す。將軍麥鐵杖、自ら請うて前鋒となり、浮橋を造り、以て師を濟さむとす。橋未だ成らず、岸を距ること丈餘、鐵杖躍つて登り、戰つて死す。諸軍橋を接して繼いで進み、高麗の兵、大に敗れ、遂に進んで遼東を圍む。遼東城に嬰つて、固守す、帝、諸郡に命じて、之を攻む、久うして下らず。

時に將軍來護兒、江淮の水軍を帥ゐて、海道より高麗に至たり、平壤を去ること、六十里、高麗の兵を破り、勝に乘じて、其城に入り、伏に遇ひ、大に敗れて還る。宇文述、于仲文・辛世雄・衛文昇等九人、分つて諸道より出て、鴨綠水に會す。西人の馬、皆百日の糧を給し、重くして、能く勝ゆるなし。述、軍中に令し、米麥を遺棄するものは、斬る。士卒皆幕中に於て、坑を掘つて之を埋め、纔に中路に及び、糧すでに盡きむとす。高麗の軍、隋兵の饑色あるを見、故らに之を疲れしめむと欲し、每戰輙ち走る。述、一日の中、七戰皆勝ち、遂に濟薩水を濟り、平壤を去ること、三十里にして營す。高麗又使を遣し、詐つて降らしめて曰く、若し師を旋さば、當に高元を奉じ、行在に朝すべし、と。述等糧盡き、而かも平壤城堅く、勢猝に敗り難きを以て、遂に還つて薩水に至り、軍

群盜の蜂起

半ば濟る。高麗後より之を擊ち、諸軍皆潰え、將士奔り還る。一日夜にして鴨綠水に至る。行くこと四百五十里。はじめ九軍遼を度るや、凡そ三十萬五千人、還つて遼東に至るに及び、惟だ二千七百人、資械蕩盡す、帝大に怒り、述等を械繫して還る。

第九十二章　群雄の並起

高麗の征伐は、直に騷亂の因となれり。はじめ、兵を起すや、山東に詔して、府を置き、馬を養ひ、以て軍役に供せしめ、又民夫を發し、米を運ばしむ。塞下車中、往くものは皆返らず。卒死亡過半、耕稼時を失ひ、穀價踴貴す。東北邊、尤も甚しく、米の直、數百錢、運ぶところの米、或は粗惡なれば、民をして、糴して之を償はしめ、又鹿車夫六十餘萬人を發し、二人ともに米三石を推し、道途險遠、餉糧に充るに足らず。鎭に至るも、輸すべきなく、皆罪を懼れて、亡命し、重ねるに、官吏侵漁、百姓窮困を以てす。こゝに於て、相聚つて盜をなす。鄒平の民王薄、衆を擁して長白山（山東濟南府長山縣）に據る。平原の東に豆子峴あり、群盜多く其中に匿れ、劉霸道、之を帥ゐ阿舅賊と號す。漳南の竇建德、又高雞泊中に入て盜をなす。時に鄃人張金稱、衆を河曲に聚め、落人高

士遠、衆を清河に聚むすてにして、建德の衆、萬餘人に至り、身を傾けて物に接し、人爭つて之に附く。之に次いて、高麗の師敗るゝや、所在盜起る。王薄・張金稱の外、齊郡の孟讓、北海の郭方預、平原の郝孝德・河間の格謙・渤海の孫宣雅、各衆を聚めて、攻剽し、多きものは十餘萬、少きものは數十萬人。時に、天下承平日久しく、人兵に習はず、郡縣の吏、賊と戰へば、輒ち敗る。唯だ齊郡丞張須陁、勇決善く戰ひ、郡兵を將ゐて、王薄等を擊ち、大に之を敗る。

楊玄感の叛

大業九年夏六月、楚公楊玄感、兵を起す。玄感は、素の子、驍勇にして、騎射に便、賓客を喜ぶ。蒲山公李密、少にして、才略あり、財を輕じて、士を好む。左親侍となりしが、故あり、疾と稱して、自ち免ず。密、かつて黃牛に乘じ、漢書を讀む。素、過うて之を異とし、與に語つて大に悅び、玄感をして、與に深交をなさしむ。素、功を恃んで、驕倨、或は臣禮を失す。帝、心に銜んで言はず。素死するに及び、近臣に謂つて曰く、素をして死せざらしむれば、終に當に族滅すべし、と。玄感之を知り、內自ら安んぜず、且つ朝政日に紊れしを以て、乃ち諸弟と亂を爲すを謀る。帝、玄感に命じ、黎陽に於て運を督せしむ。こゝに於て、玄感運夫少壯の者五千餘人、篙梢三千餘人を選び、三牲を刑して、衆に誓ひ、且つ諭して曰く、主上無道、百姓を以て念となさず、天下騷擾、遼東に死するもの萬を以て計る。今君等と兵を起し、兆民を救ふ、如何、と。衆皆踴躍す。玄感進んで東都を攻む。代王侑、衛文昇をして、之を救はしむ。衆寡敵せず、屢ば敗れしと雖も、猶ほ進んで決戰す。これより先、帝、遼水を度り、諸將を遣して、復た高麗を擊たしめ、遂東城を攻め、久しく拔けず。帝、布囊百萬を造り、土を貯へ、大道に積み、高さ城と齊うし、戰士をして、登つて之を攻めしめむと欲し、又八輪車樓を作り、高く城に出て、俯して城內を射むと欲す。會ま玄感の反書至る。帝、大に懼れ、又達官子弟、皆玄感の所に在るを聞き、益す之を憂ひ、夜諸將を召し、軍を引いて還らしむ。資械委棄、衆心悔懼、復た部分なし。高麗之を覺る。然れども、其詐を疑ひ、三日を經て、乃ち兵を出して追躡せしも、終に逼を致さず。帝、宇文述・屈突通をして、傳に乘じて、兵を發し、以て玄感を討たしむ。來護兒、東萊に至り、之を聞いて、即日軍を旋へす。玄感、尊號を稱せむと欲す、李密諫めて止む。すてにして、屈突通等、軍を引いて、河陽に屯す。玄感、分つて兩軍となし、西は文昇を拒ぎ、東は通等を防ぎ、又兵を出して、大に戰ひ、屢ば敗る。

李子雄、玄感に勸め、直に關中を取り、承璽倉を開き、以て三輔に統召せしむ。玄感遂に兵を引いて、西す。宇文述・屈突通・衛文昇・來護兒等、追うて、之に閿鄉に及ぶ。玄感、一日三敗、乃ち十餘騎と上洛に走り、自ら免れざるを謀り、弟積善に命じて、之を斫殺せしむ。その黨三萬餘人、皆殺され、李密ひとり逃る。

李淵

弘化の留守元弘嗣は、斛斯政の親なり。斯政、玄感と謀を通じ、帝に從つて、高麗を征し、事の泄るゝを懼れ、遂に亡げて高麗に奔る。こゝに於て、衛尉李淵をして、馳せ往いて、之を執へしめ、因つて代つて、留守たらしむ。淵、衆を御する寬簡、人多く之に歸す。帝、淵が相表奇異、又その名圖讖に應ずるを以て、之を忌む。未だ幾ならずして、徵して行在に至らしむ。淵、疾に遭うて、未だ謁せず。その甥王氏、後宮に在り。帝、問うて曰く、汝の舅來る、何ぞ遲きや、と。王氏疾を以て對ふ。帝曰く、死を得べきや否や、と。淵之を聞いて懼れ、因つて酒を縱にし、賂を納れ、以て自ら晦ます。

吳郡の朱燮、晉陵の管崇、兵を起し、次いで劉元進を迎へて、天子と稱す。帝、將軍吐萬緒に命じて、之を討たしめ、管崇敗死す。又詔して緒を徵して、還らしめ、王世充を

高麗の歸服

遣し、代つて將たらしむ。元進・燮皆敗死す。幾もなくして、章邱の杜伏威、兵を起して、江淮を掠め、淮南校尉宗顯、之に死す。然れども、帝、玄感の亂、すでに平ぎしを以て、復た意となさず。十年二月詔して、復た天下の兵を徵し、高麗を擊ち、百道ともに進み、三月、帝、高陽に發す。士卒道に在つて、亡ぐるもの、相繼ぐ。七月懷遠鎭に次す。時に天下すでに亂れ、徵すところの兵、多く至らず。高麗亦た困敝す。來護兒、卑奢城（奉天府海城縣境）に至る。高麗兵を擧げて、迎へ戰ひ、護兒之を擊破し、將に平壤に趣かむとす。高麗王元、使を遣して、降を請ひ、因つて斛斯政を送る。帝大に悅び、使を遣し、節を持し、護兒に詔して、還らしむ。冬十月、西京に還り、高麗の使者及び斛斯政を以て、太廟に告げ、仍つて、高麗王元を徵し入朝せしむ。元、竟に至らず。將帥に勅して、嚴裝し、更に後擧を圖りしも、遂に行くを果さず。やがて、國難愈よ逼り、遂に高麗を願る能はざるに至れり。

百濟の反覆

はじめ、百濟の武王、使を隋に遣し、應援せむことを請ひ、煬帝、その言を納れ、百濟をして、高麗の動靜を覘はしむ。而して、武王潛に高麗と通じ、隋師の潦水を渡るに及び、兵を境上に出し、隋に應ずる爲し、その實、兩端を持せり。煬帝の功を成さゞり

しもの、その一、之に因る。隋師すでに退く。高麗は、東部の酋蓋蘇文をして、長城を築かしめ、西北扶餘城より、南、海に至る、千有餘里、凡そ十六年を費す。今存する滿州盛京省開原の長柵は、其遺なりといふ。

暦亂の源

はじめ、開皇の末、國家殷盛、朝野皆高麗を以て、意となす。劉炫、ひとり以て不可となし、撫夷論を作り、以て之を刺る。こゝに至つて、その言、果して驗あり。帝、斛斯政を殺して、其肉を烹、百官をして之を啖はしむ。佞者或は之を啖うて、他に至る。征東すでに功なく、盜賊蜂起するもの、益す多し。離石の胡劉苗王、兵を起し、旬日にして數萬に至り、汲郡の王德仁、亦た兵を起して、林慮山に據る。上谷の賊帥、王須拔、自ら漫天王と稱し、魏刀兒、自ら歷山飛と稱し、衆各十餘萬、北は突厥を連ね、南は燕趙に寇す。すでにして、德仁は王世充に歸伏し、須拔は幽州を掠め、流矢に中つて死し、刀兒は竇建德の殺すところとなる。

突厥の迫逼

突厥の啓民可汗、すでに死す。帝、その子咄吉世を立てゝ、始畢可汗となす。裴矩、始畢の部衆、漸く盛なるを以て、その弟叱吉設を拜して南面可汗となし、以て其勢を分たむを請ふ。叱吉設、敢て受けず。始畢聞いて怒る。突厥の臣史蜀胡悉、智謀あり、矩、之を誘殺す。始畢これより朝せず。大業十一年八月、帝、北邊を巡る。始畢、騎數十萬を帥ゐて、乘輿を襲はむを謀る。義成公主、先づ使者を遣して、變を告げしむ。車駕馳せて雁門に入る。突厥騎を引いて、急に攻め、矢、御前に及ぶ。帝、大に懼れ、趙王杲を抱いて泣き、目盡く腫る。乃ち親ら將士を巡り、之に謂つて曰く、努力して賊を擊て、苟くも能く保全すれば、凡そ行陳に在つて、富貴を憂ふる勿からむ、と。又令を下して守城功あるもの、官なきは、直に六品に除し、官あるは、次を以て、增益す。之に由つて、衆皆踴躍し、盡夜拒戰す。又天下に詔して、兵を募り、守令來つて難に赴くすでにして、帝、間使を遣し、救を義成公主に求む。公主使を遣し、始畢に告げて云ふ、北邊警あり、諸郡援兵亦た至る、と。九月、始畢圍を解いて去る。帝、騎を遣して追躡し、老弱二千餘を得て還る。

煬帝亂中の荒淫

その翌十二年正月、朝集使至らざるもの二十餘郡。はじめて、議して、使者を十二道に分遣し、兵を發して、盜賊を討捕せしむ。隋威衰へたること、知るべし。然れども、帝の荒淫、なほ罷まず。上巳の日、群臣と西苑水上に飲み、學士に命じ、古しへの水事

七十二を采り、木を以て之を爲り、間するに、妓航酒船を以てし、人物自ら動いて、能く音曲を成す。この春、毗陵宮を郡の東南に築く。東西周十二里。大抵東都の西苑に倣ひ、奇麗之に過ぐ。夏、景華宮に在り、螢火を徵求し、數百斛を得、夜出て、山に遊び、之を放つ。光、巖谷に遍ねし。これより先、楊玄感の亂、龍舟皆焚く。詔して、更に數千艘を造り、制度更に舊よりも大にし、その成るや、之を東都に送る。宇文述、江都に幸せむことを勸む。將軍趙才、之を諫めしを以て吏に屬し、建節尉任宗、上書極論せしを以て、杖殺せらる。こゝに於て、越王侗等に命じて、後事を總留せしめ、往いて、江都に留連して還らず、而して天下騷亂、正に起る。

李密兵を起す

楊玄感の敗、李密獲られしが、すでにして亡命し、往いて、郝孝懷及び王薄に依りしも、皆禮せられず。困乏姓名を變じ、韋城に去る。翟讓、東都法曹たり、罪を得て、瓦岡に亡命して群盜となり、同郡の單雄信、離狐の徐世勣、之に從ひ、往いて公私の船を掠め、資用豐給、附くもの益す衆し。時に外黄の王當仁、濟陽の王伯當、韋城の周文舉、雍邱の李合逸等、皆衆を擁して、群盜となす。李密、諸賊の間に往來し、間に說くに天下を取るの策を以てす。久うして、之を信じ、密を敬す。密、翟讓の最も彊きを察し、之に勸め、先づ滎陽を取り、兵を休め、穀を館し、士馬の肥充を待ち、然る後に利を爭はしむ。こゝに於て、滎陽諸縣を攻め、多く之を下す。帝、張須陁を徙して、滎陽通守となす。幾もなくして戰死す。因つて、裴仁基をして、代つて其衆を領し、徙つて、虎牢に鎭せしむ。

李密河南を略す

十二月、鄱陽の林士弘、衆十餘萬を擁し、北は九江（江西九江府）より、南は番禺に及ぶまで、皆之を有す。その翌十三年、李密、翟讓に說き、興洛倉を襲はしむ。越王侗、郎將劉長恭をして、步騎一萬五千を帥ゐて、密を討たしめ、河南討捕使、裴仁基をして、汜水より西に入り、以て其後を掩はしむ。密、讓大に之を破り、威聲益す振ふ。讓、こゝに於て、密を推して、主となし、魏公と號し、元年と稱し、その文書行下、行軍元帥と稱し、讓を拜して、司徒となし、單雄信、徐世勣、皆大將軍となす。江淮以北、群盜響應せざるなく、悉く官爵を拜し、各その衆を領せしむ。衆數十萬。乃ち廣く洛に城を築き、將を遣して地を略し、河南の郡縣、多く附く。

突厥亂賊を援く

突厥、かつて煬帝を脅して、窘困せしめしことあるを以て、群盜その後援を仰ぐ

もの多し。劉武周、汾陽宮を取り、隋の宮人を得て、突厥の始畢可汗に賂す。始畢、馬を以て、之に報ゐ、遺るに狼頭纛を以てし、立てゝ定楊可汗となす。武周、皇帝の位に即いて、改元す。梁師都、亦た雕陰・弘化・延安の諸郡を略定し、皇帝の位に即き、國を梁と號す。始畢、亦た遺るに狼頭纛を以てし、號して大度毗迦可汗となす。師都乃ち突厥を引いて、河南の地に居らしめ、鹽州郡を攻破す。流人郭子和、又兵を榆林に起し、自ら永樂王と稱し、南は梁師都に連ね、北は突厥に附く。始畢、武周を以て定楊天子となし、師都を解事天子となし、子和を平楊天子となす。子和、固辭して敢て當らず。乃ち更めて屋利設となす。金城の校尉薛舉、驍勇絶倫、家資巨萬、豪傑に交結し、兩邊に雄たり。金城令郝瑗、兵數千を募り、舉をして之に將として、群盜を討たしむ。舉、其子仁杲及び同黨十三人と、瑗を刼して、兵を發し、倉を開いて、賑施し、自ら西秦霸王と稱す。賊帥宗羅喉、羌酋鍾利俗、各衆を擁して、之に歸し、舉の兵、大に振ふ。因つて、仁杲を以て、齊王となし、少子仁越を晉王となし、羅喉を興王となし、未だ幾ならずして、盡く隴西の地を得、衆十三萬に至る。

武威の司馬李軌、家富んで任俠、薛舉の兵を河西に起すや、軌、同郡の豪傑と謀つて曰く、薛舉必ず來つて侵暴せむ、郡官庸怯、禦く能はず、吾儕豈に手を束ねて人の虜にするところとならむや。如かず、相與に力を併せて之を拒ぎ、河右に保據し、以て天下の變を待たむにはと。衆皆以て然りとなし、遂に共に軌を推して主となす。

李軌と蕭銑

軌、乃ち豪民及び諸胡に結んで、兵を起し、自ら河西平涼王と號す。同時に、巴陵の校尉董景珍・雷世猛・旅帥鄭文秀・徐德基・張繡等、郡に據つて隋に叛かむことを謀り、景珍を推して王となす。景珍曰く、吾素と寒素、衆の服すところとならず、羅川令蕭銑は、梁室の後、請ふ之を奉ぜむ、と。乃ち使を遣して銑に報ず。銑喜んで之に從ひ、召募して、數千人を得、自ら梁王と稱し、隋の服色旗幟を改め、皆梁の舊の如くす。

以上記せしところは、主として西邊一帶の亂寇にして、五胡十六國の餘孽、時に之あるを見る。而して、李淵の舉兵は、最も有力なるものなり。

李淵の出身

李淵は、隴西成紀の人、西涼武昭王暠の後、祖虎、西魏に仕へて功あり、隴西公に封ぜらる。父昞、周の世に於て、唐公に封ぜられ、淵、爵を襲ふ。煬帝、淵を以て弘化の留守となせしが、之を忌みしに由り、酒を縱にし、賂を納れ、以て自ら晦ませしこと、かつ

て述べたるが如し。すでにして、天下盜起るや、淵を以て、山西河東撫慰大使となし、制を承けて、黜陟し、群盜を討捕して、多く捷つ。突厥の邊に寇するや、淵に命じて、之を討たしむ。はじめ、淵、竇毅に娶り、四男を生む。建成・世民・元霸・元吉。ひとり世民聰明勇決、識量人に過ぐ。隋室の方に亂るゝを見、陰かに天下を安んずるの志あり。晉陽の宮監裴寂、晉陽令劉文靜と相結ぶ。文靜、世民に謂つて曰く、今主上南巡し、群盜萬數、この時に當つて、眞主驅駕して、之を用ふるあらば、天下を取る、掌を反へすが如きのみ。太原の百姓、收拾せば、十萬人を得べし。尊公將ゆるところの兵、復た數萬、此を以て、虛に乘じて、關に入り、天下に號令せば、半年に過ぎずして、帝業成らむ、と。世民笑つて曰く、君の言、正に我が意に合へり、と。乃ち陰に部署す。而して、淵は知らざるなり。淵の兵、突厥を拒いて、利あらず、罪を獲むことを恐るゝに會し、世民間に乘じて、淵に說いて曰く、民心に順つて義兵を興さば、禍を轉じて福となさむ、と。淵、大に驚いて曰く、汝安んぞ、この言を爲すを得む。吾今汝を執らへて、縣官に告げむ、と。世民徐ろに曰く、世民、天時人事を觀るに、此の如し、故に敢て言を發す。必ず執らへ告げむも、敢て死を辭せず。淵曰く、吾、豈に告ぐるに忍びむや。汝、愼んで、口より出す

世民の四征

勿れ、と。明日復た說て曰く、人皆傳ふ、李氏當に圖讖に應ずべし、と。故に李金才、故なくして滅ぼさる。大人能く賊を盡さば、功高くして賞せられず、身益す危からむ。惟だ昨日の言、以て禍を救ふべし、これ萬全の策、願くは疑ふなかれ、と。淵嘆じて曰く、吾一夕汝の言を思ふに、亦た大に理あり、今日家を破り身を亡ぼすも、亦た汝に由らむ。家を化して、國となすも、亦た汝に由らむ、と。これより先、裴寂私に晉陽の宮人を以て、淵に侍せしむ。淵、寂に從つて、酒を飲む。寂曰く、二郎陰に士馬を養ひ、大事を擧げむと欲す、正に寂、宮人を以て公に侍せしむるは、事覺はれ併せ誅せらるゝを恐るゝが爲のみ、と。會ま煬帝、淵が寇を擧ぐ能はざるを以て、使者をして、執らへて、江都に詣らしむ。世民、寂等と復た說いて曰く、事すでに迫れり、宜しく早く計を定むべし、且つ晉陽士馬精强、宮監の蓄積巨萬、代王幼冲、關中の豪傑、並び起る、公もし鼓行して、西し、撫して之を有せば、囊中の物を探るが如きのみ、と。淵乃ち召募して、兵を起す。遠近赴き集る。仍つて使を遣して、兵を突厥に借る。

すでにして、世民兵を引いて、西河を擊つて、之を拔き、郡丞高儒德を斬り、之を數めて曰く、汝、野鳥を指して鸞となし、以て人主を欺いて高官を取る。吾の義兵を興

すは、正に佞人を誅するが爲のみ、と。淵、捷を聞き、大に喜んで曰く、此行の兵を以てすれば、天下を横行すと雖も可なり、と。遂に入關の計を定め、次いで、自ら大將軍と稱し、府を開いて、官屬を置き、子元吉をして、晉陽に留守せしめ、甲士三萬を帥ゐて、西行す。代王侑、郎將宋老生を遣して、霍邑に屯せしめ、大將軍屈突通をして、河東に屯せしめ、以て淵を拒ぐ。會ま積雨、淵進む能はず、中軍糧乏しく、將に引いて還らむとす。世民策を獻じて、敵を破る。すでにして、太原の運糧、亦た至り、雨すでに霽る。淵、霍邑に趣き、宋老生と戰つて、之を斬る。次いで、臨汾・絳郡に克つ。劉文靜、突厥の兵五百、馬二千を以て至る。淵大に喜び、遂に攻めて、韓城（陝西同州府）を下す。

李密洛口に防ぐ

これより先、李密東都を下し、遂に檄を郡縣に移し、帝の十罪を數へ、且つ曰く、南山の竹を盡して罪を書するも窮なく、東海の波を決して惡を洗ふも盡き難し、と。尋いで、帝、將軍龐玉をして、關内の兵を將ゐて、東都を援けしむ。柴孝和、密に說き、翟讓をして、洛口を守らしめ、裴仁基をして、回洛を守らしめ、而して、自ら兵を帥ゐて、長安を襲ひ、然る後、東向、以て河洛を平げしむ。密、その計を善とすれども、用ふるを果さず。すでにして、越王侗、段達をして龐玉等と、夜、兵を出して、與に戰はしめ、大に之を破る。乃ち回洛を棄てゝ、洛口に奔り、後又戰つて、之を復す。すでにして、王世充韋霽等、來り救ひ、密を洛口に合擊す。

李淵關中を畧す

この間、馮翊太守蕭道、李淵に降り、淵自ら兵を引いて、西、是濟河に至る。關中の士民、これに歸するもの、市の如し。淵、世子建成・劉文靜を遣し、王長諏等、諸軍を帥ゐて、水豐谷に屯し、潼關を守り、以て東方の兵に備へしめ、世民は劉弘基等諸軍を引いて、渭北を徇ふ。關史の群盜、悉く淵に降る。京兆内史衛文昇、年老ひ、淵の至るを聞き憂懼疾をなす。ひとり、將軍陰世師・郡丞骨儀、代王侑を奉じ、城に乘じて拒守す。淵、劉弘基・殷開山に命じ、兵を分つて、西、扶風を略す。衆六萬あり。南、渭水を渡る。城中出でゝ戰ふ。弘基逆擊して、之を走らし、建成・世民、又軍を進め、十月長安に至る。諸軍みな集合す。凡そ二十餘萬。淵命を下し、各壘壁に依り、村落に入つて侵暴なからしめ、十一月、遂に克つ。代王の左右奔散す。淵、王を東宮に迎へ、遷つて大興殿後廳に居らしめ、還つて、長樂宮に會し、民と法十二條を約し、悉く隋の苛禁を除く。淵の兵を起すや、留守官、その祖の墓を發き、その五廟を毀つ。こゝに至り、衛文昇、すでに卒す。陰世師・骨儀等、十餘人を執らへて、之を斬り、餘は問ふところなし。すでにして、淵、代王侑

煬帝の弑

を立てゝ、皇帝となし、煬帝を尊んで、太上皇となし、自ら大丞相となり、唐王に封ぜられ、建成を以て、唐王世子となし、世民を秦公となし、元吉を齊公となし、裴寂を長史となし、劉文靜を司馬となす。

帝、なほ江都に在り、荒淫益す甚し。然れども、天下の危亂を見、亦た自ら安んぜず。朝を退けば、幅巾短衣、徧ねく臺閣を歷、汲汲景を顧みて、惟だ足らざるを恐る。又常に仰いで天文を視、蕭后に謂つて曰く、外間大に人の儂を圖るあり、然れども、且つ樂飲せむのみ、と。因つて滿を引いて沈醉す。又鏡を引き、自ら照して曰く、好頭頸、誰か當に之を斫るべき、と。后慨いて問ふ。帝、笑つて曰く、貴賤苦樂、交迭之を爲す、亦た復た何ぞ傷まむ、と。ずでにして、平原の亂れしを見、北歸に心なく、因つて江東を保つて長く帝たらむと欲し、乃ち命じて、丹陽宮を治し、將に徙つて之に都せむとす。こゝに於て、郎將司馬德戡、元禮直閤裴虔通等、先づ逆を爲さむとを謀り、將作少監宇文智及及びその兄許公化及を請うて、主となし、夜、東城に於て兵を集め、數萬人を得、德戡、虔通をして、數百騎を將ゐて、宮に入らしめ、亦た自ら繼いて、兵を引いて

玄武門より入る。帝、亂を聞き、服を易めて西閤に逃る。虔通等、永巷に入り、陛下安に在るかを問ふ。美人出てゝ之を指す。校尉令狐行達、刀を拔いて、直に進み、帝を扶け、閤を下り、兵を勒して、之を守り、旦に至りて、甲騎を以て化及を迎ふ。化及戰栗して言ふ能はず。ずでに至る。德戡等、迎謁し引いて朝堂に入れ、號して丞相となす。虔通、帝に逼つて、宮を出づ。化及之を見て曰く、何ぞ此物を持つて出づるを用ひむ、亟かに還つて手を與へよ、と。こゝに於て、帝を引いて、還つて寢殿に至る。虔通等、露刃侍立す。帝、嘆じて曰く、我何の罪か此に至る。賊黨馬文舉曰く、陛下宗廟を遠棄し、巡遊息まず、外、征討を勤め、內、奢淫を極め、丁壯をして、矢刃に盡き、少弱をして溝壑に塡し四民をして業を喪はしめ、盜賊蜂起、專ら佞諛に任じ、非を飾り、諫を拒む、何ぞ罪なしといはむ。帝曰く、我實に百姓に負く、卿等に至りては、榮祿兼ね極まる、何ぞ乃ち是の如き、今日の事、孰れか首たる。德戡曰く、溥天同怨、何ぞ止だ一人の化及のみならむ、と。封德彝をして、帝の罪を數へしむ。帝曰く、卿乃ち士人、何すれぞ亦た爾る、と。德彝赧然として退く。帝の愛子趙王杲、年十三、側に在りて、號慟已まず。虔通之を斬り、血、御服に濺ぐ。遂に帝を弑せむと欲す。帝曰く、天子死する、自ら法あり、何ぞ加

ふるに鋒刃を以てするを得む、鴆酒を取つて來れ、と。文舉等、許さず。こゝに於て、令狐行達、帝を斫つて、之を縊殺し、諸王皆戮せらる。ひとり、秦王浩、素より智及と往來せしを以て、免るゝを得たり。化及自ら大丞相と稱し、百揆を總べ、皇后の令を以て、秦王浩を立てゝ帝となし、別宮に居らしめ、兵を以て、之を守る。時に大業十四年三月なり。すでにして、化及衆十萬を擁して、六宮を據有し、自ら奉ずること、煬帝の如く少主浩を以て尚書省に附し、衛士をして之を守らしめ、吏を遣して、その書敕を取り、百官復た朝參せず。乃ち令を下して、長安に還らむと欲し、人の舟楫を奪ひ、以て行く。彭城に至るに及び、魏公李密の兵、洛に據り、化及を拒ぎ、以て西するを得ず。遂に兵を引いて東都に入る。

唐の高祖の即位

第九十三章　唐の統一

これより先、唐王李淵、自ら殊禮を加へ、すでにして、復た相國となり、百揆を總ぶ。五月、隋帝位を唐に禪り、唐王、皇帝の位に即き、五運を推して、土德となし、色は黃を尚び、隋帝侑を廢して、酅國公となし、その宗室を選用す。これを唐の高祖神堯皇帝となす。同時に、東都の留守官、煬帝の凶問を聞き、越王侗を奉じて位に即かしめ、殷達・王世充を納言となし、元文都を內史令となし、ともに朝政を掌らしむ。是を恭帝となす。これより先、薛舉、秦帝と稱せしが、梁王銑、又帝と稱せり。

薛氏亡ぶ

この年、唐の秦王世民、秦王薛舉と高墌に戰つて敗績す。郝瑗因つて舉に勸めて、直に長安を取らしむ。すでにして、舉卒し、その子仁杲立つ。十一月、世民又秦を伐ち、高墌に至り、壁を堅うして、相持すること六十餘日、仁杲糧盡き、諸部多く降る。世民因つて兵を進め、秦將宗羅喉を破り、騎を帥ゐて、之を追ふ。竇軌、馬を叩いて世民を苦諫して曰く、破竹の勢、失ふべからざるなり、と。遂に進んで仁杲を圍む。仁杲の將士多く叛き、計窮つて出てゝ降り、その精兵萬餘人を得、還つて、長安に至り、仁杲を斬る。仁杲父子、隴西に據り、凡そ五年にして滅ぶ。

李密隋に歸服す

これより先、東都、宇文化及の西來を聞き、隋の君臣、皆畏懼す。蓋琮といふもの、上疏して、李密に說いて、之と勢を合せ、以て拒守せむとす。こゝに於て、琮をして、敕書を齎らして、密に賜はしむ。化及兵を引いて、黎陽に赴く。密の將徐世勣、擊つて之を

李密唐に降る

破る。密、東都の其後を議せむを畏る、其後、蓋琮の至るを見、大に喜び、遂に上表して、降を乞ひ、化及を滅し、以て罪を贖はむを請ふ。隋主冊して太尉となし、魏公に封じ、化及の平ぐを待ち、入朝して政を輔けしむ。李密毎戰毎勝、輙ち使して捷を告ぐ。而して、王世充、ひとり密を喜ばず。又、元文都と隙あり。こゝに於て、遂に文都を殺し、恭帝に謝して曰く、文都等、李密を召し、以て社稷を危うせむと欲し、臣の違異するを疾み、深く猜嫌を積む。死を救ふに急して、聞奏に暇あらず、と。乃ち髮を披いて、誓詞をなし、涙ともに發す。隋主以て誠となし、世充を以て左僕射總管內外諸軍事となす。密、將に入朝せむとして溫に至り、變を聞いて還り、乃ち洛口倉を開く。群盜食に就くもの百萬口に近く、東都降るもの百を以て數ふ。時に隋軍食に乏しく、密の軍衣に乏し。王世充、交易を請ふ。密之を許し、東都降るもの少し。世充兵を簡して、密を擊つ。密自ら精兵を引いて、偃師より出で、北邙山を阻し、以て待つ。密、世充を輕んじ壘壁を設けず、世充、夜、騎を遣し、潛に北山に入り、谿谷中に伏し、遲明軍を進めて、密に薄り、伏兵高に乘じて、馳せ下り、大に密の衆を敗る。密、洛口に回り、南、河北を阻し、北、太行を守り、東、黎陽に連ね、以て進取を謀らむと欲す。諸將曰く、兵新に利を失ひ

李密の死

衆心危懼、以て功を成し難し、と。密乃ち三萬人を率ゐて、關に入る。唐王使を遣して迎勞せしむ。密、喜んで曰く、我衆百萬を擁し、甲を解いて唐に歸す。竇融に比するも功亦た細ならず。豈に司台を以て處られざらむや、と。長安に至るに及び、乃ち光祿卿に拜し、爵、邢國公を賜ふ。密大に望を失ふ。こゝに於て、密の將帥郡縣、多く隋に降る。密の將徐世勣、なほ舊境に據り、未だ屬するところあらず。魏徵又密に隨つて、長安に至り、名を知らるゝところなし、乃ち自ら山東を安集せむを請ひ、因つて、秘書、丞となり、傳に乘じて、黎陽に至り、世勣に勸めて、早く降らしむ。唐主、世勣を以て德に背かずとなし、姓李氏を賜ふ。

すでにして、李密、唐王に言ひ、又山東を招撫せむことを請ひ、賈閏甫と偕に行く。唐王之を許し、王伯當を以て副となし、之を遣る。密すでに關に出づ。關の長史張寶德、封事を上り、その必ず叛かむを言ふ。唐王乃ち密に敕し、還つて節度を受けしむ。密遂に使者を斬り、桃林縣に入り、徒衆を驅掠し、直に南山に趣き、險に乘じて東し、人をして馳せて故將伊州刺史張善相に告げ、兵を以て、應援せしめ、洛に向ふと聲言す。行軍總管盛彥師、之を聞き、衆を率ゐて、熊耳山を踰え、南要道に據り、その衆を

して途を夾んで、伏せしめ、密の至るや、擊つて之を斬り、首を長安に傳ふ。李世勣、黎陽に在り、唐主使を遣し、密の首を以て之に示す。世勣北面號慟、表して收葬を請ひ、舉軍縞素、之を葬る。密素より士心を得たり、之を哭して、嘔血するもの多し。

時に宇文化及、兵勢日に蹙り、兄弟酣晏す。智及を尤めて曰く、今向ふところ成るなく、君を弑するの名を負ひ、天下容れず、必ず滅族せられむとす、豈に汝に由らずや、と。智及怒つて、相鬪閧し、その衆多く亡ぶ。化及嘆じて曰く、人生固より死すべし豈に一日も帝たらざらむや、と。こゝに於て、秦王浩を鴆殺し、帝を魏縣に稱し、國を許と號す。はじめ、竇建德、河間を攻めしが、歲餘下らず。煬帝の凶問至るに及び郡丞王琮、乃ち降を請ふ。建德、その忠を嘉し、瀛州刺史となす。こゝに於て、河北の郡縣、之を聞いて爭うて附く。建德因つて都を樂壽に定め、百官を備置し、次いで國號を改めて夏といふ。朱粲、撫慰使馬元規の爲に敗られしも、餘衆を攻擊して、復た大に振ひ、自ら楚帝と稱し、鄧州を改め、元規を殺し、刺史呂子臧、亦た之に死す。こゝに於て隋の恭帝の東都に在ると、唐王の長安に在ると、を除いて、林子弘の楚、定陽可汗の

諸僭國割據の形勢

魏及び涼梁秦に加ふるに、この三國を以てし、天下すべて十國あり、その紛亂、想ふべきなり。

宇文化及の死

その翌、唐の武德二年、許帝宇文化及、海曲の諸賊帥王薄等を誘ひ、ともに聊城を守る。竇建德、その下に謂つて曰く、隋は吾が君なり、吾は隋の民たり、化及弑逆、討たざるべからずと。乃ち兵を引いて、聊城に趣き、化及と連戰し、大に之を破り、化及を生擒し、先づ隋の蕭后に謁して、臣と稱し、素服し、煬帝を哭して哀を盡し、傳國璽を收め、智及とその黨與とを執らへ、隋宮に集つて、之を斬り、檻車を以て化及を載せ、之を襄國に斬る。唐主、淮安王神通を以て、山東安撫大使となす。すでにして、建德邢洺相等諸州を取る。神通守る能はず、李世勣に黎陽に就く。建德、又趙州を取り、街州を并せ、黎陽を過ぐる二十里、與に戰つて、神通に及び、世勣の父蓋、等、并に魏徵等を虜にす。世勣走免數日、父の故を以て、還つて、建德に詣る。建德、黎陽を守らしめ、その父を以て質となし、遂に都を洛州に移す。

王世充の弑逆

隋の王世充、すでに元文都等を殺し、而かも、人情未だ附かざるを慮り、猶ほ隋主に媚事す。すでにして、漸く驕橫、復た朝謁せず。こゝに及び、文武を召集し、議して、九

錫を受け、鄭王に爵し、隋主に逼つて、位を讓らしめ遂に皇帝の位に即き、隋主侗を封じて、滕國公となす。裴仁基・行嚴等、世充を殺して、復た隋主を立てむを謀り、皆三族を夷せらる。世充又人をして、隋主を酖せしむ。隋主太后と訣れむを請ふ。許さず乃ち席を布き、佛に禮して曰く、願くは、今より以往、復た帝王の家に生れざらむと。藥を飲むも、絕ゆる能はず。帛を以て之を縊殺す。

梁吳二僭國

その八月、沈法興、梁王と稱して、毗陵に都し、性殘忍、專ら威刑を尙び、その下、離怨す。時に杜伏威、歷陽に據り、陳稜、江都に據り、李子通、海陵に據り、ともに江表を窺ふの志あり。子通、江都を攻めて、之に克ち、稜、伏威に走る。子通、江都に入り、帝位に就き國、を吳と號す。

劉武周の入寇

これより先、定陽可汗劉武周、唐の楡次を取り、進んで並州を圍む。元吉、時に晉陽に鎭し、之を拒却す。武周、又宋金剛をして、並州に寇せしむ。金剛は、本と易州の賊竇建德の敗るところとなり、武周に歸し、號して、宋王となされしものなり。こゝに於て、唐、裴寂を以て、總管となす。寂、敗られて、軍潰え、晉州以北、城鎭皆沒し、武周進んで幷州に逼る。元吉、その參佐を給き、夜、妻妾を携へ、奔つて長安に還る。武周太原に據り、金剛を遣し、晉州を改めて、之を拒ぎ、進んで絳州に逼り、龍門を陷る。

涼の滅亡

隋唐間の紛擾、かくの如く、之を漢末に比して、むしろ、甚しきものあり。支那史上殆んど空前と稱すべきなり。然れども、唐は新昌の勢に乘じて、漸次他を併略せり。この年四月、唐の冊使、涼州に至る。その王李軌、帝號を去り、唐爵を受けむと欲す。その臣、聽かざるものあり、乃ち書を奉じて、皇從弟大涼皇帝と稱す。唐王大に怒り、吐谷渾をして、之を討たしむ。軌の將安修仁の兄興貴、長安に在り、請うて赴き、軌に說くに、竇融の故事を以てす。軌、聽かず。興貴乃ち修仁と諸胡に結び、兵を起して、軌を擊ち、之を虜にし、長安に送つて、之を斬る。軌、事を起してより亡ぶるに至るまで、僅に三年。

朱粲の死

朱粲、さきに楚帝と稱し、衆二十萬あり、漢淮の間を剽掠し、州縣を破る毎にその積粟を食ひ、將に去らむとするや、悉く其餘を焚く。軍中食に乏し、乃ち士卒に敎へて、婦人嬰兒を烹て之を噉はしむ。曰く、肉の美なるもの、人に過ぐるなし、何ぞ餒を憂へむ、と。こゝに於て、諸城堡、相率ゐて之に叛く。淮安の土豪楊士林、兵を起して、粲を攻め、傍郡響應す。粲大に敗れ、菊潭に走る。士林漢東四郡を帥ゐて唐に降る。すでにして、粲又唐に降りしが、その後、王世充に奔り、却つて世充の爲に敗られ、洛

劉武周の敗死

水の上に斬らる。士庶瓦礫を擲つて其尸を擊ち、須臾にして冢の如し。

宋金剛すでに龍門を陷れ、次いで、滄州を陷る。唐主大河以東を棄てゝ、關西を守らむとす、秦王世民、之を諫め、因つて關中の兵を發し、自ら之を率ゐて出で、河を渡つて、柏壁に屯し、金剛と相對す。民多く之に歸す。世民、兵を休め、馬を秣ひ、壁を堅うして、戰はず、惟だ偏裨をして、間に乘じて鈔掠せしむ。すでにして、金剛食盡き、北に走る。世民追ひ及び、大に之を破り、勝に乘じて、北ぐるを逐ふこと一晝夜、行くこと二百餘里、戰數十合。劉弘基、世民を諫めて曰く、功成り難くして、敗れ易く、機は得易くして失ひ易し、この勢に乘じて、之を取れと。遂に急進し、追うて、金剛に雀鼠谷に及び、一日八戰、皆之を破り、俘斬數萬人。世民食はざること二日、軍中止だ一羊あり、將士と分つて、之を食ひ、兵を引いて、介休に趣く。金剛衆二萬を以て、西門を出で、城に背して、陳を布き、南北七里。これより先、李世勣、又唐に歸して軍中に在り、與に戰つて、少しく却く。世民精騎を帥ゐて、之を擊ち、その陳後に出で、金剛大に敗る。尉遲散德、尋いで介休及び永安を擧げて降る。劉武周、金剛の敗を聞き、大に懼れ、并州を棄てゝ、突厥に走る。金剛復た戰はむと欲す。衆肯へて從ふなく、亦た突厥に走る。世民并州に入り、武周得るところの州縣、皆唐に入る。未だ幾ならずして、武周馬邑に歸らむを謀り、事泄れ、突厥之を殺す。金剛又上谷に走らむを謀り、突厥追獲して之を膾斬す。時に武德三年四月なり。

王世充

唐主又秦王に詔し、諸軍を督して、王世充を擊たしむ。世民、行軍總管史萬寶を遣し、宜陽より南して、龍門に據り、劉德威、太行の東より河內を圍み、王君廓、洛口より、その餉道を斷ち、黃君漢、廻洛城を攻め、大軍北邙に屯し、營を連ね、以て之に逼る。すでにして、世民、王君廓を遣して、轘轅を攻めて、之を拔く。こゝに於て、河南の州縣、相繼いで唐に降る。世充の子元德、虎牢に鎭し、諸州の叛を聞き、奔つて、洛陽に還り、許亳等の州、亦た唐に降る。その翌年、世民奏請して、東都を圍み、軍を靑城に移す。壘壁未だ立たず、王世充、衆二萬を帥ゐ、穀水に臨みて、之を拒ぐ。諸將皆懼る。世民乃ち屈突通に命じ、步卒五千を率ゐ、水を渡つて、之を擊つ。兵交る。世民騎を引いて、南下し、身士卒に先ち、通じて勢を合す。衆殊死して戰ひ、散じて復た合するもの數回。辰より午に至り、世充の兵、はじめて退く。世民兵を縱つて之に乘じ、直に城下に抵り遂に之を圍む。城中守禦甚だ嚴、世民四面之を攻め、旬餘克つ能はず。然れども、猶ほ

突厥の入寇

之を攻め、令を軍中に下して曰く、敢て師を班せといふものは斬らむ、と。

時に突厥の頡利可汗、士馬雄盛、中國を憑陵するの志あり。王世充、人をして之に說かしめて曰く、むかし啓民隋に奔り、文帝の力に賴つて、この土宇を有し、子孫之を享く。今唐は文帝の子孫に非ず、宜しく、政道を奉揚して、之を伐ち、以て文帝の恩に報ずべし、と。頡利之を然りとなす、唐主、中國未だ寧からざるを以て、突厥を待つこと、甚だ厚く、而して、頡利求請、厭くなく、言辭驕慢、こゝに至りて、汾陰に寇す。すでにして、唐主使を遣して、頡利に賂し、幷に婚を結ぶを許す。頡利乃ち使を遣して、唐に如かしむ。未だ幾ならずして、頡利騎十五萬を帥ゐて、雁門に入り、幷州に寇す。唐主襄邑王神符を遣し、擊つて之を破る。乃ち鄭元璹を遣して、頡利に詣り、責むるに約に負きしを以てす。頡利頗る慙づ。元璹因つて之に說き、帥を還して、好を修む。頡利悅び、遂に兵を引いて降る。

唐兵、洛陽を圍み、壘を築いて、之を守る。城中食に乏しく、死するもの、道に相倚る。竇建德、世充の請に應じ、その衆を發して、西、洛陽を救ひ、管州及び滎陽陽

竇建德の敗

翟等の縣を陷れ、水陸並に兵を進め、十餘萬、成皐の東に軍し、使を遣して、王世充と相聞せしむ。これより先、建德書を秦王世民に遺り、軍を退け、鄭の侵地を還さむを請ふ。世民許さず。乃ち麾下を中分し、屈突通等をして、齊王に副として、東都を守らしめ、自ら驍勇を將ゐて、東、武牢に赴く。建德之に逼る累月、進むを得ず。戰つて、屢ば利あらず。將士歸るを思ふ。世民又王君廓をして、精騎千餘を遣し、その糧道を掠めしむ。五月建德衆を悉くして、牛口に出で、陳を置き、二十里に亘り、鼓行して進む。諸將皆懼る。世民高に升り、之を望み、諸將に謂つて曰く、賊、山東に起り、未だ嘗て大敵を見ず、今險を度つて營、これ紀律なし、城に逼つて陳し、我を輕ずるの心あり。我兵を按して出てざれば、彼の勇氣、日に衰へむ、陳久しく卒饑ゆれば、勢將に退かむとす。追うて、之を擊てば、克たざるなからむ、と。建德陳を列し、辰より午に至り、士卒饑倦、逡巡退かむと欲す。世民、宇文孝に命じ、三百騎を將ゐ、建德の陳を經、西に馳せて南に上る。建德の陳動く。世民曰く、擊つべし、と。因つて、輕騎を率ゐて、先つて進み、大軍之に繼ぎ、直に其陳に薄る。建德、方に群臣を朝し、騎兵を召し、唐兵を拒がしむ。朝を阻まれしもの、過ぐるを得ず。建德朝者を揮つて退かしむ。進退の間、唐兵すでに

李子通の敗

至る。こゝに於て、大に戰ふ。世民、史大奈・程知節・秦叔寶等を帥ゐ、旆を卷いて入り、陳後に出て、唐の旗幟を張る。建德の將士、之を見て、大に潰ゆ。建德、壍に中つて、馬より墜つ。東騎將軍揚武威、之を擒にす。建德の將士、皆潰え去り、俘獲五萬人、世民即日散遣して、鄉里に還らしめ、遂に建德を囚へて、洛陽城下に至り、以て世充に示す。世充乃ち素服し、その子及び群臣三千餘人を率ゐ、軍門に詣つて降る。こゝに於て、諸軍を部分し、先づ洛陽に入り、市肆を分守して、侵掠を禁止し、敢て犯すものなし。世民乃ち宮城に入り、房玄齡に命じ、隋の圖籍を收めしむ。制誥すべて世充の毀つところとなる。蕭瑀等に命じて、府庫を封じ、その金帛を收めしむ。世民、隋の宮殿を觀、嘆じて曰く、侈心を逞うし、人力を窮む、亡びざらむと欲するも得むや、と。遂に端門樓を撤し、乾陽殿を焚き、則天門を毀ち、諸道塲を闕廢す。世充・建德の地、悉く平ぐ。世民長安に還り、俘を大廟に獻じ、世充を赦し、建德を斬る。

これより先、吳王李子通、江を渡り、沈法興を攻め、京口を取る。法興、吳郡に敗走す。こゝに於て、丹陽毗陵等諸郡、皆子通に降る。杜伏威、輔公祏を遣して、之を攻めしむ。子通、大に敗れ、江都を棄てゝ、京口を保つ。江西の地、盡く伏威に入る。伏威徙つて丹陽に居る。子通復た太湖に走り、亡散を收合し、二萬人を得、沈法興を吳郡に襲ひ、大に之を破り、法興江に赴いて溺死す。子通の軍勢、復た振ひ、その群臣を帥ゐ、徙つて餘杭に都し、盡く法興の地を取り、北は太湖より、南は嶺に至り、東は會稽を包み、西は宣城を距いて、皆之を保つ。武德四年十一月、林伏威、その將王雄誕を遣して、子通を討たしむ。子通窮蹙して降を請ふ。伏威執らへて、長安に送る。唐王之を釋るす。

梁王蕭銑

之に先つこと一月、唐、巴蜀の兵を發し、趙郡王孝恭・李靖を以て、之を統べしめ、襲州の東より、東して蕭銑を擊つ。孝恭等、荆門宜都の二鎭を拔き、進んで夷陵に至り、北、江に入る。銑、兵を罷め、農を營むを以て、宿衛纔に數十人、乃ち悉く見兵を出して戰ひ、大に敗る。唐兵勝に乘じ、直に江陵に抵り、その外郭に入り、大に舟艦を獲、之を江中に散ず。援兵舟艦を見、疑うて、敢て進まず、遂に江陵を圍む。銑、內外阻絕、策を岑文本に問ふ。文本降を勸む。銑、群臣に謂つて曰く、天、梁を祚せず、復た支ふべからず、必ず力屈するを待てば、百姓害を被る、奈何ぞ、我の故を以て、百姓を塗炭に陷れむや、と。太牢を以て廟に告げ、令を下して、出てゝ降る。城を守るもの、皆哭す。銑、群臣を帥ゐて、繩縗布幘、軍門に詣つて曰く、死に當するものは、唯だ銑のみ、百姓罪なし、願

林士弘の死

くは、殺掠せされ、と。孝恭、銑を長安に送つて都市に斬る。

その翌、武德五年、十月、楚主林士弘、はじめ蕭銑の逼迫するところとなり、退いて、徐干(江西饒州府)を保ち、銑の敗るるに及て、散卒多く之に歸し、軍勢復た振ひしが、その月死し、その衆、遂に散ず。

劉黑闥

諸僭國、すでに滅びしも、天下未だ清平に歸せず。竇建德の諸將、閭里に居り、暴横民の患をなす。唐の官吏、法を以て、之を繩す、皆驚懼して安んぜず。會ま詔して、悉く建德の故將を徵す。こゝに於て、范願・高雅賢等、亂を作さむを謀り、之をトするに劉氏を以て吉となす。因つて、相與に漳南に之き、建德の故將劉雅を見る。雅曰く、天下適ま安定す、吾將に耕桑に老ひむとす、復た兵を起すを願はず、と。衆怒つて、之を殺す。故の漢東公劉黑闥、漳南に屏居す、諸將之に詣り、告ぐるに其謀を以てす。黑闥方に蔬を種ゆ、即ち牛を殺し、之を飲食して、計を定め、衆を聚め、縣を襲うて、之に據る。すでにして、又鄃縣を陷る。建德の舊黨、稍や出て、之に歸す。乃ち壇を漳南に築き、建德を祭り、告ぐるに擧兵の意を以てし、自ら大將軍と號し、その翌年、漢東王と稱し、元を改め、洺州に都す。唐主、將軍秦武通・定州總管李元通に詔して、之を擊たしめ、又李藝に詔し、兵を引いて、會擊せしむ。徐圓朗、はじめ李密に附き、密の敗るゝや、竇建德に歸し、唐の洛陽を平ぐるや、降を請ひ、兗州總管を授けられしが、劉黑闥の兵、起るに會し、之に應じ、自ら魯王と號す。時に幽州餓ゆ。李藝、糴を高開道に告げ、之を許す。藝、三千人を發し、車數百乘、馬千匹、往いて粟を受く。開道、悉く之を留め、絶を藝に告げ、復た燕王と稱し、北は突厥に連り、南は劉黑闥と相結ぶ。恒・定・幽・易、咸な其害を被る。之に久うして、開道、復た唐に歸せむと欲して未だ果さず、すでにして、その將の殺すところとなる。

黑闥の敗

はじめ、黑闥、淮安王神通を擊破し、すでにして、又定州を破り、總管李元通を執ふ。李世勣、走つて洺州を保つ。黑闥、復た追て、之を破り、半歲の間、盡く建德の舊地を復し、北、突厥に連ぬ。將軍秦武通・程名振等、皆河北より遁れて長安に歸る。こゝに於て、秦王世民・齊王元吉に命じて、之を討たしむ。武德五年三月、世民軍を洺水の上に進め、李藝兵數萬を以て來り會す。黑闥、その僕射范願をして、留守せしめ、自ら兵を將ゐて、藝を拒ぐ。程名振、鼓六十具を載せ、城西の堤上に於て、急に之を擊ち、城中の地、

皆震動す。范願馳せて黒闥に告ぐ。黒闥、遽に還り、兵を遣し、鼙を鼓城に擊ち、大に敗る。世民鼙と洺水の南に營す。黒闥數ば戰を挑む。世民壁を堅うして、應ぜず。李世勣、擊つて、黒闥の將高雅賢を斬る。程名振、又邀へて、その運糧を截り、相持すること六十餘日。世民、黒闥の糧盡くれば必ず來つて決戰せむことを料り、乃ち人をして洺水の上流に堰せしむ。黒闥果して步騎二萬を帥ゐ、南、洺水を度り、唐營を壓して陣す。世民自ら精騎を將ゐ、之を擊破す。黒闥、衆を率ゐ、殊死して戰ひ、午より昏に至り、戰數合、勢支ふ能はず、遂に先づ遁る。餘衆、知らずして、猶ほ格戰す。守吏堰を決し、水大に至り、衆遂に潰ゆ。黒闥、范願等と突厥に走り、山東悉く平ぐ。

徐圓朗、李子通の死

秦王世民、更に兵を轉じて、徐圓朗を擊ち、十餘城を下し、聲、淮泗に震ふ。杜伏威、大に畏れ、遂に請うて入朝す。世民淮濟の略ぼ定まりしを以て、淮安王神通及び任瓌、李世勣をして、圓朗を攻めしめ、自ら兵を引いて還る。すでにして、圓朗城を棄てゝ夜亡げ、野人の殺すところとなる。李子通、さきに擒へられ、杜伏威の處に在り、伏威の入朝を聞き、往いて其衆を收めむと欲し、遂に亡げ走り、藍田に至り、吏の獲るところとなりて誅せらる。

劉黒闥の死

黒闥、すでに突厥に走り、其兵を引いて、山東に寇し、又定州に寇す。唐、齊王元吉をして、之を擊たしむ。淮陽王道元、兵三萬を將ゐ、黒闥と戰ひ、敗れて歿す。山東、震駭す。黒闥悉く故地を復し、遂に洺州に據る。元吉敢て進まず。太子建成、行かむことを請うて發す。その兵、昌黎に至る。黒闥亡げ走る。太子、騎將劉弘基を遣して、之を追はしめ、饒陽に至る。黒闥置くところの刺史諸葛德威、出て迎へ、之を饋し、食未だ畢らず、兵を勒して之を執らへ、送つて太子に詣らしめ、洺州に斬る。黒闥刑に臨んで嘆じて曰く、我幸に家に在つて鋤菜す、高雅賢等の誤るところとなりて、此に至る、と。

こゝに於て、群雄悉く平ぎ、ひとり梁師都、なほ突厥に據るあるのみ。楊玄感、兵を起し、隋の亂を始めてより、こゝに至るまで、正に十年、四百州の天下を擧げて、こゝに始めて新興の唐主を戴くことゝなれり。

(一〇)　唐の初世

第九十四章　高祖の諸政

唐初治法の更定

唐の高祖、位に即いて後、四方の叛寇を剿治するに、日も維れ足らざる間に於て、猶ほ内治を整備するを忘れず。はじめて郡を罷め、州を置き、太守を以て刺史となし、又裴寂・劉文静等に命じ、律令を修して、之を行はしめ、國子太學四門生三百餘員を置き、郡縣の學亦た生員を置く。次いで、宗室王に封ぜらるゝもの八人、又租庸調の法を定め、その法、人丁を以て本となし、田には租あり、身には庸あり、戸口には調あり、歴代の制を増益して、之を定む。諸宗姓に詔し、官に居るもの、同列の上に在らしめ、未だ任ぜざるものは、徭役を免じ、州ごとに宗師一人を置き、以て攝總し、別に團伍となす。その軍制に至りては、十二軍を置き、關内諸府を分統せしめ、皆天星を以て名となし、軍ごとに將副各一人、督するに耕戰の務を以てす。これに由つて、士馬精彊、向ふところ、敵なし。武德六年、十三年、俱に廢し、尋いて之を復す。即ち關中を析して、十二道となし、萬年道を參旗軍となし、長安道を鼓旗軍となし、富平道を元戎軍となし、醴泉道を井鉞軍となし、同州道を羽林軍となし、華州道を騎官軍となし、西麟道を苑游軍となし、寧州道を折威軍となし、岐州道を平道軍となし、幽州道を招搖軍となし、涇州道を天紀軍となし、宜州道を天節軍となす。その後、又官名を改め、納言を侍中となし、内史令を中書令となし、給事郎を給事中となし、隋末錢幣濫薄、皮を裁し紙を糊して、之を爲るに至り、民間その弊に堪へざるを以て、はじめて、開元通寶を行ふ。錢の徑八分、重さ二銖四絫、十錢を積んで重さ一兩、輕重大小、最も折衷となし、遠近之を便とす。これより先、突厥數ば邊患をなすを以て、幷州長史寶靜表して、太原に于いて屯田を置き、以て餽運を省かむことを請ふ。議者以て煩擾となす。靜、切論して已まず、乃ち徵して入朝し、裴寂等と唐主の前に相問難せしむ。寂等、屈する能はず、乃ち靜の議に從ひ、歲に穀數千斛を收む。秦王復た屯田を幷州の境に增置せむことを請ひ、之に從ふ。

武德七年、すでに群雄を平げ、天下を一にしたるを以て、着々として、歩を進め、文治の美を整へむとす。こゝに於て、周・齊の舊制に依り、州に中正一人を置き、州内の人物品量望第を掌知せしめ、門望高きものを以て、之を領せしむ。品秩なし。次いで

詔して、州縣鄕に皆學を置き、一經以上に明かなるものあれば、咸な名を以て聞せしむ。帝、親ら國子學に詣り、先聖先師に釋奠し、王公の子弟に詔して、皆學に就かしむ。

官制

その三月、はじめ官制を定む。隋制に本づき、大に損益し、斟酌を加へしものなり。太尉・司徒・司空を以て三公となし、次に尙書門下・中書・秘書・殿中・內侍を六省となし、次は御史臺、次は太常・光祿・衛尉・宗正・太僕・太理・鴻臚・司農・太府、凡そ九寺。次は將作監、次は國子學、次は天策上將府、次は左右衛より左右領衛に至るまで、十四衛となし、東宮に太師・太傅・太保の三師及び少師・少傅・少保の三少詹事、及び門下・典書の兩坊、家令・率更僕の三寺、左右衛率・宗衛率より左右內率に至るの十率府を置き、王公には、府佐國官を置き、公主には邑司を置き、並に京職事官となし、州縣鎭戍を外職事官となし、開府儀同三司より、將仕郎に至るまで、二十八階を文散官となし、驃騎大將軍より隨戎副尉に至るまで三十一階を武散官となし、上柱國より武騎尉に至るまで、十二等を勳官となす。その翌月、開皇の舊制に比して、新格五十三條を增し

又はじめて均田租庸調の法を定む。丁中の民、田一頃を給し、篤疾は什の六を減じ、寡妻妾は七を減じ、皆什の二を以て世業となし、八を分となし、每丁歲に租粟二石を入れ、調は土地の宜しき所に隨つて、綾絹絁布、歲役は二旬、役せざればその傭、日に三尺を收む。事あつて役を加ふるもの、旬有五日なれば其調を免じ、三旬なれば、租調ともに免じ、水旱蟲霜災を爲し、什に四以上を損すれば、租を免じ、六以上を損すれば、調を免じ、七以上を損すれば、課役ともに免ず。凡そ民の貲業、九等に分ち、百戸を里となし、五里を鄕となし、四家を鄰となし、四鄰を保となし。城邑に在るものを坊となし、田野のものを村となし、食祿の家は民と利を爭ふなからしめ、工商は雜類、士伍に預るなく、男女始めて生るれば、黃となし、四歲を小となし、十六を中となし、二十を丁となし、六中を老となし、歲に計帳を造り、三年戸籍を造る。

內治の沿革、略ぼ此の如く、この間、外に在りて、特に留意すべきは、突厥の終始なりし。はじめ、煬帝の大業四年、西突厥處羅可汗、一たび入貢したる後、その長叔父射匱に襲はれ、大敗して東走するや、遂に入朝し、待つに殊禮を以てし、曷娑那可汗と號

西突厥の極盛

し、常に帝の巡幸に陪從せり。唐の興るや、曷娑那、大珠を獻ず。因つて歸義王となす。後、北突厥、之を殺さむことを請ひしも、唐王許さず。之に久うして、北突厥の使者を縱つて、遂に之を殺す。而して、西突厥の射匱可汗は、すでに曷娑那可汗を逐ひし後、大に地を拓き、東は金山に至り、西は海に至り、遂に北突厥と敵となり、庭を龜茲の北三彌山に立つ。射匱の卒するや、弟統葉護可汗立つ、勇にして謀あり。北は鐵勒を幷せ、控弦數十萬、烏孫の故地に據り、西は波斯を擊破して、罽賓の州となし、又庭を石國の北、千泉に移す。西域諸國、皆之に臣たり。統葉護、各吐屯を遣して、之を監せしめ、その征賦を督す。西突厥の盛、殆んど極まる。

東突厥の入寇

東突厥の始畢可汗、煬帝を鴈門に圍み、大に之を脅かせしこと、かつて前に述べたり。この時、天下大に亂れ、中國の人、之に奔るもの多く、その族强盛、東は契丹・室韋より、西は吐谷渾に盡き、高昌諸國、皆臣屬し、控弦百餘萬、北狄の盛、未だ之あらず。高く陰山を視、中夏を輕ずるの志あり。薛寶王劉梁の諸家、皆尊號を稱せしも、實は突厥の後援を恃んで然るのみ。唐の興るや、又その兵を借りしことあり。武德二年、西突厥の統葉護可汗、一たび唐に入貢せしことあるも、固より心服せしに服す。東突厥の始畢可汗、死するや、その弟處羅可汗に傳たへ、次いで、又その弟頡利可汗立つ。頡利、父兄の資を受け、兵馬强盛、中國を憑陵するの志あり。帝、中原はじめて定まり、未だ外略に遑あらざるを以て、每に之を優容し、賜與勝へて計るべからず。頡利言辭悖傲、求請厭くなく、屢ば邊に寇す。頡利又、亡兄始畢可汗の子什鉢苾を突利可汗となし、東方に居らしめ、武德七年八月に至り、二可汗、國を擧げて入寇し、道原州よりし、營を連ねて、入寇す。これより先、或は帝に說いて曰く、突厥の屢ば關中に寇する所以のものは、子女玉帛、皆長安に在るを以ての故なり。若し長安を焚かば、胡寇自ら息まむ、と。帝之に從はむと欲す。秦王世民、諫めて曰く、戎狄患を爲す、古しへより、之あり、奈何ぞ、此を以て、四海の羞を貽さむ。願くは、數年の期を假せ、臣、請ふ、頡利の頸を擊つて、之を闕下に致さむ、若し其れ效あらざれば、都を遷すも、未だ晚からず、と。帝曰く、善し、と。太子建成、妃嬪とともに世民を譖して曰く、突厥邊を犯すも、賂を得ば、退かむ。秦王外は禦寇の名に託し、內は兵權を總べ、その簒奪を成さむと欲するのみ、と。帝大に怒り、世民を召して、之を責む。こゝに至りて、有司突厥の內寇を奏す。帝、乃ち容を改めて勞勉し、世民元吉に詔し、兵を將ゐて、豳州を出て、以て之を

御がしむ。關中霖雨、糧運阻絶す。世民之を患ふ。諸將憂色に見はれ、兵を豳州に次す。頡利・突利、萬餘騎を率ゐて、頗る城西に電至し、高に登つて陣し、將士大に駭く。世民數百騎を率ゐ、馳せて虜陣に詣り、之に告げて曰く、我は秦王なり、可汗能く闘へば、獨り出てゝ我と闘へ。若し衆を以て來らば、我直に千百騎を以て相當らむのみ、と。頡利測る能はず、笑つて應ぜず。世民又前み、騎を遣し、突利に告げて曰く、爾往きに我と盟ひ、急あれば相救ふといふ。今乃ち兵を引いて相攻む、何ぞ香火の情なきや、と。頡利之を聞いて、突利が世民と謀あるを疑ふ、乃ち使を遣し、世民に謂つて曰く、王進むを須ゐず、但だ王と盟約を申べむのみ、と。乃ち兵を引いて、稍や卻く。會ま大雨。世民曰く、虜の恃むところのものは、弓矢のみ、今積雨時を彌り、筋膠ともに解く、吾が刀槊犀利、これにして乘ぜずむば將た復た何をか待たむ、と。乃ち師を潛め、雨を冒して進む。突厥大に驚く。頡利戰はむと欲す、突利可かず。乃ち和親を請ふ。世民之を許す。突利因つて自ら世民に托し、世民亦た恩意を以て之を撫し、ともに盟つて去る。帝、寇盜ある毎に、輒ち世民に命じて之を討たしむ。事平ぐの後、猜嫌益す甚し。その翌八年七月、頡利又邊に寇す。右衛大將軍張瑾、與に太谷に戰ひ、全軍皆沒し、

玄武門の變

瑾、纔に身を以て免る。靈州の都督任城王道宗、虜兵を擊破す。頡利使を遣し、和を請うて退く。

はじめ、唐主の晉陽に起るや、皆秦王世民の謀なり。帝、以て儲嗣となさむと欲す、世民固辭して止む。然れども、その功尤も大にして、前代の官爵、皆當らざるを以て、時に天策上將の一館を置いて、之に任ず。太子建成、酒色游畋を好み、齊王元吉、過失多し。こゝに於て、二人謀を協せ、世民を傾けむと欲し、意を曲げて諸妃嬪に諂事す。世民、ひとり之を事とせず。是に由つて、左右皆建成・元吉を譽めて、世民を短す。世民かつて帝に從つて、元吉の第に臨む、元吉甲を伏せて之を刺さむと欲す。建成之を止む。元吉慍つて曰く、兄の爲に計るのみ、我に於て何かあらむ、と。建成擅に驍勇二千餘人を募つて、東宮衛士となし、幽州の突騎三百を發して、宮東諸坊に置く。慶州都督楊文幹、かつて東宮に宿衛し、建成之と親厚なり、因つて私に壯士を募つて、長安に送らしむ。武德七年六月、帝の仁智宮に幸するや、建成その志を逞うせむと欲す、而して計泄れ、謝して止む。帝、文幹を召す。文幹遂に兵を擧げて叛す。帝、世民をし

て討つて、之を平げしむ。世民の軍に在るや、元吉妃嬪と更も建成の爲に訴へ、因つて、太子たること、故の如し。世民、すでに建成・元吉と隙あり。洛陽は形勝の地、一朝變あらむを恐れ、出て、之を保たむと欲し。乃ち行臺尚書溫大雅を以て、洛陽を鎮せしむ。建成、夜、世民を召し、酒を飲ましして、之を酖す。世民、暴かに心痛、血數升を吐く。帝、世民をして、洛陽に居り、陝以東に王とし、仍つて天子の旌旗を建つること、漢時梁の孝王の故事の如くせしむ。世民泣いて辭するも許さず。將に行かむとす。建成・元吉、之を沮む。元吉密かに世民を殺さむを請ふ。秦府の僚佐、皆惶懼して、出づるところを知らず。行臺郎中房玄齡、長孫無忌に謂つて曰く、今嫌隙すでに成る、一旦禍機、竊に發せむか、豈に唯だ府朝血に塗るのみならむや。乃ち實に社稷の憂なり、王に勸めて、周公の事を行ひ、以て家國を安ずるに若くはなし。存亡の機、正に今日に在り、と。無忌以て世民に告げ、杜如晦を召して、之を謀る、亦た世民に勸むる、玄齡の言の如し。無忌、その舅高士廉・將軍侯君集、及び尉遲敬德等と、日夜世民に勸めて、計を決せしむ。世民猶豫す。會ま突厥入寇す。建成・元吉を薦め、元吉因つて尉遲敬德と俱にし、秦府の精卒を簡し、元吉を餞するに托し、昆明池に於て、世民を拉殺せむとす。

人あり、之を告ぐ。世民嘆じて曰く、骨肉相殘ふ、古今の大惡、吾誠に禍の朝夕に在るを知る。その發するを俟ち、然る後、義を以て、之を討つも、亦た可ならずや、と。敬德・無忌、府僚衆、皆之に勸む。世民意乃ち決す。武德九年六月、太白再び天を經。傅奕密に奏す、太白秦の分に見はる、秦主當に天下を有すべし、と。帝、その狀を以て世民に授く。こゝに於て、世民密に建成・元吉、後宮を淫亂するを奏し、且つ曰く、兄弟專ら臣を殺さむと欲す、世充・建德の爲に讎を報ずるに似たり。臣今永く君親に違ひ、又諸賊を地下に見るを耻づ、と。帝、驚き報じて曰く、明、當に鞫問すべし、汝宜しく早く參すべし、と。明日、世民、長孫無忌等を率ゐて、兵を玄武門に伏す。建成・元吉、とともに入る。臨湖殿に至り、變あるを覺り、將に還らむとす。世民追うて、建成を射て之を殺し、尉遲敬德、元吉を射殺す。こゝに於て、東宮齊府の將帥、大に至りて、玄武門を攻む。敬德、二人の首を以て、之に示す、乃ち散じて去る。時に帝方に舟を海池に泛ぶ。世民、敬德をして、入つて狀を奏せしむ。蕭瑀・陳叔達曰く、建成・元吉、本と義謀に豫らず、又天下に功なく、秦王の功高く望重きを疾み、とともに姦謀をなす。今秦王すでに討つて、之を誅す、陛下若し處らしむるに元良を以てし、之に國務を安せば、復た事なからむ、と。

帝曰く、これ吾の夙心なり、と。帝乃ち世民を召して之を撫す。世民跪いて帝の乳を吮ひ、號慟之に久うす。建成元吉の諸子、皆坐して誅せらる。遂に世民を立てゝ皇太子となし、軍國庶事、悉く太子に委して處決し、然る後に奏聞す。太子命じて、禁苑の鷹犬を縱ち、四方の貢獻を罷め、百官に聽いて、各治道を陳せしむ。政令簡肅、中外、大に悅ぶ。はじめ、洗馬魏徵、常に建成に勸め、早く秦王を除かしむ。建成の敗るに及び、太子、徵を召して、之に謂つて曰く、汝何ぞ我が兄弟を離間する、と。徵、舉止自若、對へて曰く、先太子、早く徵の言に從へば、必ず今日の禍なからむ、と。太子容を改めて、之に禮し、引いて詹事主簿となし、又太子の臣王珪・韋挺を嶲州より召し還し、皆以て諫議大夫となす。

玄武門の變は、慘禍なり。然れども、秦王の心意、大に諒とすべきものあり。之を稱して、群下の過るところとなり、以て自ら誤りしものとなすに至りては、その論、固より酷なり。若し建成をして、位を嗣がしめば、唐室久しからずして亡び、當に隋の末路と轍を同うすべく、太宗立つて唐家三百年の基を延ばす、これ古を評するもの、亟ば太宗の爲に諱む所以なり。

太宗の少時

この月、帝、自ら太上皇と稱し、詔して、位を太子に傳ふ。太子固辭すれども許さず。八月遂に即位す、是を太宗文武皇帝となす。

第九十五章　太宗の內治

太宗は高祖の次子、幼なるの日、書生あり之を見て曰く、龍鳳の姿、天日の表あり。その年冠するに幾くして、必ず能く世を濟ひ民を安ぜむ、と。書生去る。高祖人をして、之を追はしむれども見えず。乃ち其語を採つて、名となす。年十八にして、義兵を擧ぐ。李密唐に降り、初めて高祖に見えて、色尙ほ傲れり。秦王を見るに及びて、敢て仰ぎ視ず。退いて嘆じて曰く、眞の英主なり、と。その天策上將となるや、位三公の上に在り。府を開き、屬を置き、又館を開いて文學の士を延く。杜如晦・房玄齡・虞世南・褚亮・姚志廉・李玄道・蔡允恭・薛元敬・顏相時・蘇勗・于志寧・蘇世長・薛收・李守素・陸德明・孔穎達・蓋文達・許敬宗を文學館學士となし、分つて、三番となし、暇日には、輒ち館中に至つて、文籍を討論し、或は夜分に至り、閻立本をして、像を圖せしめ、褚亮をして、贊を爲らしめ、十八學士と號す。士大夫、その選に預るを得たるもの、時人之を登瀛洲と

いふ。時に、府僚多く外に補せらる。如晦も亦出づ。玄齡曰く、餘人は惜むに足らず、如晦は、王佐の才なり、大王四方を經略せむと欲せば、如晦に非ざれば、不可なり、と。王即ち奏して之を留め、帷幄に參謀せしむ。剖決流るゝが如し。玄齡入つて事を奏する毎に、高祖曰く、玄齡吾が兒の爲に、事を謀る、千里を隔つと雖も、面を對して、語るが如し、と。秦王の功、天下を蓋ひ、身幾んど危かりしも、幸に玄齡、如晦に賴つて、策を決し、こゝに至りて、位に即き、首に宮女三千餘人を放つ。

突厥の入寇

これより先、梁師都の所部、離叛し、國寖や衰弱す。乃ち突厥に朝し、勸めて入寇せしむ。こゝに於て、頡利・突利の二可汗、兵十餘萬騎を合して、涇州に寇す。頡利進んで渭水便橋の北に至り、その腹心執失思力を遣して、入つて見え、以て虛實を觀せしむ。執失思力、盛に二可汗を稱し、兵百萬を將ゐて、今至れりといふ。帝、之を讓めて曰く、吾、汝の可汗と面のあたり、和親を結び、贈遺算なし、今汝の可汗、盟に背いて入寇し、全く大恩を忘れ、自ら强盛を誇る、我今先づ汝を斬らむ、と。執失思力懼る。乃ち之を囚ふ。帝、高士廉・房玄齡等六騎と、徑に渭水の上に詣り、頡利と水を隔てゝ語り、責むるに約に負きしを以てす。突厥大に驚き、皆馬を下つて、羅拜す。俄にして、諸軍繼いて至り、旌甲野を蔽ふ。頡利、執失思力さきに往つて未だ返らず、而して、帝輕しく出て、軍容甚だ盛なるを見て、懼るゝ色あり。帝、諸軍を麾き、卻いて、陣を布かしめ、ひとり頡利と語る。この日、頡利來つて和を請ふ。詔して之を許し、白馬を斬り、ともに便橋の上に盟ふ。突厥兵を引いて還る。

太宗政治の精神

尋いで、勳臣の爵邑を定め、又弘文館を置き、經史子集、四部の書、二十餘萬卷を聚め、天下文學の士を選び、虞世南等、本官を以て、學士を兼ね、朝を聽くの隙、引いて內殿に入り、前言往行を講論し、政事を商搉し、或は夜分に至つて罷む。上書して、佞臣を去らむことを請ふものあり。曰く、願くは陽に怒り、以て之を試みよ。理を執つて屈せざるものは直臣なり、威を畏れて旨に順ふものは佞臣なり、と。帝曰く、吾自ら詐を爲せば、何を以て、臣下の直を責めむや。朕方に至誠を以て天下を治めむ、と。或は法を重くして、盜を禁ぜむことを請ふものあり。帝曰く、當に奢を去り、費を省き、徭を輕くし、賦を薄くし、廉吏を選用すべし。民の衣食をして餘あらしめば、自ら盜を爲さず、安んぞ、重法を用ひむや、と。これより、數年の後、路遺ちたるを拾はず、商旅

野宿す。帝かつて曰く、君は國に依り、國は民に依る、民を刻し、以て君に奉ずれば、猶ほ肉を割き以て腹に充つるが如く、腹飽けども、身斃れむ。君富めども、國亡びむ、と。又かつて侍臣に謂つて曰く、聞く、西域の賈胡、美珠を得れば、身を剖いて之を藏す、と。諸ありや。曰く、之あり、曰く、吏の賕を受けて、法に抵ると、帝王の奢欲に狗へて國を亡ぼすと、何を以て、この胡の笑ふべきに異ならむや、と。魏徵曰く、むかし、魯の哀公、孔子に謂つて曰く、人好く忘るものあり、宅を徙して其妻を忘る。孔子曰く、又甚しきものあり、梁紂は乃ち其身を忘る、と。亦た猶ほ是の如きなり、と。張蘊古、大寶箴を獻ず。曰く王あり、一人を以て天下を治め、天下を以て一人に奉せず、と。又曰く、九重を内に壯にするも、居るところは膝を容るゝに過ぎず。彼の昏にして知らざるは、其臺を瑤にして、其室を璃にし、八珍を前に羅ぬれども、食ふところは、口に適ふに過ぎず。惟れ狂にして、念ふ罔きは、其糟を丘にして、其酒を池にす、と。又曰く、沒沒として聞きこと勿れ、察察として明なること勿れ。晃旒目を蔽ふと雖も、而かも、無形に視よ、黈纊耳を塞ぐと雖も、而かも、無聲に聽け、と。帝、その言を嘉みす。

十道の區劃

はじめ、上皇宗室を疆うせむと欲し、三從昆弟より以上、皆王となす。こゝに至り、帝、群臣に問ひ、且つ曰く、朕の天子たるは、百姓を養ふ所以なり。其れ百姓を勞し、以て己の宗族を養ふあらむや、と。因つて、宗室郡王を降して、皆縣公となし、惟だ功あるもの數人は降さず。次いで、使を遣して、兵を點じ、その翌貞觀元年、吏部尚書長孫無忌に命じ、法官と更る議して、律令を定め、絞刑五十條を寛にして、右趾を斷つとなす。帝曰く、肉刑廢するすでに久し、宜しく以て之を易ゆるあるべし、と。こゝに於て、有司請ひ治めて、爲めに徒流を加へ、流三千里、居徒三年、之に從ふ。

隋末の豪傑、地に據つて自ら相雄長せしが、唐の興るや、相帥ゐて來歸す。上皇、州縣を制置し、以て之を寵祿せり。帝、民少く吏多きを以て、大に併省を加へ、山川の形便に因り、分つて十道となす。

（一）關内……雍華同商、岐邠隴涇原寧慶鄜坊丹延靈會盛夏綏銀豐勝等の州を領す

（二）河南……洛汝陝虢鄭滑許潁陳豫汴宋亳徐泗豪鄆齊曹濮淄青萊棣兗海沂密等の州を領す

(三)河東……蒲晋絳汾隰幷南汾算沁嵐石忻代朔蔚澤潞等の州を領す
(四)河北……懷魏博相衛貝邢洺恒冀深趙滄德易定幽瀛燕北燕檀營平等の州を領す
(五)山南……荆峽歸夔澧朗忠涪曹襄唐隨鄧均房郢復金梁洋利鳳懷成扶文隼壁巴蓬通開隆果渠等の州を領す
(六)隴右……秦渭河鄯蘭武洮岷廓疊岩涼瓜沙甘肅等の州を領す
(七)淮南……揚楚滁和壽廬舒光蘄黃安申等の州を領す
(八)江南……潤常蘇湖杭睦越衢婺括台福建泉宣歙池洪洪土鄂岳饒信虔吉袁撫潭衡永道郴邵黔辰夷思南等の州を領す
(九)劍南……益嘉眉邛簡資嶲雅南會翼維松姚戎梓遂綿始合龍普渝陵榮瀘等の州を領す
(十)嶺南……廣韶循潮康瀧端新封潘春羅南石高東合崖振邕南方南簡淳欽南尹象藤桂梧賀連南昆靜樂南恭融容牢繡南抉越南義交陸峰愛驩等の州を領す

諸殿の改革

隋の世、選人十一月に集り、春に至つて罷み、人その期促るを患ふ。こゝに於て、吏部侍郎劉林甫、奏して、四時選を聽るし、闕に隨つて、注擬す。唐初士大夫、亂離の後を以て、仕進を樂まず、官員充たず。州府多く、赤牒を以て官を補ふ。こゝに至りて、皆勒して、省に赴き選集するもの七千餘人。林甫材に隨つて銓叙し、各その所を得、時人之を稱す。帝、房玄齡に謂つて曰く、官は人を得るに在り、員の多きに在らず、と。遂に併せて、之を省き、文武を留むるすべて六百四十三員。はじめ、上皇、祖孝孫に命じて、雅樂を定めしむ。孝孫以爲へらく、梁陳の音は吳楚多く、周齊の音は胡夷多し、と。こゝに於て、古聲を考へ、唐の雅樂を作る、凡そ八十四調、三十一曲、十二和。成つて、之を奏す。貞觀二年、天雨少し。中書舍人李百藥言ふ、往年宮人を出すと雖も、無用のもの尙ほ多し、陰氣鬱積、亦た旱を致すに足れり、と。帝命じて、之を問出する、前後三千餘人。又詔して、縣令に堪へたるものを擧げしめ、奴の主を告ぐるものは斬り、百司に敕し詔敕未だ便ならざる、皆執奏せしめ、尋いで、常服の等差を定め、三品以上の服は紫、四品五品の服は緋、六品七品の服は綠、八品の服は青、婦人は其夫の服に從ふ。帝、明堂鍼灸書を讀む。その中、云ふあり、人五臟の系、成な背に附く、と。因つて背を鞭

つの刑を除く、その後、又死刑に決せしもの、皆覆奏せしめ、決するの日は、樂を徹し、膳を停む。帝親ら繫囚を錄し、死に應ずるものを見て、之を憫み、縱つて家に歸らしめ、期するに、來秋來つて死に就くを以てす。凡そ三百九十人。仍つて敕して天下の死囚を縱ち、使を遣し、期に至つて來り、京師に詣らしむ。貞觀七年に至り、皆期の如く、自ら朝堂に詣る、帝皆之を赦す。

貞觀十年、統軍を更めて、折衝都府となし、別將を果毅都尉となす。凡そ十道、府を置くこと、六百三十四、而して、關內は二百六十一、皆諸衛及び東宮六率に隸す。凡そ上府の兵は、千二百人、中府は千人、下府は八百人、三百人を團となし、團に校尉あり、五十人を隊となし、隊に正あり、十人を火となし、火に長あり、每人兵甲糧裝、各數あり、之を庫に輸し、征行には之を給す、二十にして兵となり、六十にして免じ、能く騎射するものを越騎となし、その餘を步兵となし、每歲季冬、折衝都府、帥ゐて以て戰を敎へ、馬を給すべきものは、官より直を與へ、宿衛に當るものは、上兵の部に番し、遠近を以て番に給し、遠は疏、近は數、皆一月にして更る。

兵制

十一年、釋奠を制し、孔子を以て先聖となす。房玄齡等、さきに詔を受けて律令を定む。凡そ律を定む五百條、刑名を立つる二十等、隋律に比して、大辟九十二條を減じ、流入徒のもの七十一條、頗を削り、蠹を去り、重を變じて、輕となすもの、勝へて記すべからず。又令一千五百九十條を定め、武德以來の敕格を刪り、七百條を定留す。こゝに至りて、之を頒行す。この歲、又詔して、新禮を行ふ、房玄齡、魏徵の定むるところにして、凡そ百三十八篇。その秋七月大雨、穀洛溢れて、洛陽宮に入り、官寺民居を壞し、溺死するもの、六千餘人。詔して、水壞つところの宮、少しく修繕を加へ、總に居るべからしめ、明德宮、玄圃院を廢し、その材を以て、水に遭ひしものに給し、百官をして、封事を上り、過失を極言せしむ。

法制

魏徵の上言

帝、さきに吏部尙書高士廉等に命じ、徧ねく天下の譜牒を索め、諸を史籍に質し、その眞僞を考へ、分つて九等となし、皇族を首となし、外戚之に次ぎ、崔盧李鄭の諸族、又之に次ぐ。凡そ三百九十三姓、千六百五十一家。十二年正月、天下に頒つ。又詔して內職闕あるとき、良家才行あるものを選んで充て、又刺史を襲封するを停む。十三年五月、旱す。五品以上に詔して、事を言はしむ。魏徵上疏して言ふ、陛下志業、貞觀の初に比し、漸く終を克くせざるもの十あり、謹んで條陳を用ひ、萬分の一を裨け

む、とぞその大略、一に言ふ、使を遣して徵直す。二に言ふ、奢肆人力を用ひむを思ふ。三に言ふ、欲を縱にし、人を勞す。四に言ふ、小人を昵し、君子を疎んず。五に言ふ、異物を貴び、無益を作す。六に言ふ、輕く賢に與へず、人を棄て易し。七に言ふ、田獵馳騁。八に言ふ、外官事を奏する、顏色接せず。九に言ふ、傲を長じ、欲を縱にし、事なくして兵を興す。十に言ふ、關中の民、傜役勞弊す、と。疏奏す、帝深く奬嘆し、報じて云ふ、すでに之を屏障に列し、朝夕瞻仰す、と。仍つて錄して史官に附す。

藝術の奬勵

十四年、帝、國子監に詣り、親ら釋奠す。この時、大に天下の名儒を徵して學官となし、數ば國子監に幸し、之を講論せしめ、學生能く一經以上に明かなるもの、皆官に補ふを得せしめ、學舍を增築する千二百間、學生を增して三千三百六十員に滿たしめ、屯營飛騎より、亦た博士を給して、經を授け、能く經に通ずるものあれば、貢舉を得るを許す。こゝに於て、四方の學者、京師に雲集し、高麗・百濟・新羅・高昌・吐蕃の諸酋長に至るまで、亦た子弟を遣し、請うて國學に入れしめ、講筵に昇るもの八千餘人に至る。帝、師說多門、章句繁雜なるを以て、孔穎達に命じ、諸儒と五經の疏を定めしめ、之を正義といふ。

曆法の更定

時に戊寅曆、癸亥を以て十一月朔となす。李淳風、表して稱す、古曆分日、子午に起る、今歲甲子朔、冬至にして、傅仁均減、餘稍や多く、子初を朔となし、遂に三刻を差へ、用つて天正に乖ふ。請ふ、更に考定を加へむ、と。之に從ふ。帝、近世陰陽雜書、訛謬尤も多きを以て、太常博士呂才に命じて、刊定し、之を上らしむ。才皆之を爲し、叙質するに經史を以てす。

太宗治世中の名臣

太宗の內治、略ぼ此の如く、その間、又大に純臣良相を任用し、はじめに蕭瑀・長孫無忌を左右僕射となし、次いで、房玄齡・杜如晦を以て之に代へ、王珪侍中となり、魏徵・秘書監に守たり。ともに、朝政に參預す。玄齡、事を謀るや、必ず曰く、如晦に非ざれば、決する能はず、と。如晦至るに及び、卒に玄齡の策を用ふ。蓋し玄齡善く謀り、如晦善く斷ず。二人心を同うして、國に徇ふ。故に唐世賢相を稱する、房杜を推す。徵かつて帝に告げて曰く、願くは、臣をして、良臣たらしめよ。臣をして忠臣たらしむる勿れ。帝曰く、忠・良異なれりや。徵曰く、稷・契・皐陶、君臣心を協せ、ともに尊榮を享く、謂ゆる良臣なり。龍逢・比干、面折廷爭、身誅せられ、國亡ぶ、謂ゆる忠臣なり、と。帝悅ぶ。貞觀

十七年、鄭公魏徵薨ず。帝曰く、銅を以て鏡となせば、衣冠を正うすべく、古を以て鏡となせば、興替を見るべく、人を以て鏡となせば、得失を見るべし。徵沒して、朕一鏡を失ふと。徵を葬るや、帝自ら碑を製して石に書す。之を外にして、李世勣・李靖・侯君集等の宿將あり。兵を四境に出して、國威を宣揚する、極めて多し。こゝに於て、魏徵薨ずるの年、命じて、功臣を凌煙閣に圖畫せしむ。その人は、長孫無忌・趙郡王孝恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・高士廉・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・殷志元・劉弘基・屈突通・殷開山・柴紹・長孫順德・張亮・侯君集・張公謹・程知節・虞世南・劉政會・唐儉・李世勣・秦叔寶にして、麟閣雲臺と相並んで、後世長しへに艶稱するところなり。

貞觀の治、二十餘年、內治外交共に成功し、房杜の二人、稷契の如く、太宗をして、秦漢以來唯一の聖主となし、功業赫灼として、靑史を耀し、東亞の諸國、その治術に鑑み、一部の貞觀政要、我が邦に入り、帝者の必讀書と定められしもの、まことに偉なりといふべし。然れども、唐の制度は、秦漢魏晉以來、漸を以て發達し、殊に隋制を損益せしものにして、必ずしも、その創制に非ず。凡そ制度法令は、如何に整美を極むと雖も、實は運用の如何に在り。予輩は、之を以て、太宗とその臣下と、雲龍の會をなせし盛世を回憶すると同時に、更に大なるものあるを忘るべからず。他なし、太宗の業は、疆外經略に於て、愈よ觀るべく、まことに、煬帝覆亡の餘を承けて、その勢を一變し、華夷の別を正うし、之を前漢武帝・後漢章帝の當時に比して、はるかに、勝るものあり、漢族の勢力、正に其極に達したること、是れなり。予輩が、漢唐間を呼んで、漢族繁榮時代となせしもの、即ち此故にして、次に之に就いて、やゝ詳細に叙述を續かざるべからず。

第九十六章　太宗の疆外經略と漢族の極盛

はじめ、隋の煬帝、大を好み、林邑・琉求を討ち、我が日本と通じ、西域を引見し、その夙志、やゝ滿つるを得たりしも、高句麗を討つて、大に敗られ、突厥との交渉、常に窘困を免れざりしは、翻つて、その衰滅を促せしものなり。林邑、かつて、煬帝の爲に分たれて三郡となり、中原の喪亂に及びて、復た國となりしが、武德六年、はじめて入貢せり。その翌、帝、隋末の戰士、多く高麗に沒せしを以て、その王元の子建武に書を賜うて、悉く、遣還せしめ、乃ち高麗人の中國に在るものを求めて、之を歸す。建武、詔

を奉じて遣還する、前後萬數、又歷を頒たむことを請ふ、乃ち使冊を遣し之を封じて、遼東王となす。太宗即位、貞觀元年十月、嶺南の酋長馮盎、子を遣して入朝す。はじめ、盎、諸酋長と迭に相攻擊す。諸州皆盎の反を奏す。帝、兵を發して之を討たむと欲す。魏徵諫めて曰く、嶺南は瘴癘險遠、以て大兵を宿すべからず。且つ告ぐるものすでに數年、而かも盎の兵、未だ嘗て境を出でず。これ反せざるや明かなり。若し信臣を遣し、示すに至誠を以てせば、兵を煩さずして服すべし。帝乃ち使を遣して、之に諭す。盎、その子智戴をして、使者に隨つて入朝せしむ。帝曰く、魏徵の一言、十萬の師に勝れり、賞せざるべからず、と。乃ち絹五百疋を賜ふ。後、盎入朝す。諸洞獠反す。盎に詔して、之を討平せしむ。帝、その功を美し、前後賞賜、勝へて數ふべからず。之に次いで、遠方諸國、來つて朝貢するもの、甚だ衆く、服裝詭異、三年閏月、黔州の西、東謝蠻、酋謝元深の來朝するや、中書侍郎顏師古、請うて王會圖を作り、以て後に示さむとす。之に從ふ。この歲、戶部の表、中國人、塞外より歸り、及び四夷前後附降するもの、男女凡そ一百二十餘萬口といふ。その後、四夷の君長、闕に詣り、帝に請うて、天可汗となす。帝曰く、我は大唐の天子たり、又下可汗の事を行ふや、と。群臣及び四夷、皆萬歲と稱す。この後、璽書を以て、西北君長に賜ふや、皆天可汗と稱す。

突厥の內亂

はじめ、突厥すでに強く、敕勒諸部分散し、薛延陀・回紇・都播・骨利幹・多濫葛・同羅・僕固・拔野古・思結・渾・斛薛・奚結・阿跌・契苾・白霫等の十五部あり。皆磧北に居る。頡利政亂れ、薛延陀・回紇等、之に叛く。頡利制する能はず。會ま大雪、羊馬多く死し、民大に饑ゆ。鴻臚卿鄭元璹、使して還り、群臣とともに間に乘じて之を討つべきを言ふ。帝曰く、盟に背くは不信なり、災を利するは不仁なり、危に乘ずるは不武なり。たとひ、その種族盡く叛き、六畜餘なきも、朕終に擊たず。必ず罪あるを待つて、然る後に、之を討たむ、と。すでにして、頡利可汗、突利可汗を遣して、薛延陀・回紇等を討たしめしが敗れて還りしに因り、拘へて、之を撻つ。突利これに由つて怨み、表して、入朝を請ふ。帝容易に許さず。この時、右衛大將軍柴紹等を遣りて、梁師都を擊つ。その下、之を殺して降り、其地を以て、夏州となす。師都兵を起してより、滅に至るまで、凡そ十二年。すでにして、突厥の內亂、愈よ甚しく、その北邊、多く頡利に叛いて、薛延陀に歸し、ともに其俟斤夷男を推して可汗となす。夷男敢て當らず、帝、方に頡利を圖る、乃ち使を

遣し、間道より行き、夷男を拜冊して、眞珠毘伽可汗となし、賜ふに鼓纛を以てす。夷男、牙を大漠の鬱督軍山下（哈爾哈地考是山）に建て回紇・拔野古・阿跌・同羅・僕骨・白霫の諸部皆屬す。眞珠可汗、其弟を遣して、入貢せしむ。頡利可汗、大に懼れ、はじめて使を遣して、臣と稱し、公主を尙せむを請ふ。帝、さきに頡利がすでに和親を請ひ、復た梁師都を援けしを以て、信ずべからずとなし、李靖を以て、定襄道行軍總管となし、張公謹を以て副となし、李世勣・柴紹・薛萬徹を以て、諸道總管となし、衆合せて十餘萬、皆靖の節度を受け、道を分ち、出て、突厥を擊つ。その年十二月、突利可汗、入朝す。帝曰く、さきに、太上皇、百姓の故を以て、臣を突厥に稱す。朕、かつて痛心す。今單于稽顙、庶幾くは前恥を雪ぐべし。昔人謂ふ、戎を禦ぐに上策なし、朕今中國を治安して、四夷自ら服す、豈に上策に非ずや、と。

頡利可汗の敗

すでにして、李靖、驍騎三千を帥ゐて、馬邑より進み、夜、定襄を襲うて之を破る。頡利、大に驚き、牙を磧石に徙す。靖、復た諜を遣し、その心腹を離れしむ。頡利の親むところ、康蘇密、隋の康后及び楊政道を以て來り降る。李勣、雲中より出て、白道に戰ひ、又之を破る。頡利すでに破れて、鐵山に竄し、衆なほ十餘萬あり。執失思力を遣して、入つて見え、罪を謝す。帝、鴻臚卿唐儉等を遣して、之を慰撫し、又李靖に詔し、兵を將ゐて、之を迎へしむ。頡利、外は卑辭をなし、內實は猶豫し、磧北に走らむことを謀る。靖、兵を引いて、世勣と白道に會し、頡利を襲はむとし、遂に兵を勒して、夜發し、世勣之に繼ぐ、頡利、儉の來るを見て、大に喜ぶ。靖の前鋒、牙帳を去ること七里、頡利はじめて之を知り、千里の馬に乘じて、先づ走る。その衆、遂に潰ゆ。唐儉、身を脫して、靖を得たり。靖、義成公主を殺し、斬首萬餘級、男女十餘萬を俘にす。世勣、磧口に軍す。會長皆衆を帥ゐて來り降り、仍つて五萬餘口を虜にして還る。

突厥餘衆の分布

頡利、すでに敗走し、往いて、故の啓民の弟沙鉢羅設（官名）蘇尼失の部落に依る。任城王道宗、兵を引いて、之に逼り、蘇尼失をして、頡利を執へしむ。行軍副總管張寶相、之を取り、以て獻ず。蘇尼失、衆を擧げて來り降り、南面遂に空し。帝、樓に上り、俘を受けて、之を太僕に館す。上皇、之を聞いて嘆じて曰く、漢の高祖、白登に困んで報ゆる能はず。今我が子、能く突厥を滅す、附託人を得たり。復た、何をか憂へむや、と。突厥すでに亡び、その部落、或は、北、薛延陀に附き、或は、西、西域に奔る。その唐に降るもの、尙ほ千萬口。群臣に詔して、區處の宜を議す。溫彥博、漢の建武の故事に準じて、塞下に

置き、その土俗に順ひ、以て空虛の地を實にし、中國の杆蔽たらしめむを請ふ。魏徵以爲へらく、戎狄弱ければ、服を請ひ、彊ければ叛亂す。もし之を中國に留むれば、數年の後、蕃滋倍す多く、必ず腹心の疾をなさむ。西晉の禍、前事の明鑒なり、宜しく之を縱つて、故土に還らしむべし、便なり、と。帝遂に彥博の策を用ひ、突厥の降衆を還らしめ、東、幽州より、西、靈州に至るまで、突利の故地を分つて、四州となし、又頡利の故地を分つて、六州となし、左に定襄を置き、右に雲中二都督府を置き、以て其衆を統べしめ、突利を以て順利都督となし、頡利を右衛大將軍となし、その餘、官を拜する、差あり。因つて久しく長安に居るもの、萬家に近し。薛延陀の眞珠可汗、その部落を帥ゐ、庭を都尉犍山北、獨羅水南に建て、二子移酌・頡利苾を南北部主となし、代つて其地を占む。

伊吾

西突厥の種落、散じて、伊吾に在り。詔して、李大亮を以て、安撫大使となし、糧を積口に貯へ、以て之に賑はす。大亮言ふ、遠を懷けむと欲するものは、必ず先づ近を安んず。中國は本根の如く、四夷は枝葉たり。中國を疲らし、以て四夷を奉ず、猶ほ本根を拔き、以て枝葉を益すごときなり。今西突厥を招致すれば、但だ勞費あるのみ、未だ益あるを見ず、之を罷むるに若かず。その或は自ら君長を立て、內屬を求むるものは、羈縻之を受け、塞外に居り、中國の藩蔽たらしめよ、と。帝之に從ふ。未だ幾ならずして、伊吾來り降る。其地を以て、西伊州を置く。

西突厥の分崩

これより先、西突厥の統葉護可汗の諸父莫賀咄、統葉護を殺し、自立して、屈利俟毗可汗となる。國人附かず。統葉護の子咥力特勒を立てゝ、乙毗鉢羅肆葉護可汗となす。すでにして、俟毗、莫賀設の子泥孰の殺すところとなり、肆葉護は國人の攻むるところとなり、走つて死し、泥孰立つて咄陸可汗となり、咄陸死し弟同娥設立つて沙鉢羅咥利失可汗となる。咥利失可汗、その國を分つて、十部となす、每部酋長、各一箭を賜ひ、之を十箭といひ、又左右廂を分ち、左廂を五咄陸と號し、五大啜を置き右廂を五弩失畢置と號し、五大俟斤を置き、通じて、これを十姓といふ。こゝに至り、咥利失、衆心を失ひ、その臣統吐屯の逐ふところとなり、焉耆に走り、尋いで復たその故地の西部を得、遂に欲谷設を立てゝ乙毗咄陸可汗となし、その地を中分し、伊列水（伊犁河）を以て、界となし、水より以西は乙毗咄陸に屬し、以東は咥利士に屬す。すでにして、咥利失の臣、侯利發、乙毗咄陸と謀を通じて、亂をなし、咥利失窮蹙して

死す。その弟の子沙鉢羅護可汗立つ、之を南庭といひ、乙毗咄陸を北庭となす。

西突厥の乙毗咄陸可汗、すでに沙鉢羅葉護の衆を併せ、自ら彊大を恃み、兵を遣して、伊州に寇す。安西の都護郭孝恪、擊つて之を敗る。未だ幾ならずして、乙毗咄陸、その下の逐ふところとなり、遂に走つて白水胡城を俟つ。こゝに於て、所部闕に詣り、更めて可汗を立てむを請ふ。帝、使を遣し、莫賀咄の子を立てゝ乙毗射匱可汗となす。乙毗咄陸、遂に吐火羅に走る。その地は、葱嶺の西、烏滸河の南にして、古しへの大夏なり、時に貞觀六年なり。

吐谷渾

はじめ貞觀五年、党項内屬するもの、前後三十萬口。党項は吐谷渾に在る西藏族の一種なり。而して、吐谷渾は、可汗伏允、老耄し、その臣天柱王、事を用ひ、數ば、塞に入つて侵盜す。八年詔して、之を討つ。李靖年老ひ、而かも、自ら往かむことを請ふ。因つて、靖を以て、西海道行軍大總管節度諸軍となす。任城王道宗、先づ吐谷渾の兵を擊破す。可汗伏允、悉く野草を燒き、輕兵走つて磧に入る。諸將以爲へらく、馬に草なく、以て深く入るべからず、と。侯君集、ひとり請うて兵を進めむとす。李靖之に從ひ、その軍を中分して兩道となし、自ら薛萬均・李大亮と北道よりし、君集は道宗と南道に由る。靖等、吐谷渾を與牛心堆（西寧道外湟河西）に走らし、又之を赤水の源（青海の南）に敗る。君集・道宗、兵を引いて、無人の境を行くこと二千餘里、盛夏霜を降し、人は冰を齕み、馬は雪を噉ひ、追うて、伏允に烏海（青海漢哭岩）に及び、ともに戰つて大に之を敗る。靖、諸軍を督して、積石河源を經、その西境を窮め、襲うて、伏允の牙帳を破り、斬首數千級、雜畜三十餘萬を得たり。伏允の子順、天柱王を斬つて、來り降る。伏允身を脫して走り、衆散じて、左右の殺すところとなる。國人順を立てゝ可汗となす、詔して、西平郡王となす。順未だ其衆を服する能はず、因つて李大亮に命じ、精兵數千を以て、その聲援をなさしむ。而して、順、竟に國人の殺すところとなる。帝、復た侯君集をして、兵を將ゐて、その子諾曷鉢を立てゝ可汗となさむ。

高昌

西域諸國、强弱を稱せしもの、他に高昌ありぞの地、天山の東に國し、今の吐魯蕃より、烏魯木齊に跨り、南北朝の時より獨立して、强國となり、後に其王麴伯雅は、煬帝の東征に從ひ、その子文泰、東突厥の亡びしを見て、貞觀四年、一たび來朝せしが、

すでにして、多く西域の朝貢を遏絶し、又中國人を拘留す。詔して入朝せしむるも、又至らず。西突厥とともに焉耆を破る。焉耆、之を訴ふ。帝、使を遣して、狀を問はしむ。文泰答へて禮なし。帝、怒り、兵を發して、之を擊たむと欲す。薛延陀の可汗、使を遣し、請うて鄉導たらむとす。帝なほ文泰の過を悔ゐむことを冀ひ、復た璽書を下し、以て禍福を示し、之を徵して入朝せしむ。文泰、竟に病と稱して至らず。貞觀十三年、侯君集及び薛萬均を遣し、兵に將として、之を擊たしむ。

高昌王麴文泰、唐兵の起るを聞き、その國人に謂つて曰く、唐、我を去ること七千里、而かも、沙磧二千里に居り、地に水草なく、寒風は刀の如く、熱風は燒くが如く、安んぞ能く大軍を致さむや、と。すでにして、唐兵の磧石に臨みしを聞き、憂懼疾を發して卒し、子智盛立ち、日を刻して、將に葬らむとす。諸將之を襲はむを請ふ。侯君集曰く、天子、高昌の禮なきを以ての故に、吾をして、之を討たしむ。今人を墟墓の間に襲へば、問罪の師に非ざるなり、と。こゝに於て、鼓行して進み、詰朝之を攻め、午に及びて克つ。智盛出てゝ降る。高昌の麴氏、嘉より智盛に至るまで、凡そ五世、百三十四年にして滅す。君集兵を分ち、地を略し、その二十二城、戶八千四十六を下す。帝、高昌を以て、州縣となさむと欲す。魏徵諫むれども聽かず。遂に其地を以て、西州となし、安西都護府を置く。こゝに於て、唐の地、東は海に極まり、西は焉耆に至り、南は林邑に盡き、北は大漠に至り、皆州縣となす。凡そ東西九千五百一十里、南北一萬九百一十八里、疆域の廣き、前代比なし。

高昌麴氏の滅亡

吐蕃

吐谷渾亡びしの翌年、吐蕃又唐と和親し、婚を通ず。吐蕃は、本と漢の西羌の地、今の西藏なり。その種落、出づるところを知らずといひ、或は南凉の禿髮利鹿孤に出づと稱すれども、取るに足らず。周及び隋を歷、なほ諸羌を隔てゝ、未だ中國に通ぜず。その國人、その王を號して贊普といひ、相を大論・小論となし、以て國事を統理す。文字なく、木を刻し、繩を結びて約をなし、官ありと雖も、その職を常にせず、時に臨んで統領す。兵を徵すに、金箭を用ひ、寇至れば、烽燧を擧げ、百里一亭。刑を用ふる嚴峻、小罪は眼鼻を剜り、或は皮鞭之を鞭ち、但だ喜怒に隨つて常科なく、人を地牢に囚ふ、深さ數丈、二三年、方に之を出す。異國の賓客を宴する、必ず發牛を驅り、客をして、自ら牲を射、以て饌を供し、その臣下に與へしむ。一年一小盟、羊狗狲猴を刑し、先

づ、其足を折つて、之を殺し、繼いて其腸を裂いて、之を屠り、巫者をして天地山川日月星辰の神に告げしめて云ふ、若し心遷變、奸を懷いて反覆すれば、神明之を鑒する、羊狗に同じからむ、と。三年一大盟。夜、壇墠の上に於て、衆と肴饌を陳設し、犬馬牛驢を殺して、牲となし、咒して曰く、爾等咸な須く同心戮力、ともに我が家を保つべし、惟だ天神地祇ともに爾の志を知る。この盟に負くあれば、爾の身體を屠裂せしむる、この牲に同じからむ、と。その地、氣候大寒、秔稻を生ぜず、青麰麥、豆・小麥・蕎麥あり、畜には、犛牛猪犬羊馬多し。又天鼠あり。狀、雀鼠の如く、その大、猫の如し、皮は裘となすべし。又金銀銅錫多く、其人或は畜牧に隨ひ、その居を常にせず。然れども、頗る城郭あり。その國の都城、號して邏些城となす、室皆平頭、高きもの數十尺に至り、貴人は大氈帳に居り、名を拂廬となす。寢處汗穢、絕えて櫛沐せず、手を接して酒を飲み、氈を以て、盤となし、麥を捻りて椀となし、實すに、羹酪を以てし、幷せて之を食ふ。多く羱羝の神に事へ、人は巫覡を信じ、節候を知らず。麥の熟するを歲首となす。棊を圍んで陸博し、盧を吹き、皷を鳴らして候となし、弓劍身を離れず。壯を重んじ、老を賤み、母は子に拜し、子は父より倨り、出入少者前に在り、老者は其後に居る。軍令嚴肅、戰ふ毎に、前隊皆死し、後隊方に進む。兵死を重んじ、病終を惡み、累代戰沒、以て甲門をなし、陳に臨んで敗北せしもの、狐尾を其首に繫け、その狐の怯に似たるを表し、稠人廣衆、必ず以て狗へ、その俗、之を恥とし、以て死に次ぐとなす。拜するや、必ず兩手地に據つて、狗吠の聲をなし、身を以て再揖して止る。父母の喪に居る、髮を截り、青黛面に塗り、衣服皆黑、すでに葬れば、即ち吉。その贊普死すれば、人を以て殉葬し、衣服珍玩及び嘗て乘るところの馬、弓劍の類、皆悉く之を埋め、仍つて墓上に於て、大室を起し、土堆を立て、雜木を挿み、祠を爲つて之を祭る。吐蕃近世浸や疆く、勝兵數十萬。その贊普棄宗弄讃、勇略あり、西南、婆羅門と境を接し、深く佛法を信じ、即位の後、大尚十六人を印度に派して、佛典を求め、之に因りて、國憲を定め、律令を創め、內は治道を勵み、外は征戍を事とし、南方阿撒母泥婆羅を下し、西域諸國を威服す。貞觀八年、使を遣して入貢し、仍つて昏を求む。詔して、使者を遣し、往いて之を慰喩せしむ。弄讃、心平かならず。因つて衆二十萬を帥ゐて、松州（四川松潘衛）に寇す。帝、侯君集に命じて、之を破らしむ。弄讃懼れ、使を遣して、罪を謝し、因つて復た昏を求む。貞觀十六年、帝、之を許し、宗室の女文成公主を以て、往いて嫁せしむ。こゝに

至り、弄讃、その大論祿東贊を遣し、黄金珍寶を獻じて、聘となす。乃ち江夏王道宗に命じ、節を持し、文成公主を其地に送らしむ。吐蕃の贊普、大に喜び、中國の衣服儀術の美を慕ひ、公主の爲に別に城郭宮室を築いて、之に居らしめ、又その子弟を遣し、國學に入つて詩書を受けしむ。

印度の征定

佛教の東漸とともに、印度の僧、往々にして、葱嶺の雲を蹈み、東に來るものありしが、支那よりせしものは、一二求法の僧あるのみ、なほ多しとなさず。而して、吐蕃の地たるや、南は泥婆羅を經て、中天竺に通ずべきが故にその降服は、この二大故國の通路を開きしものに外ならず。はじめ、達磨が印度より來り、梁の武帝に見えたる頃、印度の國勢、又一變し、北境の烏萇に毗訖羅摩迭多大王の出づるあり、兵を耀かし、武を鍊り、先づ嚈達を攘ひ、次いで西北中三印度を併呑し、全半島に雄視し、五百年前、大月氏の侵入以後、絶えず、外寇の爲に困しめられし餘を受けて、アールヤ種族の再興、頗る觀るべく、文運亦た從つて振起せり。隋の大業年中、尸羅迭多王、出でゝ、恒河水上の曲女城に據る。王は一に曷利沙伐彈那といひ、世に有名なる成日王にして、曲女城は即ち羯若麴闍なり。王、彊兵を勒して、國亂を戡定し、象は鞍を解かず、士は甲を釋かず、東は朱羯嗢祇羅を服し、南は摩訶剌陁を下し、四天竺に君臨し、大に文教を奬勵し、佛法を興隆し、鍮鉛精舍を築き、奎運の盛、印度の黄金時代と稱す。故を以て、西域諸國、其風を傳ふるものあり。隋の煬帝、四境を撫し、ひとり、之に通ぜざるを憾とせり。貞觀十六年、烏茶國王達摩因陁訶斯、使を遣して、唐に入朝し、後四年、章求國王羅利多菩伽は、悉立國を經て、亦た入朝せり。時に唐僧玄奘、佛教を求めむが爲に、西域諸國を經て、印度に入り、尸羅迭多王に見え、太宗の事業を述ぶること、詳かなり。王、唐の富饒を聞き、貞觀十五年、使を發して、唐に通じ、唐も亦た梁懷璥を遣し、二國使節の往來、將に頻々たらむとす。貞觀二十二年、王玄策・莊師仁を遣して、使せしめ、印度の諸國、皆使を遣し、將に入貢せむとす。偶ま尸羅迭多王殂し、その臣阿羅那須自立し、兵を發して、玄策を攻む。玄策從騎僅に數十、身を脱して、宵に遁れ、吐蕃の西境に抵り、檄を飛ばして、鄰國の兵を徵し、因つて吐蕃の精鋭千、二百、泥婆羅の兵七千餘を得、進んで、中天竺に至り、伽比黎河濱の茶毗和羅城に戰ふこと三日、大に之に勝ち、斬首三千餘級、阿羅那須を俘にす。師仁、北ぐるを追うて、餘

衆を乾陀衛河上に破り、王妃及び王子男女一萬二千を虜にす。天竺の全土、爲に震駭し、城邑聚落、風を望んで潰え去り、降るもの五百八十餘。東天竺の尸鳩摩王は、牛馬二萬を送つて、軍を餉す。玄策は方士婆娑寐を以て歸り、迦沒路國は異物を獻じ、諸國前後、相繼いで唐に入貢す。漢族の勢威を振ふ、この時に過ぐるはなく、この後、印度の地、酋豪四方に割據して、分崩瓦解の否運に赴けり。

李思摩

東突厥の亡ぶや、部衆離散し、その多くは、唐に歸し、酋豪或は將軍に拜せられ、朝廷に列するもの百餘人。しばらくして、突利の弟結社率、亂をなして、誅せらる。こゝに及び、事を言ふもの、多く云ふ、突厥河南に留まること、便ならず、と。帝乃ち頡利の族人懷化郡王阿史那思摩に姓李氏を賜ひ、立てゝ泥孰俟利苾可汗となし、又皷纛を賜ひ、その種落を帥ゐて、舊部に送らしむ。突厥咸な薛延陀を憚れて、塞上を出づるを肯んせず。帝、乃ち薛延陀に璽書を賜ひ、之を諭し、各土疆を守り、或は分に踰ゆるなからしむ。薛延陀、詔を奉ず。こゝに於て、思摩を遣し、所部を帥ゐて、牙を河北に建てしめ、趙郡王孝恭等に命じ、冊書を齎らして、之を立てしむ。帝、侍臣に謂つて曰く、中國は根幹なり、四夷は枝葉なり。根幹を倒き、以て枝葉を奉ず、本安んぞ滋榮するを得む。朕、魏徵の言を用ひず、幾んど狼狽を致す、と。

薛延陀

すでにして、薛延陀の眞珠可汗、約に背き、貞觀十五年、その子大度設、遣して、諸部の兵二十萬を發し、突厥を擊たしむ。思摩禦ぐ能はず、部落を帥ゐて、長城に入り、朔州を保ち、使を遣して、急を告ぐ。李世勣等に詔し、道を分つて、之を擊たしむ。十二月世勣、薛延陀を諸眞水に敗り、斬首三千餘級、捕虜五萬餘人。大度設、身を脫して走り、大雪に値ひ、人畜凍死するもの十の八九。世勣軍を定襄に還へす。薛延陀、すでに敗れ、使を遣して昏を請ふ。帝、之を許し、新興公主を以て、之に妻さむとす。すでにして、帝、靈州に幸し、眞珠可汗と會禮す。眞珠可汗、大に喜び、益す馬羊を捜賦して、聘に充つ。薛延陀、本と庫底なく、諸部に調歛し、亟かに集らず。又磧を度つて、水草に乏しく、畜口耗死、過半期を失して至らず、乃ち責むるに聘禮の備はらざるを以てし、詔して、其婚を絕ち、靈州に幸するを停む。

然れども、李思摩、江を渡つてより後、薛延陀、數ば之を攻め、衆十萬ありと雖も、撫御する能はず、その衆、悉く南して河を渡り、勝夏二州の間に據る。思摩遂に輕騎朝

多彌可汗

に入り、留つて宿衛せむことを願ふ。帝、之を許し、以て右衛武將軍となす。

十九年、薛延陀の眞珠可汗卒し、豫め請うて、庶長子曳莽・嫡子拔灼を立てゝ、皆可汗となさむとす。こゝに至り、拔灼、その兄曳莽を殺して、自立し、多彌可汗と稱す。多彌可汗、猜褊殺を好み、父の時の貴臣を廢棄し、己の親昵するところを專用す、國人附かず。回紇諸部、之を擊ち、大に之を破る。帝、江夏王道宗に詔し、兵に將とし、並に進ましむ。國中驚擾、多彌出走し、遂に回紇の酋吐迷度の爲に殺さる。回紇代つて盡く其地に據る。餘衆西走、猶ほ七萬餘口、共に眞珠の兄の子咄摩支を立て、鬱督軍山の北に居る。敕勒九姓の酋長、咄摩支の來るを聞き皆懼る。朝議又碛北の患とならむを恐れ、貞觀二十年、李世勣を遣して、之を圖らしめ、帝自ら靈州に至つて招撫す。世勣、鬱督軍山に至る。咄摩支降る。道宗の兵、すでに碛を度り、薛延陀の兵を破り、敕勒諸部を招諭す。回紇等十一姓、各使を遣して歸命し、官司を置かむを請ふ。時に、褐、浮陽に至る。帝大に喜び、詔して曰く、朕、聊か偏師に命じ、遂に頡利を擒にし、はじめて廟略を宏にし、すでに延陀を滅し、鐵勒百餘萬戸、請うて州郡となる。混元以來、殊に未だ前聞せず、宜しく禮を備へて、廟に告げ、仍て普天に頒示すべし、と。帝、自ら詩を

燕然都護府

車鼻可汗

爲つて曰く、雪耻酬百王、除兇報千古、と。石を靈州に勒す。明年回紇諸部皆來朝す。詔して、六府一州となし、各その酋長を以て、都督刺史となす。諸酋長、回紇以南突厥以北を以て、一道を開き、之を參天可汗道といひ、六十八驛を置かむことを請ふ。こゝに於て、北荒悉く平ぐ。然れども、回紇・吐迷度、すでに私に自ら可汗の稱號を稱すること、突厥の故事の如し。

その翌二十一年、燕然都護府を置く。その後、更めて瀚海といひ、又安北といひ、遷徙常ならず。最後に移つて天德府に治す。今の吳喇忒旗西北、黃河の北岸に在り。李素立を以て、その都護となし、瀚海等の六府・阜蘭等の七州を統ぶ。素立、撫するに恩信を以てし、夷落之に懷き、ともに馬牛を率ゐて獻となす。素立、惟だ其の酒杯を受け、餘は悉く之を還へす。東突厥の亡ぶや、諸部車鼻可汗を立てむと欲す。時に薛延陀、方に彊く、車鼻敢て當らず、衆を帥ゐて、之に歸す。薛延陀、車鼻貴種にして、勇略あるを以て、その後患をなさむことを恐れ、之を殺さむと欲す。車鼻逃れ去つて、牙を金山の下に立て、自ら可汗と稱し、突厥の餘衆、稍や之に歸す。薛延陀の敗るゝに及び、車鼻勢益す張り、子を遣して、入て見え、又入朝を請ふ。使を遣して、之を徵す。車鼻

至らず。こゝに於て、右驍衛郎將高侃を遣し、兵を發して、之を討たしむ。侃、阿息山に至る。車鼻、諸部の兵を發するも、皆應ぜず。遂に數百騎を以て走る。侃、追うて之を獲たり。時に太宗すでに崩じ、高宗立つ、乃ち之を京師に送り、廟社及び昭陵に獻じて、之を赦す。因つて狼山都督を鬱督軍山に置き、その餘衆を統ぶ。突厥諸部、盡く內臣となる。唐、乃ち單于瀚海二都護府を置く。瀚海は前に言ひし燕然にして、外蒙古に在り、單于は狼山以下、三都督蘇農等の十四州を領し、一は天德軍に、一は振武軍に屬治す、皆謂ゆる六都護府の一なり。

高麗の蓋蘇文

太宗英邁の資を以て、大に武を諸蠻に耀し、西は突厥を定め、北は鐵勒諸部を服し、南は遠く天竺を討ちしも、ひとり、東征に至りては、復た煬帝の故轍を蹈み、遂に志を得ざりき。貞觀十六年、高麗東部の大人泉蓋蘇文、凶暴にして不法多く、其王建武及び大臣議して之を誅せむとす。蓋蘇文之を知り、兵を勒して、盡く諸大臣を殺し、因つて馳せて宮に入り、手づから其王を弑し、王の弟の子藏を立つて王となし、自ら莫離支となる。その官、中國の吏部兼兵部尚書の如し。こゝに於て、遠近に號し、

高麗の征伐

專ら國事を制す。蓋蘇文、狀貌雄偉、身に五刀を佩ぶ。左右敢て仰ぎ視るなし。出でゝ行く、毎に、前導長呼すれば、人皆奔逸し、坑谷を避けず。遼州刺史裴思莊、奏して、之を討たむを請ふ。帝曰く、高麗職貢絕えず、賊臣の弑するところとなる、朕甚だ之を哀む、但だ山東彫弊、吾、未だ兵を言ふに忍びざるのみ、とすでにして、使を遣し、節を持し高藏を冊命して、遼東郡王となす。

これより先、貞觀六年、新羅入貢せしことあり。十七年に至り、使を遣して云ふ、百濟、高麗と兵を連ね、新羅入貢の路を絕つ、兵を出して救援せよ、と。帝、使を遣し、璽書を齎らして、之を諭す。蓋蘇文、詔を奉ぜず。使還る。帝曰く、蓋蘇文、君を弑す、以て討たざるべからず、と。諫議大夫褚遂良、之を諫れども聽かず。すでにして、蓋蘇文、白金を貢す。帝之を却け、その使者を責め、悉く之を大理に屬し、十八年十月、洛陽に至り、張亮を以て平壤大總管となし、兵を帥ゐ、乘州より海に泛んで、平壤に趣かしめ、李世勣を以て、遼東大總管となし、步騎を帥ゐて、遼東に趣かしめ、手詔して、天下に諭して曰く、高麗の蓋蘇文、王を殺し、民を虐す、今その罪を問ひ、順を以て逆を討ち、治を以て亂に乘ず、何ぞ克たざるを憂へむ。元元に布告す、疑懼を爲すこと勿れ、と。

その班師

十九年正月、帝、諸軍を將ゐて、洛陽を發す。李世勣、師を潛めて、遼水を濟り、蓋平城（奉天府蓋平縣）を攻めて、之を拔くずてにして、張亮舟師を以て海を渡り沙卑城を襲ひ、城潰ゆ。世勣遂に遼東城を圍む。車駕遼澤に次し、泥淖二百餘里、土を布いて、橋を作り、以て渡し、すでに渡るや、又た撤し、以て志を堅うし、進んで遼東城下に至る。世勣城を攻むること、すでに二十日。帝、精兵を引いて、之に會し、その城を圍むこと數百重、火を縱つて城に登る。高麗力戰して、敵する能はず、遂に之に克つ。六月、白巖城（遼陽州東北）を降し、進んで、安市（蓋平縣東北）を攻む。高麗北部の韓薩延壽・惠眞、兵十五萬を帥ゐて、之を救ふ。帝、阿史那社爾に命じ、僞り走つて、之を誘はしむ。高麗の軍、城の東南に至り、山に依つて陳す。帝、世勣をして、步騎一萬五千を以て、西嶺に陳し、長孫無忌をして、精兵一萬一千を將ゐて、山北より狹谷を出で、以て其後を衝かしめ、自ら步騎四千を將ゐて、奇兵を爲し、鼓角を挾み、旗幟を偃せ、北山に登る。延壽・世勣の陳を布くを見、戰はむと欲す。帝、その軍をして、鼓譟並び進ましむ。延壽・兵を分つて之を禦がむとし、其陳大に亂れ、兵潰ゆ。延壽・惠眞、衆を帥ゐて降を請ふ。擧國大に駭く。帝、乃ち幸せしところの山の名を改めて、駐蹕山といふ。尋いで、帝、安市を攻む。城中旌麾を望見し、輒ち陴に登つて譟ぐ。帝、怒る。李世勣、城に克つの日、男子盡く之を殺さむを請ふ。城中之を聞いて、益す堅守し、攻むること、久うして、下らず。凡そ六旬。帝、遼左早寒、草枯れ水凍り、士馬久しく留まり難く、且つ糧食將に盡きむとするを以て、敕して、師を班し、兵を安市城下に耀して旋る。城主城に登つて拜辭す。帝、その固守を嘉し、練百匹を賜ひ、以て君に事ふるを勵ます。すでにして師を還して、遼を渡るや、暴風雪、士卒沾濕して死するもの多し。この行、死者幾んど三千人、戰馬死するもの、什の七八。帝、功を爲す能はざりしを以て、深く之を悔ゐ、嘆じて曰く、魏徵もし在らば、朕をして是行あらしめざるなり、と。命じて驛を馳せ徵を祀るに少牢を以てし、復た襲するところの碑を立て、その妻子を召し、行在に詣らしめ、之を勞賜す。

再び高麗を討つ

貞觀二十一年、復た高麗を伐たむとす。朝議以爲へらく、高麗山に依つて城となす、之を攻むるも、猝に拔くべからず。前に大駕親征、國人耕種を得ず、大半食に乏し。今若し偏師を遣し、更迭して、その疆場を擾し、彼をして、奔命に疲れしめ、未を釋て、堡に入らしむれば、數年の間、千里蕭條、人心自ら離れ、鴨綠以北、戰はずして取る

べし、と。帝、之に從ひ、牛進達・李世勣を以て、行軍大總管となし、水陸並び進み、以て之を討たしむ。この年五月、世勣、南蘇城を破り、七月、進達、石城を拔き、乃ち還る。明年七月、復た薛萬徹を遣し、海道より進ましむ、萬徹、鴨綠水を渡り、その渠帥を斬つて還る。

劍南の騷亂

その翌二十二年、帝、高麗の困弊を以て、明年三十萬の衆を發し、一擧して、之を滅せむを議す。或は、劍南の地、隋末寇なく、屬者遼東の役、又徵發に預らず、百姓富庶、宜しく舟を造らしむべきを以てす。帝之に從ひ、使を遣し、民を發して船を造り、役、山獠に及ぶ。こゝに於て、雅・眉・邛、三州の獠反す。隴右・峽中の兵、二萬餘人を發し、以て之を擊たしむ。蜀人、造船の役に苦み、州縣督促嚴急、民、田宅を賣り、子女を鬻ぐも、供する能はず、穀價騰躍、劍外騷然たり。

太宗の崩殂

その翌二十三年、帝、痢を疾み、增す劇し。太子、晝夜側を離れず、或は累日食はず、髮白に變するものあり。帝長孫無忌・褚遂良を召して、臥內に入れしめ、之に謂つて曰く、太子仁孝、善く之を輔導せよ、と。又太子に謂つて曰く、無忌・遂良在り、汝、天下を憂ふる勿れ、と。又遂良に謂つて曰く、無忌、忠を我に盡す、我の天下を有する、其力多きなり。我死するも、讒人をして、之を間せしむる勿れ、と。仍つて、遂良をして遺詔を草せしむ。頃くありて、帝崩ず。秘して、喪を發せず。無忌等、太子に請うて、先づ飛騎勁兵及び舊將を還し、皆大行に從はしめ、御馬輿、繼いて至り、喪を發して、遺詔を宣べ、遼東の役及び諸土木の功を罷む。四夷入仕し、及び朝貢するもの、數百人、喪を聞いて、皆慟哭し、髮を剪り、面を勞し、耳を割き、流血地に灑ぐ。その秋八月、昭陵に葬る。阿史那社爾・契苾何力、殉葬せられむを請ふ。太子人を遣し、諭すに先旨を以てして許さず。蠻夷の君長、先帝の爲に擒服せられしもの、頡利等十四人、皆石を琢いて象を爲り、北司馬門內に列す。後世の史家、論じて曰く、太宗武を以て亂を撥し、仁を以て殘に勝ち、その材略は、漢高に優れども、而かも、規模は、及ばざるなり。恭儉は、孝文に若かず、而かも、功これに過ぐ。その本性を迹ぬるに、悍彊勇にして親を顧みず、而かも、能く義を畏れ、賢を好み、己を屈して諫に從ひ、刻勵矯揉、善を爲すを力むこれ皆貞觀の治を致せし所以なり、と。太子治立つ、是を高宗皇帝となす。

高宗の即位

はじめ、太宗、承乾を太子となす、少にして、躄疾あり、聲色畋獵を喜び、爲すところ

奢靡、高祖の子漢王元昌、爲すところ不法多く、而かも、之と甚だ善し。魏王泰、多能にして寵あり、潛に嫡を奪ふの志あり、節を折つて士に下り、以て聲譽あり。太子、その逼を畏れて、之を殺さむを謀る。吏部尚書侯君集、又怨望することあり、太子に反を勸むすてにして、其事泄る。詔して承乾を廢して庶人となし、之を幽し、元昌に自盡を賜ひ、君集及び其黨皆誅に伏す。次いで、泰の爵を貶して東萊郡王となし、之を北苑に幽し、府僚親狎の者、皆嶺表に遷す。こゝに於て、晉王治、立てられて、太子となる。時に年十六。詔して、長孫無忌を以て太子太保となし、房玄齡を太傅となし、蕭瑀を太保となし、李世勣を詹事となす。二人並に中書門下三品に同す。即ち侍中中書令に同じきの謂にして、爾後唐の宰相は、皆同中書門下三品と稱せり。高宗すてに即位す。時は開國を去ること三十餘年。直に太宗至治の世を承け、長孫無忌・褚遂良・李世勣等、創業の功臣、文武の耆宿、なほ存するものあり。内は治政の美をなし、外は經略の大をなし、前代を通じて唐室の極盛時代なり。ひとり惜む、武韋の禍源、牝雞司晨の變、この間に胚胎し、遂に唐室の一弛をなせしを。然れども、突厥・吐蕃・高句麗諸國に對する政策の成功は、又實に史上不朽の盛を値するものなり。

沙鉢羅可汗

沙鉢羅の改亡

はじめ、西突厥の乙毗咄陸可汗、すてに吐火羅に奔り、その葉護阿史那賀魯、衆を以て内屬す。詔して瑤池都督となす。賀魯、離散を招集し、廬帳漸く盛なり。太宗の崩を聞くや、遂に乙毗射匱可汗を擊破し、牙を千泉に立て、自ら沙鉢羅可汗と稱し、咄陸弩失畢の十姓を統有し、勝兵數十萬、乙毗陸と兵を連ね、處月・處密及び西域諸國、多く之に附く。こゝに至りて、永徽六年七月、進んて庭州に寇し、攻めて金嶺城を陷る。詔して、武侯大將軍梁建方・契苾何力をして、兵三萬及び回紇五萬を發し、以て之を討たしむ。明年梁建方・賀魯に與みせし處月・朱邪・孤注を擊つて之を斬る。又二年、乙毗咄陸死し、その子真珠葉護、沙鉢羅を擊ち、すてにして、復た沙鉢羅の併すところとなる。その後、帝、使を遣し、真珠葉護を冊拜して、可汗となし、碎葉城に至らしめしも、沙鉢羅の拒ぐところとなり、程知節をして、之を討たしめしが、克たず。顯慶二年、蘇定方を以て、伊麗道行軍總管となし、諸軍を督して、北道より進討せしむ。

その十月、蘇定方、曳咥河西に至る。沙鉢羅、兵十萬を帥ゐて拒ぎ戰ふ。定方擊つて之を敗り、斬獲數萬、會ま大雪、平地二尺、軍中成な時を俟つて行かむことを請ふ。定

方曰く、虜、雪の深きを恃み、我を以て、進む能はず、必ず且つ休息せしとなさむ。亟かに之を追へば、及ぶべきなり。乃ち乘行して、その牙帳に至り、兵を縱つて、之を擊ち、斬獲又數萬。沙鉢羅、脫走して、石國に趨く。定方乃ち兵を息め、諸部各居るところに歸り、道路を通じ、郵驛を置き、骸骨を蔽ひ、疾苦を問ひ、疆場を畫し、生業を復し、凡て沙鉢羅の掠むるところとなりしもの、悉く還して、之を給し、十姓安堵、故の如く、乃ち蕭嗣業をして、沙鉢羅を追はしめ、之を得たり。こゝに於て、西突厥の地を分ち、崑陵・蒙地の二都護府を置き、達頭可汗五世の族孫彌射を以て、興昔亡可汗となし、五咄陸の部落を押せしめ、彌射の族兄步眞を以て繼往絕可汗となし、五弩失畢の部落を押せしむ。

龜茲

これより先、太宗の末年、龜茲王河黎失畢、やゝ臣禮を失ひ、鄰國を侵漁す。帝怒り、阿史那社爾・契苾何力・郭孝恪等に命じ、兵に將として、之を擊たしむ。社爾兵を引いて、焉耆の西より、龜茲の北境に赴き、兵を分つて、五道となし、その不意に出づ。焉耆、王、龜茲に走る。社爾兵を遣し、擊つて之を斬り、進んで碛口に屯す。龜茲王布失畢及び、相那利敗走して、都城を保つ。社爾軍を進めて、之に逼り、その城を拔き、郭孝恪をして、之を守らしむ。布失畢、走つて、撥換城を保つ。社爾追うて之を擒にす。那利、餘燼を收合し、潛に西突厥の衆を引き、孝恪を襲殺す。驍衛將軍曹繼叔等、那利を擊つて、之を獲たり。社爾、大にその大城五を敗り、使を遣して、七百餘城を降し、王弟葉護を立てゝ王となし、西域震駭す。社爾石に勒し、功を紀して還る。すでにして、布失畢の妻那利と通じ、君臣猜阻、互に來つて難を告ぐ。帝、兩つながら之を召し、那利使を遣すに因つて、布失畢を送つて、國に歸らしむ。龜茲の將羯獵頭、衆を發して、之を拒ぐ。詔して、兵を發して、羯獵頭を擊ち、乃ち安西都護府を龜茲に移し、高昌は但だ西州都督府となる。

波斯

その冬、西突厥の種落を六都督府に分ち、役屬の諸國、皆州府を置き、西は波斯に至り、龍朔元年、于寅以西、波斯以東、八都督府、七十六州、百十縣、百二十六軍府を置き、並に安西都護府に隸屬し、碑を吐火羅に立てゝ、帝德を紀す。蓋し波斯の唐に通ぜしは、貞觀十二年なりしが、大食國、即ち亞剌比亞のオーマル、オトマン等、その西邊を侵陵し、又夙に唐の威令、中央亞細亞に及ぶを聞き、波斯が之に依つて、後援をな

吐蕃の勃興

さむとするを恐れ、永徽二年、哈利發微密莫末膩、使を遣して、好を唐に通じ、永徽五年、兵を發して、波斯王伊嗣俟を殺す。こゝに於て、王子卑路斯は、出てゝ吐火羅に走り、推されて波斯王となる。この時、波斯、救援を求めしも、帝は其地遼遠なるを以て、辭す。後七年を經て、龍朔三年に至り、波斯都護府を疾陵城に立て、卑路斯を以て、之に拜す。この年、瓜州道總管蘇海政、詔を受けて、龜茲を討ち、興昔亡・機往絶二可汗に敕し、兵を發して、與に俱にせしむ。機往絶、素と興昔亡と怨あり、密に海政に請ひ、敕を矯め、收めて之を斬り、その部落亡走し、海政追討して、之を平く。機往絶、繼いて死し、十姓主なく、吐蕃に附く。唐世吐蕃の禍、實に此に始まる。

すでにして、吐蕃の勢、日に盛にして、西域の十八州を陷れ、又于闐と龜茲の援換城を襲うて、之を陷る。咸亨元年、詔して、龜茲・于闐・焉耆・疏勒の四鎮を罷め、薛仁貴を以て、大總管となし、阿史那道眞・郭待封之に副とし、以て吐蕃を討つ。待封先に仁貴と並びしを以て、其下に居るを恥ぢ、仁貴の言ふところ、多く之に違ふ。大非川(青海西布喀河)に至るや、仁貴所部を帥ゐて、前行し、吐蕃を河口に擊ち、斬獲甚だ衆く、進んで、烏海に屯す。待封輜重を將ゐて徐に進み、吐蕃に遇うて敗績す。仁貴退いて、大非川に屯す。吐蕃就いて之を擊つ、唐兵敗死、略ぼ盡き、吐蕃王欽陵と和を約して還る。仁貴待封、皆死を免じて、除名す。欽陵、弟贊婆・悉多・于勃論と、皆才略あり。欽陵父に代つて政を秉り、三弟兵に將として、外に居り、隣國之を畏る。

唐兵吐蕃に敗る

その三年、吐谷渾、吐蕃を畏れて、靈州(寧夏府中衛縣)に徙り、その故地、皆吐蕃に入る。この年、吐蕃その大臣仲琮を遣して、入貢せしむ。帝問ふに、その地の風俗を以てす。對つて曰く、吐蕃の地、薄く氣寒し、風俗樸智、然れども、法令嚴整、上下心を一にし、議事常に下より起り、人の利するところに因つて之を行ふ、斯れ能く持久する所以なり、と。帝又詰るに吐谷渾の地を奪ひ、及び薛仁貴を敗るの事を以てす。仲琮曰く、臣命を受けて來り獻ず、他は聞くところに非ず、と。帝厚く賜うて之を遣る。帝、劉仁軌を以て、洮河軍を鎮せしむ。仁軌李敬元と善からず、その將帥の才に非ざるを知り、故らに之を薦め、西邊を守らしむ。敬元固辭す。强いて、之を起す。儀鳳三年九月、敬元兵十八萬を將ゐて、吐蕃の將論欽陵と青海に戰ふ、副總督劉審禮、深く入つて敗沒す。敬元兵を按じて救はず、狼狽して、還り走り、員外將軍黑齒常之、死士を帥ゐて、虜營を擊ち、之を走らす、敬元餘衆を收めて、鄯州に歸るを得たり。

吐蕃の極盛

吐蕃の贊普死し、子器弩悉弄立つ。年はじめて八歲。帝、裴行儉に命じ、間に乘じて、之を圖らしむ。行儉曰く、欽陵政をなし、大臣輯睦す、未だ圖るべからざるなり、と。乃ち止む。永隆元年、河原に入寇す。將軍黑齒常之、擊つて之を卻く。常之、河原の要衝を以て、兵を加へて、之を戍らむと欲す。而して、轉輸險遠、乃ち廣く烽戍七十餘所を置き、開くところ屯田五千餘頃、歲に五百餘萬石を收む。これに由つて、戰守備あり。これより先、劍南兵を茂州に募り、安成城を置き、以て吐蕃の路を斷つ。吐蕃攻めて其城を陷れ、兵を以て、之に據る。是に由つて、西洱の諸蠻、皆吐蕃に降る。吐蕃の地、東は涼松茂嶲等の州に接し、南は天竺に鄰り、龜茲疏勒于闐焉耆等の四鎭を陷れ、北は突厥に抵り、地方萬餘里、殆んど天山南路の全土を得、諸胡の盛、ともに比をなすなし。

これより先、西突厥の阿史那都支及びその別帥李遮匐、吐蕃と連和し、安西に侵逼す。朝議兵を發して、之を討たむとす。時に波斯は、大食の滅するところとなり、その王卑路斯入朝し、尋いで死し、その子泥涅斯、質となつて、京師に在り。こゝに於て、

四突厥都支の敗

裴行儉の言に從ひ、波斯王を冊立す。その西州を過ぐるや、稍や涼くして西上すべしと揚言す。都支之を覘ひ知つて、遂に備を設けず、行儉、安西四鎭の酋長を召して、萬人を得、陽つて畋獵をなし、部伍を校勒する數日、遂に道を倍して、西に進み、都支の部落を去ること十餘里、使を遣して、その安否を問はしめ、召して、與に相見る。都支計出づるところなく、子弟を帥ゐて迎謁するや、遂に之を擒にし、その精騎を簡し、進んで遮匐を掩ふ。遮匐亦た降る。こゝに於て、都支・遮匐を囚らへて歸り、波斯王を遣して、其國に還らしめ、その副王方翼を安西に留め、碎葉城を築かしむ。焉耆都護府、所治の城、四面十二門、屈曲隱出伏沒の狀をなす。西域の胡、縱觀して方略を測るなく、悉く珍寶を獻ず。

突厥唐兵を敗る

その冬、單于大都護府の突厥阿史德溫傅、奉職の二部、ともに反し、阿史那泥熟匐を立てゝ可汗となし、二十四州の酋長、皆叛いて、之に應じ、衆數十萬、長史蕭嗣業等を遣して、兵に將として、之を討たしむ。嗣業等、先づ戰ひ、屢ば勝ち、因つて備を設けず、會ま大雪、突厥夜その營を襲ひ、嗣業狼狽し、營を拔いて走り、衆大に亂れ、虜の敗るところとなる。突厥遂に定州に寇す。刺史霍王元軌、命じて、門を開き、旗を偃せし

突厥の平治

む。虜伏あるを疑ひ、懼れて遁る。

その翌、永隆元年、帝、裴行儉に謂つて曰く、卿、文武兼資、今卿に授くるに二職を以てす、と。乃ち禮部尚書右衛大將軍に除し、定襄道行軍大總管となし、兵三十餘萬を帥ゐ、以て突厥を討つ。こゝに至り、行儉大に突厥を黑山に破り、奉職を擒にす。泥熟匐、その下の殺すところとなり、首を以て來り降る。

百濟亡ぶ

高宗の西域經略、一張一弛せしと雖も、吐蕃の剛强、遂に征する能はず。後に武氏の禍起るに及び、愈よ其勢を加へたり。かくの如くして、太宗の當時に若かざるものありと雖も、東征に於ては、却て、大に志を得、彼此乘除、その功業、決して相劣らざるの實を示せり。はじめ、百濟、高麗の援を恃み、數ば新羅を侵す。新羅王、上表して、救を求む。顯慶五年、蘇定方等に詔し、水陸十萬を率ゐて、之を伐たしむ。定方軍を引き、成山(山東登州府文登縣南)より海を濟り、直に其都に趨く。百濟、國を傾けて來り戰ひ、大に之を敗る。百濟王義慈降る。百濟は、始祖溫祚王、基を開いてよりこゝに至るまで三十王を歷たり。その間、溫祚王は、河南慰禮(忠淸道稷山縣)及び漢山(忠淸道廣州)に、近肖古は北漢山(忠淸道楊州)に、文周王は熊津に、聖王は泗沘及び南扶餘に都し、年數凡そ六百七十八年。こゝに於て、唐は其地に於て、熊津・馬韓・東明・金漣の四督府を分置し、劉仁願に命じて、泗沘城を守らしめ、又雞林州大都督府を置き、新羅王を以て之に任ず。

百濟の餘衆と日本の出兵

その翌年、百濟の遺臣鬼室福信、散卒を招收し、新羅の軍を破り、遂に入つて王城を保し、以て恢復を圖り、使を我が日本に遣し、唐俘百餘人を獻じて、援兵を乞ひ、且つ百濟の侍子豐璋を迎へ、立てゝ國王となさむとす。こゝに於て、齊明天皇、難波に行幸し、兵仗を簡閲し、車駕を發す。次いで、天皇朝倉の行宮に崩じ、天智天皇、位に即き、阿曇比邏夫・河邊百枝をして、兵に將として、百濟を救はしめ、又卒五千餘を發し、王子豐璋を送らしめ立てゝ百濟王となす。時に西北諸部、皆百濟に應じ、相與に唐將劉仁願を熊津に圍みしが、仁願及び檢校帶方州刺史劉仁軌、新羅の將金欽と兵を合せ、我が兵を白江口に敗る。百濟の兵、又潰え、豐璋高麗に走る。これより先、豐璋その功臣福信の謀反を疑ひ、遂に之を殺し、百濟その後を絕つ。

高麗亡ぶ

時に高麗の權臣蓋蘇文死し、その兄弟權を爭ひ、國中穩かならず。こゝに於て、帝、

李勣を以て、大總管となし、郝處俊、之に副とし、同じく高麗を伐つ。李勣、高麗の新城を拔き、遂に進んで、十六城を攻め、皆之を下す。すでにして、左武衛將軍薛仁貴、高麗の兵を金山に擊ち、勝に乘じて、扶餘城を攻め、大に之を破り、殺獲萬餘人、遂に之を拔き、餘の四十城、皆風を望んで服を請ふ。こゝに於て、勣等進んで大行城（咸興府西南）を攻めて、之を拔き、諸軍皆會し、進んで鴨綠柵に至り、之を破り、平壤を圍むこと月餘。高麗救を日本に請ひ、日本水師を出して之を防ぎしも、利あらず。城遂に陷り、高麗王高藏、出てゝ降り、其國遂に亡ぶ。高麗は、その始祖、東明王、卒本扶餘に都して、より、二十八王を歷、その間に、瑠璃王は尉那巖（平安道義州）に、山上王は丸都（平安道寧遠郡劍山）及び平壤、その他、東黃城（平安道木覓山）に、長壽王は又平壤に、平原王は長安及び平城に都し、年を歷ること七百五年。百濟の滅亡に後るゝこと八年。總章元年十二月、李勣、師を班して、將に至らむとす。帝、命じて、故の高麗王等を以て、昭陵に獻じ、軍容を具へ、凱歌を奏して、京師に入り、太廟に獻ず。帝、俘を含元殿に受け、高麗を分つて九都督府、四十二州、百縣となし、安東都護府を平壤に置き、以て之を統べしめ、その酋長功あるものを擢てゝ、都督刺史縣令となし、華人と參理せしめ、薛

新羅

新羅及び唐の交渉

仁貴を以て檢校安東都護となし、兵二萬人を總べ、以て之を鎭撫す。その後、高麗の三萬八千戶を江淮の南及び京西諸州空隙の地に移す。

三韓の中、高麗、百濟すでに亡び、半島に存するものは、唯だ新羅の一國のみ。新羅の武烈王薨じ、太子文武王位を承くるや、功臣金庾信、七十九にして卒す。その疾革りしとき、王親ら存問し、泣いて曰く、もし不諱の事あらば、人民社稷を如何、と。對へて曰く、今日三國一家となり、百姓二心なし、これ小康といふべし。然れども、古しへより、繼體の君、よく終るあるなし、甚だ懼るべし。願くは、君子を親み、小人を遠ざけ、朝廷をして、上に和し、民物をして下に安ぜしむれば、臣死すとも憾なからむ、と。王感動して、大にその子孫を待遇せり。蓋し庾信は、武烈王の時よりして、自ら社稷を以て任じ、唐及び百濟高麗の間に周旋し、遂に新羅統一の業をなし、兒童走卒に至るまで、其功を稱せざるものなかりしといふ。

新羅すでに唐と力を併せて、他の二國を亡ぼし、唐、その地を分つて都督府を置きしが、文武王は百濟の地を蠶食し、又高麗の遺孽を冊封して、平壤等の地を取りしを以て、唐の總管薛仁貴は、僧琳潤を遣し、書を王に致し、その異圖を責む。王その

反せざるを明かにすれども、唐兵信ぜず。進んで平壤を進む。新羅の軍、大に敗れ、阿彌含、之に死す。文武王、上表して、罪を唐に請へども聽かず、遂に王の爵を削り、劉仁軌を遣し、來り討たしむ。王又使を遣し、方物を獻じて、罪を請ふ。帝、之を赦して、官爵を復す。王、薨じて、神文王立つ、時に開耀元年なり。

高宗東征の功、かくの如しと雖も、その後、武韋の禍より、安史の亂に續き、唐室漸く振はざるに至り、威令遠きに及ばず、新羅は、全半島に君臨し、土を遼東に廣めむとし、復た漢末の世に似たるものあり、その績、長しへに存する能はざりき。

唐初諸外國との交渉、略ぼ此の如し。次章に於て、武韋の女禍以下、內廷の變事に就いて、述ぶるところなかるべからず。蓋し、國勢の張弛に關するもの、頗る大なればなり。

武氏の出身

第九十七章　則天武氏

古しへより、女禍少からずと雖も、唐の武氏、國を簒せし如きは、殆んど稀なり。武氏、名は曌、荊州都督武士彠の女、年十四の時、太宗その美を聞き、召して後宮に入れて、才人となす。高宗の太子たりしとき、入つて太宗に侍し、見て之を悅ぶ。すでにして、太宗崩じ、武氏諸嬪御に隨ひ、出てゝ尼となる。忌日に方り、帝、寺に詣つて行香し、之を見て泣く。時に蕭淑妃寵あり、王皇后之を疾む。后因つて武氏をして陰に髮を長くせしめ、之を後宮に納れ、以て淑妃を間せむと欲す。武氏巧慧にして權數多し。はじめて、宮に入るや、體を屈して、后に事ふ。后數ば其美を稱す。未だ幾ならず、大に幸せられ、永徽五年、拜して昭儀となす。后及び淑妃、寵皆衰へ、相與に之を譖す。帝、皆納れず。昭儀寵すでに盛なり。然れども、帝、未だ王皇后を廢するに意あらず。會ま昭儀女を生む。后憐んで之を弄す。后出づ。昭儀潛かに之を扼殺し、罪を后に歸す。帝、是に由つて、廢立の志あり。乃ち長孫無忌褚遂良李勣于志寧を召して、之を謀る。皆之を諫む。こゝに於て、遂良を貶して潭州都督となし、六年十月、遂に王皇后を廢して、庶人となし。蕭淑妃とともに別院に囚らへ、昭儀武氏を立てゝ皇后となす。その後、帝、故の皇后を念ひ、間行して其所に至り、之を呼ぶ。王后泣いて對へて曰く、至尊もし疇昔を念ひ、再び日月を見るを得せしむれば幸甚し、と。帝曰く、朕即ち處置あり、と。武后之を聞いて、大に怒り、人を遣して、手足を斷去せしめ、酒甕中に投じて曰く、

武氏の專權

二媼をして骨までも醉はしめむ、と。數日にして死す。又之を斬る。蕭淑妃、將に死せむとす。罵つて曰く、阿武妖猾、乃ち此に至る、願くは他日我生れて猫となり、阿武鼠となり、生生その喉を扼さむ、と。これより、宮中猫を育せず。武后數ば、王蕭祟をなす、死時の狀の如きを見、即ち蓬萊宮に徙る。厲復た見はる。故に多く洛陽に在り、敢て長安に歸らず。

顯慶元年、太子忠を以て、梁王となし、後廢して庶人となし、武后の子代王弘を立てゝ、皇太子となし、其父武士彠に司徒を贈り、爵周國公を賜ふ。皇后、威福を弄し、頻りに長孫無忌等を貶し、後、柳奭・韓瑗と併せて之を殺し、三家の近親、皆嶺南に流して、奴婢となし、又上官儀・劉孫道を殺し、梁王忠を罷めて死を賜ひ、朝士流貶するもの、甚だ多し。時に尉遲敬德・褚遂良等、すでに死し、李勣以下、專ら征戎に從事し、內廷の事に預らず、許敬宗等、皇后に媚附し、讒搆を事とす。麟德元年より後、帝事を視る毎に、后簾を後に垂れ、政大小となく、皆之を預り聞き、天下の大權、悉く中宮に歸し、天子は拱手するのみ。中外之を二聖といふ。正元元年八月、帝を天皇と稱し、后を天后と稱す。太子弘、仁孝謙謹、帝甚だ之を愛し、中外心を屬す。天后方に其志を逞うす、

中宗の廢位

太子奏請し、數ば旨に忤ふ。義陽・宣城二公主は、蕭淑妃の女、掖庭に幽せられ年三十に踰ゆ。太子之を視て驚惻し、奏し請うて、出で降さむとす。帝之を許す。天后怒り、即日公主を以て、上翊衛に配當し、太子尋いで薨ず。時人以て天后之を酖すとなす。詔あり、追謚して、孝敬皇帝となす。帝子にして皇帝と謚するは、此に始まる。こゝに於て、雍王賢を立てゝ太子となす。永隆元年に至り、又之を廢して庶人となし、英王哲を立てゝ太子となす。弘道元年、高宗崩ず、太子哲、位に即く、是を中宗皇帝となす。天后を尊んで、皇太后となす。

中宗位に即いて幾に二月、嗣聖元年、帝、后の父韋元貞を以て侍中となさむと欲す。裴炎固く爭ふ。帝怒つて曰く、我天下を以て韋元貞に與ふも、何ぞ不可ならむ、而かも侍中を惜むか、と。炎懼れて太后に白し、密に廢立を謀る。太后百官を乾元殿に集め、兵を勒し、令を宣べ、帝を廢して、廬陵王となす。帝曰く、我何の罪。太后曰く、汝天下を以て韋元貞に與へむと欲す、何ぞ罪なきを得むと。乃ち別所に幽し、豫王旦を立てゝ皇帝となす。是を睿宗皇帝となす。こゝに於て、文明と改元し、旦は別殿に居

武氏の改革

て、豫るところあるを得ず。政事皆太后に決す。

太后すでに朝政を掌握し、變革するところ多し。こゝに於て、光宅と改元し、旗幟皆金色に從ひ、八品碧を服し、東都を神都となし、尚書省を文昌臺となし、僕射を左右相となし、六曹を天地四時の六官となし、門下省を鸞臺となし、中書省を鳳閣となし、侍中を納言となし、中書令を內史となし、御史臺を分つて左右肅政臺となし、その餘、悉く義類を以て之を改め、次いで武氏の五廟を立つ。

李敬業兵を起す

諸武すでに事を用ふ。唐の宗室、人人自ら危ぶみ、衆心憤惋す。會ま柳州司馬英公李敬業及び弟敬猷、唐之奇、駱賓王、杜求仁、魏思溫、皆職を失うて怨望し、乃ち謀つて兵を起し、遂に詔を矯めて、揚州長史を殺し、府庫を開き、囚徒を赦し、旬日の間、勝兵十餘萬を得、復た嗣聖元年と稱す。敬業自ら匡復を稱し、上將復た貌の濮王賢に類するものを得、之を軍中に置いて云ふ、賢死せず、逃れて此に至り、令して其れ兵を擧ぐ、と。因つて、檄を州縣に移す。その略に曰く、僞臨朝武氏なるもの、人溫順に非ず、地實に寒微、むかし太宗の下陳に充て、かつて更衣を以て入侍す。洎乎たる晩節、春宮を穢亂し、密に先帝の私を隱し、陰に後庭の嬖を圖り、元后を鞏翟に踐み、吾が君を聚麀に陷れ、姊を殺し、兄を屠り、君を弑し、母を鴆す、人神の同じく嫉むところ、天地の容れざるところ、禍心を包藏し、神器を竊窺す、君の愛子之を別宮に幽し、賊の宗盟、委するに重任を以てす。一坏の土、未だ乾かず、六尺の孤、何くにか在る、と。太后檄を見て、問ふ、誰の爲るところぞ。或は曰く、駱賓王。太后曰く、宰相の過なり、人此の如きの才あり、而かも之をして、流落不偶ならしむるか、と。左玉鈐衛李孝逸を遣し、兵三十萬を將ゐ、以て敬業を討たしめ、その祖考の官爵を追削し、冢を發き、棺を斲り、姓徐氏を復す。

李敬業の敗死

はじめ、魏思溫、李敬業に說き、直に洛陽を指さしむ。敬業從はず。兵を將ゐて、江を渡り、潤州を取る。すでにして、孝逸の至らむとするを聞き、軍を回して、之を拒ぎ、下阿溪に屯し、敬猷をして淮陰に逼らしむ。孝逸の軍、臨淮に至り、戰つて利あらず。孝逸なほ軍を引いて進み、敬猷を走らし、溪に至り風に因つて火を縱つ。敬業大に敗れ、將に走つて海に入らむとす。その將王那相、敬業等の首を斬つて降り、餘黨皆捕得し、首を神都に傳ふ。

僧懷義

僧懷義、幸を太后に得たり。太后以て白馬寺主となす。懷義馬に御し、朝貴皆匍匐

禮謁し、武承嗣・三思、皆僮僕の禮を執る。懷義多く無賴の少年を聚め、度して僧となし、縱橫法を犯すも、人敢て言ふなし。御史馮思勗、屢ば法を以て之を繩す。懷義之に途に遇ひ、從者をして之を毆たしめ、幾んど死す。太后言を懷義巧思あるに託し、宮に入つて營造せしむ。補闕王求禮、表して請ふ、之を閹すれば、庶くは宮闈を亂さゞらむと。表寢して出てず。

告密

太后、李敬業の反より、天下の人多く己を圖るを疑ひ、又自ら久しく國事を專にし、內行正しからざるを以て、宗室大臣怨望服せざるを知り、大に誅殺を行ひ、以て之を威せむとし、乃ち盛に告密を開く。凡そ告密の者は、馬を給し、食を供し、行在所に詣らしめ、農夫樵人、皆召し見らるゝを得、或は不次除官、實なきも問はず。こゝに於て、告密者蜂起す。魚保家といふものあり、銅を鑄つて匭となし、以て天下の密奏を受けむことを請ふ。その器一室四隅、上各竅あり、入るべくして出すべからず。太后之を善とす、未だ幾ならずして、その怨家、匭に投じ、保家かつて徐敬業の爲に兵器を作りしを告げ、遂に誅に伏す。胡人索元禮、告密に因つて、召し見、擢でられて遊擊將軍となし、制獄を按ぜしむ。元禮性殘忍、一人を推せば、必ず數千人を引かしむ。こゝに於て、周興・來俊臣の徒、之に效ひ、興は累遷して秋官侍郎に至り、俊臣は御史中丞に至り、皆無賴數百人を養ひ、意陷れむと欲するところ、數處ともに之を告げしめ、辭狀ともに同じく、すでに獄に下せば、威刑を以て之を脅し、誣服せざるなく、又告密羅織經數千言を造り、無辜を網羅し、反狀を織成する、構造布置、皆支節あり。その訊囚酷法、定まるあり、中外之を畏る、虎狼よりも甚し。

宗室諸王の寃死

嗣　五年、太后潛かに革命を謀り、稍や宗室を除く。韓王元嘉等、內自ら安んぜず、密に匡復の志あり。これより先、武承嗣、人をして瑞石文を作らしめて曰く、聖母人に臨み、帝業を永昌す、と。人をして之を獻ぜしめて曰く、之を洛水に獲たり、と。太后喜び、命じて寶圖といひ、詔して洛を拜して圖を受け、謝を郊に告げ、明堂に御し、群臣を朝し、諸州都督刺史宗戚に命じて、並に神都に會し、先づ尊號を加ふ。こゝに於て、諸王遽に相驚いて曰く、神皇此に因つて盡く宗室を收めて之を誅せむと欲す、と。元嘉の子黃公譔、詐つて皇帝の璽書を爲り、分つて諸王に告げ、各兵を起さしむ。瑯琊王冲、兵を募つて、五千人を得、武水を擊つて克たず、還つて博州に走り、門者の

殺すところとなる。越王貞、冲の起るを聞き、亦た兵を豫州に起し、未だ幾ならず、戰潰えて自殺す。はじめ、諸王往來、相約結せしも、未だ定まらずして、冲先づ發す、惟だ貞狐狠して之に應じ、諸王皆敢て發せず。故に敗る。太后、貞父子の屬籍を削り、姓を虺氏と改め、幷せて悉く韓魯諸王を誅せむと欲し、監察御史蘇珦に命じて、之を按ずるに驗なし。太后召して之を詰る。珦抗論して回せず。太后曰く、卿は大雅の士、朕當に別に任使あるべし。この獄、卿を必せざるなり、と。周興等をして、之を按ぜしめ、乃ち韓王元嘉・魯王靈夔・黃公譔等を東都に收め、逼つて自殺せしめ、親黨皆誅す。霍王元軌・江都王緒・東莞公融、皆二王と謀を通ずるに坐し、太后の殺すところとなる。

宗室の除滅

太宗の子紀王慎、ひとり謀に與らず、亦た坐して巴州道に徙されて卒す。

その翌年四月、鄱陽王諲、帝を房陵に迎へむと欲し、天官侍郎鄧元挺に問ふ。汝南王煒、又かつて元挺に謂つて曰く、急計を爲さむと欲す、何如、と。元挺皆應ぜず。こゝに於て、煒諲等十三人を殺し、元挺反を知つて告げざるに坐して、同じく誅せらる。この冬、太后又鄭王璥等六人を殺し、滕王修琦等六人、死を免じて嶺南に流さる。その翌年、以侯思止刺史裴貞が舒王元名と反を謀るを告ぐ。元名は廢徙し、貞は族滅す。尋いて、又南安王顯等十四人を殺す。こゝに於て、唐の宗室、殆んど盡き、その幼弱なるもの、亦た嶺南に流さる。

武氏の纂號

この年九月、侍御史遊藝、上表し、國號を改めて周といひ、皇帝の姓武氏を賜はらむを請ふ。武氏許さず。遊藝を擢でゝ給事中となす。こゝに於て、百官宗戚、百姓四夷、合せて六萬餘人、ともに上表し、遊藝の請ふところの如し。武氏之を可とし、則天樓に御し、唐を以て周となし、改元し、尊號を上つて、聖神皇帝といひ、皇帝豫王を以て皇嗣となし、姓武氏を賜ひ、皇太孫を以て皇孫となし、武氏の七廟を立て、武承嗣を以て魏王となし、三思を梁王となし、士彠の兄の孫攸暨等十二人を以て皆郡王となし、史啓滋を以て納言となし、宗秦客を檢校內史となし、傅遊藝を鸞臺平章事となし、並に姓武を賜ふ。

次いで、尊號を萬象神宮に受け、旗幟赤を尙び、社稷を神都に改置し、武氏の神主を太廟に入れ、唐の太廟を以て享德廟となし、唐の崇先廟を改めて、崇尊廟となし、冬至明靈に祀り、武氏の祖を以て、上帝に配す。次いで、狄仁傑を以て、同平章事とな

狄仁傑

武氏の治政

す。黄門侍郎郭待舉等、同中書門下章事となつてより、同平章事は、宰相の職たり。武氏仁傑に謂つて曰く、卿、汝南に在つて、甚だ善政あり。卿、卿を譖せむと欲する者の名を知るか、と。仁傑訴して曰く、陛下臣を以て過となさば、臣請ふ之を改めむ。臣の過なきを知らば、臣の幸なり。譖者の名を知るを願はず、と。武氏甚だ之を嘆美す。

武氏朝に臨み、濫に祿位を以て、人心を收むと雖も、其職に稱はざるものは、皆之を黜け、明察善斷、用ふるところを誤らず。こゝに於て、狄仁傑、位に在り、魏元忠・李昭德・婁師德・杜景儉・姚玄崇・徐有功等の諸賢、皆擢用せられ、周興・來俊臣等の酷吏を誅し、又僧懷義を殺し、その他、簒立の際、媚付して榮位を取りしもの、漸を以て誅除せらる。武氏の姪武承嗣・三思、太子たらむを營求す。狄仁傑、從容として、武氏に言つて曰く、太宗櫛風沐雨、親ら鋒鏑を冒し、以て天下を定め、之を子孫に傳へ、大帝二子を以て陛下に託す、陛下今乃ち之を他族に移さむと欲す。乃ち天意に非ざるなきを得むや。且つ姑姪と母子と、孰れか親しき。陛下子を立つれば、千秋萬歲の後、太廟に配食せむ。姪を立つれば、未だ姪、天子となつて姑を廟に祔するものを聞かざるなり、と。因つて武氏に勸めて、廬陵王を召し還さしむ。武氏意や寤り、終に承嗣・三思を立つるの意なし。承嗣怏々疾を發して死す。十五年、皇嗣固く請うて、位を廬陵王に遜る。武氏之を許し、立てゝ太子となし、名顯を復し、姓武氏を賜ひ、太子に命じて、河北道元帥たらしめ、狄仁傑を副となし、以て突厥等を伐たしむ。

吐蕃の內亂

高宗の末年、吐蕃猖獗、唐は安西四鎭を失うて、之を復す能はず。周の王孝傑・劉審禮に從つて、吐蕃を擊ち、皆敗沒し、孝傑後竟に歸るを得、是に由つて、吐蕃の虛實を知る。會ま西州都督唐休璟、復た龜茲・于闐・疏勒・碎葉の四鎭を取らむことを請ふ。敕して、孝傑及び阿史那忠節を以て、兵を將ゐて、吐蕃を擊破せしめ、復た四鎭を取り、遂に安西都護を龜茲に置き、兵を發して、之を戍る。すでにして、吐蕃の贊善器弩悉弄、浸く長じ、大臣論巖と謀り、欽陵及び其黨二千餘人を殺す。こゝに於て、欽陵の子召仁は、贊婆と所部數千帳を以て唐に降り、麴薛布支、代つて吐蕃の軍事を總べ、十七年、涼州に寇し、昌松を圍む。隴右大使唐休璟ともに洪源谷に戰ひ、諸將に謂つて曰く、諸論すでに死し、麴薛布支、新に將となり、軍事に習はず、請ふ諸軍の爲に之を破らむ、と。乃ち甲を披いて、先づ陣を陷れ、六戰皆捷ち、吐蕃大に奔る。すでにして、吐

蕃使を遣して、和を請ひ、因つて使者を麟德殿に宴す。會ま休璟入朝して、宴に預る。使者屢ば之を窺ふ。武氏その故を問ふ。對へて曰く、洪源の戰、この將軍、猛厲敵なし、故に之を識らむと欲すと。

突厥

突厥は、高宗在位の間、一時大に衰頽せしが、その末年に至り、阿史那骨篤祿・阿史德元珍等、亡散を招集し、黑沙城に據つて、反し、永淳元年、幷州に寇す。代州都督薛仁貴、擊つて之を敗る。明年五月、骨篤祿、蔚州に寇して、刺吏を殺す。豐州都督崔智辯、兵に將として、之を邀へ、又房へらる。尋いで、大に西突厥を侵掠せしにより、繼往絕可汗解毗羅は、その餘衆六七萬人を收め、入つて內地に居ることゝなれり。すでにして、骨篤祿の弟默啜、嗣いで立つや、頗る周を輕んじて、靈凉に寇し、また契丹を襲擊せり。

契丹

契丹はかつて前に述べし如く、通古斯族の一派にして、慕容氏の起るや、松漠の間に遠竄し、その後煬帝の時、一たび通ぜしことあり。貞觀中、その酋長屈哥、部を擧げて內屬し、詔して松漠都督府を置き、屈哥を以て都督となし、姓李氏を賜ふ。その孫盡忠に至り、嗣聖十三年、歸誠州刺史孫萬榮と結び、兵を擧げて反し、營州を陷れ、都督趙文翽を殺し、自ら無上可汗と稱し、萬榮を以て前鋒となし、向ふところ皆克ち、旬日の間、兵數萬に至る。武氏、將軍曹仁師を遣し、之を擊て、西硤西に戰ひ、周師大に敗る。こゝに於て、武氏、建安王武攸宜を以て、淸邊道大總督となし、天下の人奴、勇あるものを募り、以て契丹を擊つ。明年三月、總管王孝傑、契丹と東硤西に戰つて、敗死し、攸宜漁陽に軍し、敢て進まず。すでにして、盡忠死し、孫萬榮代つて其衆を領す。突厥の默啜、間に乘じて、沙漠を襲ひ、盡忠・萬榮の妻子を虜にして去る。萬榮餘衆を收合し、攻めて、冀州を陷れ、又瀛州を攻め、河北震動す。こゝに於て、狄仁傑を起して、魏州刺史となす。

孫萬榮の敗死

時に突厥の默啜、武氏の子となり、幷せて、其女の爲に婚を求めむを請ふ。武氏、固知徼・田歸道を遣し、默啜を冊拜して、遷善可汗となす。こゝに於て、突厥周と親み、却つて契丹に當らむとす。はじめ、孫萬榮の王孝傑を破るや、柳城の西北に於て、險に依つて城を築き、その老弱婦女を留め、人をして、之を守らしめ、自ら精兵を引いて、幽州に寇す。突厥默啜、その新城を襲ひ、三日にして、之に克ち、俘を盡して以て歸る。時に萬榮方に周兵と相持す。軍遂に大に潰え、奴、その首を斬り、以て降り、餘衆は突

厥に歸す。

突厥周を侮る

突厥、すでに契丹の餘衆を得、その勢大に振ふ。はじめ、武氏、武承嗣の子淮陽王延秀に命じ、突厥に入り、默啜の女を納れて、妻となさしめ、復た閤知微を遣し、金帛巨億を齎らして、之を送らしむ。延秀、突厥に至る。默啜謂つて曰く、我女を以て李氏に嫁せむと欲す、安んぞ武氏の子を用ひむや。我が突厥、世、李氏の恩を受く、聞く李氏盡く滅び、惟だ兩兒あるのみ、と。我今兵を將ゐて、之を輔立せむと欲す、と。乃ち延秀を拒み、知微を以て、南面可汗となす。言ふ之をして唐民に主たらしめむ、と。因つて兵を發して、嬀檀等の州に寇し、書を移して曰く、我が可汗の女、當に天子の兒に嫁すべし、武氏は小姓、門に敵せず、罔冒して婚を爲す。我此が爲に兵を起し、河北を取らむと欲するのみ、と。すでにして、默啜定州を陷れ、刺史を殺し、又趙州を陷る。刺史高叡、妻秦氏と藥を仰ぎ、詐つて死し、執へられて默啜に詣る。之を誘うて降らしむ。秦氏、叡に謂つて曰く、國恩を酬報する、正に今日に在り、と。遂に俱に目を閉ぢて言はず、再宿、默啜之を殺す。

こゝに於て、皇太子を以て河北道元帥となし、狄仁傑之に副たり。これより先、人を募ること月餘、千人に滿たず。太子帥たるを聞くに及び、應ずるもの雲集し、未だ幾ならずして、數五萬に盈つ。時に太子行かず、仁傑に命じて元帥の事を知らしむ。

默啜の却走

突厥盡く掠むところ、趙定の男女萬餘人を殺して去る。仁傑兵に將として、之を追へども及ばず。默啜、漠北に還り、兵四十萬を擁し、地萬里に據り、西北諸夷、皆之に附く。こゝに於て、その弟吐悉匐を立てゝ、右廂察となし、骨篤祿の子、默矩を左廂察となし、各兵二萬餘人に主たらしめ、その子、匐俱小可汗となり、兩察の上に位し、兵四萬人に主たり。

婁師德と狄仁傑

嗣聖十六年、周の納言婁師德卒す。師德、沈厚寛恕、狄仁傑の入つて相たるや、師德實に之を薦む。而して、仁傑意を知らずして、頗る之を輕んず。武氏、かつて仁傑に問うて曰く、師德賢なりや。對へて曰く、將となつて、能く謹んで邊陲を守る。賢は臣知らず、と。又曰く、師德人を知れりや。對へて曰く、臣かつて同僚、未だその人を知るを聞かざるなり、と。武氏曰く、朕の卿を知るは、乃ち師德薦むところなり。亦た人を知るといふべし、と。仁傑出でゝ嘆じて曰く、婁公盛德、我その包容するところとなる

や久し。吾その際を窺ふ能はざるなり、と。この時、羅織紛紜、師德久しく將相となり、ひとり能く功名を以て終る。人是を以て之を重んず。その翌年、狄仁傑、亦た薨ず。武氏、仁傑を信重す、諸臣及ぶなし。かつて、之を國老と謂うて名いはず。仁傑好んで面引延爭す、武氏每に意を屈して、之に從ひ、屢ば老疾を以て、骸骨を乞へども、許さず。卒するに及びて、武氏泣いて曰く、朝堂空し、と。武氏かつて仁傑に問ふ、朕、一佳士を得て、之を用ひむと欲す。誰か可なるもの。仁傑曰く張柬之あり、その人老ひたりと雖も、宰相の才なり、と。武氏擢てゝ洛州司馬となす。數日又仁傑に問ふ、對へて曰く、前に柬之を薦む、尙ほ未だ用ひざるか。武氏曰く、すでに遷せり、對へて曰く、臣の薦むるところのものは、宰相となすべし、司馬に非ざるなり、と。乃ち秋官侍郎に遷し、卒に用ひて相となす。仁傑、又夏官侍郎姚元崇・監察御史桓彥範・大州刺史敬暉等數十人を薦め、卒に反正の功をなす。或は、仁傑に謂つて曰く、天下の桃李、悉く公の門に在り、と。仁傑曰く、賢を薦むるは、國の爲にす、私の爲にするに非ざるなり、と。

これより先、懷義すでに誅に伏せし後、武氏、張昌宗・易之の二人を寵幸す。昌宗・易之、年少にして、姿容に美なり、太平公主、之を薦め、入て禁中に侍せしめ、皆幸を武氏

張昌宗易之

中宗の復辟

に得、常に朱粉を傅け、錦繡を衣、賞賜勝へて紀すべからず。武承嗣・三思・懿宗・宗楚客・晉卿、皆その門庭に候し、爭つて鞭轡を執り、易之を謂うて五郎となし、昌宗を六郎となす。こゝに於て、張柬之、相位に在りと雖も、年老ひて爲すなく、二張・三思と事を用ひ、因つて諧をなし、魏元忠を貶して高要尉となし、張說を嶺南に流し、又韋安石を出して、揚州刺史となす。すでにして、嗣聖二十一年、武氏疾に寢ぬ。宰相見るを得ざるもの數月、惟だ易之・昌宗、側に侍す。崔元暐、異姓の出入すべからざるを言ふ。易之・昌宗、亦た禍の及ぶを恐れ、陰に之が備をなす。屢ば人あり、飛書を爲り、易之兄弟反を謀るといふものあり、こゝに於て、武氏法司をして、昌宗の罪を議せしむ。之を死に處せむと請ふもの多し、武氏特に赦して、之を赦す。

神龍元年正月、武氏疾甚し、易之・昌宗、中に居て、事を用ふ。張柬之・崔元暐・中臺右丞敬暉・司刑少卿桓彥範・相王司馬袁恕己と之を誅さむことを謀り、羽林大將軍李多祚に說き、遂に與に謀を定む。はじめ、柬之、荆府長史、楊元琰と相代り、同く、江に泛び、語、武氏革命の事に及ぶ、元琰慨然として、匡復の心あり。柬之の相となるに及び、爲

に相引き、元琰を以て右羽林將軍となし、又彥範・暉及び右散騎侍郎李湛を用ひ、皆羽林將軍となし、委ぬるに、禁兵を以てす。俄にして、姚元之、靈武より都に至る。東之・彥範相謂つて曰く、事濟れり、と。遂に其謀を以て、之に告ぐ。時に太子北門に起居す。彥範・暉、謁見し、密に其策を陳す。太子之を許す。東之・元暉・彥範、乃ち左威衛將軍薛思行等と羽林の兵五百餘人を帥ゐて、玄武門に至り、多祚・湛及び內直郎王同皎を遣して、東宮に詣らしめ、太子を迎へ、關を斬つて入り、易之・昌宗を廡下に斬り、進んで武氏寢ぬるところの長生殿に至る。武氏驚起し、問うて曰く、亂者は誰ぞや。多祚等對へて曰く、易之・昌宗、反を謀る。臣等太子の令を奉じて、之を誅す。恐らくは、漏洩あらむ。故に敢て以聞せず、兵を宮禁に稱す、罪、當に萬死すべし、と。武氏、太子を見て曰く、小子すでに誅す、東宮に還るべし、と。彥範進んで曰く、太子安んぞ更に歸るとを得む。むかし、天皇愛子を以て陛下に託す、今年齒すでに長じ、久しく東宮に在り、天意人心、久しく李氏を思ふ。願くは、陛下位を太子に傳へ、以て天人の望に順へ、と。こゝに於て、武氏命を制し、太子國を監し、使をして、諸國に宣諭せしめ、明日武氏位を太子に傳ふ。中宗位に復して大赦し、從つて上陽宮に居る。帝、百官を帥ゐ、尊號を上つて則天大聖皇帝といふ。中宗廢せらるゝこと廿二年、こゝに至りて、位に復し、故の后韋氏を立てゝ、皇后となし、武三思を司空となし、張柬之等、官を進め、爵を賜ふこと、差あり。その冬十一月、武氏、上陽宮に死す、年八十二。

武氏の崩御

中宗の文治

韋后の出身

第九十八章　韋氏及び太平公主

中宗復祚、神龍元年、戶部奏するところによれば、戶六百一十五萬、口三千七百一十四萬有奇あり。その翌年、內外五品以上の官二十人を選びて、十道巡察使となし、之に委して、吏を察し、人を撫し、賢を薦め、獄を直し、二年一たび代り、その功罪を考へて、之を進退す。又員外官を置き、京師より諸州に及び、凡そ二千餘人、宦官七品以上を超遷し、員外官たるもの、又將に千人ならむとす。次いで、修文館學士を置き、公卿善く文を爲るもの、李嶠等二十餘人を選びて叙用し、遊宴に陪侍し、詩を賦して屬和し、上官昭容をして、その甲乙を第せしむ。こゝに於て、天下靡然、爭うて文華を以て相尙び、儒學忠讜の士、進むを得るなし。

かくの如く、中宗の復祚、一時の盛を極めしと雖も、內廷の腐敗は、愈よ甚しく、又

次いで牝鷄司晨の禍を見るに至れり。はじめ、帝の房陵に遷るや、韋后と同じく、幽閉せられ、備さに艱苦を嘗め、情愛甚だ篤し。敕使至るを聞く毎に、輙ち惶恐して自殺せむと欲す、后、之を止めて曰く、禍福常なし、何ぞ遽かに是の如きと。かつて、后と私に誓つて曰く、異時幸に復た天日を見ば、惟だ卿の欲するところ、相禁禦せざるべし、と。こゝに於て、帝朝に臨む毎に、后必ず帷帳を施して、殿上に坐し、朝政を預り聞くこと、武氏が高宗の世に在る如きなり。桓彥範、上表して、諫むれども聽かず。尋いて、敬暉等、王爵を降し、以て內外を安ぜむことを請ふ。武三思、韋后と日夜暉等を譖す。こゝに於て、暉等五人に王爵に賜ひ、皆政事を罷めしむ。三思、百官をして、武氏の政を修復せしめ、武氏に附かざるものは、之を斥け、五王の爲に逐はれしもの、之を復し、幾もなくして、大權盡く三思に歸す。

武三思の專橫

はじめ、二張の誅せらるゝや、洛州刺史薛季昶、張柬之、敬暉に謂つて曰く、二凶誅すと雖も、產祿なほ在り、草を去つて根を除かず、終に復た生ずべし、と。二人曰く、大事すでに定る、彼は机上の肉のごときのみ、夫れ何ぞ能く爲さむ、と。季昶嘆じて曰く、吾、死所を知らず、と。朝邑尉劉邑求、亦た之を言ふ。二人用ひず。こゝに於て、五王政を罷められ、三思將に政を簒せむとす。はじめ、帝の女安樂公主、三思の子崇訓に適く。上官儀の女婉兒、沒せられて掖庭に入り、辯慧にして文を能くし、吏事に明習す。帝、位に即き、制命を掌らしめ、益す之に委任し、拜して、婕妤となす。三思通ず。故に婉兒武氏に黨し、又三思を韋后に薦め、帝遂に三思と政事を圖議し、數ば微服して、其第に幸す。柬之等、遂に制を三思に受く。帝、后と三思とをして、雙陸をなさしめ、自ら點籌となる。后、遂に三思と通ず。是に由つて、武氏の勢、復た振ふ。すでにして、安樂公主、又寵を恃んで官を賣り、獄を鬻ぎ、勢、朝野を傾け、或は自ら制敕を爲つて、その文を掩ひ、帝をして、之に署せしむ。帝、笑つて之に從ひ、竟に視ず。自ら請うて、皇太女とならむとす。帝從はずと雖も、亦た譴責せず。

太子重俊の死

こゝに於て、駙馬都尉王同皎、處士韋月將、武氏の陰事を憤慨し、將に謀るところあらむとせしを以て、皆殺され、敬暉、桓彥範、張柬之、袁恕己、崔元暐等、皆貶せられて、遠州司馬となり、尋いて、皆三思の殺すところとなる。韋氏又太子重俊、その所生に非ざるを以て、之を惡み、武三思、最も之を忌み、上官婕妤は、安樂公主に教へて、之を

廢ずるを請はしむ。太子積んで平かなる能はず。景龍元年七月、太子李多祚等と制を矯つて、羽林の兵三百餘人を發し、武三思・武崇訓を其第に殺し、又成王千里をして、兵を分つて、宮城諸門を守らしめ、自ら多祚等と闕を斬つて入り、閤を叩いて、上官婕妤を索む。帝乃ち韋后・安樂公主・上官婕妤と、玄武門樓に登つて、之を避く。宮闈令楊思勗、擊つて多祚を斬り、その衆、皆潰ゆ。千里、延秋門を攻め、將に宗楚客・紀處訥を殺さむとす、克たずして死す。太子亦た左右の殺すところとなる。帝、その首を以て太廟に獻じ、又三思・崇訓の柩を祭り、然る後、之を梟す。魏元忠、三思が櫬を擅にするを以て、常に憤鬱す。その子升、脅されて、太子に從ふ。こゝに於て、貶せられて、務川尉となり、道にして卒す。

宮廷の腐敗

こゝに於て、安樂公主・上官婕妤、皆勢に依つて、事を用ひ、謁を請ひ、財を受け、屠沽臧獲と雖も、錢三十萬を用ふれば、別に墨敕を降して、官に除し、斜封して中書に付す。時人之を斜封官といふ。その員外同正試攝檢校判官、凡そ數千人、皆兩省に由らずして授け、兩省敢て執奏せず、即ち所司吏部員外郎李朝隱に宣し、前後執駁一千四百餘人、怨謗紛然、朝隱一も顧るところなし。婕妤、外第を立て、出入節なく、朝士往々之に從ひ、遊處以て進達を求む。安樂公主、尤も驕橫。宰相以下、その門に出て、民田を奪つて、定昆池を作る。延袤數里。帝が擊毬を好むを以て、毬場を築き、帝及び皇后公主、又多く佛寺を作る。左拾遺辛替否、上疏して、諫れども省みず。帝、又かつて玄武門に幸し、近臣とともに宮女の拔河を觀、又宮女に命じて、市肆を爲さしめ、公卿商旅となり、之と交易し、因つて忿爭を爲す。言辭褻慢、帝、后と臨觀して、樂となす。又韋后とともに微行して、燈を市里に觀、宮女數千人を縱つて出遊せしむ、歸らざるもの多し。

景龍三年、關中大に饑え、米斗に百錢、山東江淮の穀を運びて、京師に輸す。牛死する什に八九。群臣多く東都に幸せむを請ふ。韋后の家、本と杜陵に在り、東遷を樂まず、巫覡をして、東行を利とせざるを說かしむ。後に言ふものあれば、帝怒つて曰く、豈に逐糧天子あらむや、と。乃ち止む。

はじめ、定州の人郎岌、上言して、韋后・宗楚客、將に逆亂を爲さむとするをいふ。后之を殺す。許州參軍燕欽融、復た上言し、皇后淫亂、國政に干預し、楚客社稷を危うせ

中宗弑せらる

むを圖るをいふ。帝、之を面詰す。欽融抗言して撓まず。楚客制を矯めて之を殺す。帝、意快々たり。是に由つて、后及び其黨、はじめて懼る。散騎常侍馬秦客・光祿少卿楊均、皆后に幸せられ、事の泄れむことを恐る。安樂公主、亦た后、朝に臨み、己を以て皇太女となさむことを欲す。乃ち相與に謀り、四年六月、餅餌中に於て毒を進め、帝遂に崩ず。韋后秘して喪を發せず。宰相を召して、禁中に入れ、諸府の兵を徵して、京城に屯せしめ。裴談・張錫を同三品とし、張嘉福・岑羲・崔湜を同平章事とし、太平公主・上官昭容と謀つて、遺制を草し、溫王重茂を立てゝ太子となし、皇后政事を知り、相王旦、政事を參謀す。宗楚客曰く、相王、皇后に於て、嫂叔通問せず、聰明の際、何ぞ以て禮を爲さむ、と。遂に諸宰相を帥ゐ、表請して、相王の政事を罷め、乃ち喪を發し、皇后政を攝し、唐隆と改元し、太子位に即く。時に年十六。宗楚客等、韋氏をして、唐の命を革めしめむと欲し、少帝又相王を除かむを謀り、而かも未だ發せず。

章氏除かる

相王の子臨淄王隆基、潞州司馬を罷めて、京師に在り。陰に才勇の士を聚めて、匡復を圖る。はじめ、太宗、官戶及び蕃口驍勇なるものを選び、虎文衣を着け、豹文韉を跨き、之を呼んで百騎といふ。武氏の時、增して千騎となし、左右羽林に隸す。中宗之を萬騎といふ。隆基厚く羽林の豪傑に結ぶ。兵部侍郎、崔日用、素と宗楚客と善く、その謀を以て、隆基に告ぐ。隆基乃ち太平公主及び公主の子薛崇暕・苑總監鍾紹宗・尙衣奉御王崇曄・前朝邑尉劉幽求・折衝麻嗣宗と、事に先つて之を誅せむことを謀る。會ま韋播數ば萬騎を榜捶し、萬騎皆怨む。果毅葛福順・陳元禮、隆基を見て、之を訴ふ。隆基、諷するに諸韋を誅するを以てす。皆踴躍して自ら效さむとす。乃ち微服して、幽求等と苑中に入る。夜に逃び、天星散落して、雪の如し。幽求曰く、天意此の若し、時失ふべからず、とゝに於て、福順直に羽林營に入り、諸韋兵を與るものを斬り、以て徇へて曰く、韋后先帝を酖殺し、社稷を危うせむを謀る。今夕當に共に之を誅し、相王を立て、以て天下を安んずべし、敢て兩端を懷いて逆黨を助くるものあらば、罪三族に及ばむ、と。羽林の士皆欣然として命を聽く。隆基兵を勒して、玄武門に入る。諸衛兵皆之に應じ、韋后及び安樂公主・武延秀・上官昭容を斬る。幽求曰く、衆今夕ともに相王を立つるを約す、何ぞ早くせざる、と。隆基之を止め、曉に及ぶ比、內外皆定る。隆基乃ち出てゝ相王を見、叩頭して先づ白せざりし罪を謝す。相王曰く、社稷

宗廟墜ちず、汝の力なり、と。遂に相王を迎へ、入つて少帝を輔けしめ、城門を閉ぢ、諸韋の親黨及び宗楚客・晉卿・紀處訥・趙履溫・張嘉福・馬秦客・楊均・葉靜能等を捕へて、皆之を斬り、韋后を市に暴し、諸韋襁褓の兒、免る者なし。乃ち隆基を封じて平王となし、左右廂萬騎を押し、崇暕に爵立節王を賜ひ、紹京を以て中書侍郎を守らしめ、幽求をして中書舍人を守らしめ、並に機務に參知せしめ、武氏の宗族、誅竄殆んど盡く。すでにして、劉幽求、隆基に言ひ、相王に請うて、早く即位し以て天下を鎮せしめ、遂に少帝の制を以て、位を相王に傳ふ。時に少帝なほ御座に在り、太平公主進んで曰く、天下の心、すでに相王に歸す、これ兒の座に非ず、と。遂に提して之を下らしめ、相王遂に即位す、是を睿宗皇帝となす。こゝに於て、少帝を以て溫王となし、內宅に置き、平王隆基を立てゝ皇太子となし、故の太子重俊の位號及び敬暉・桓彥範・崔元暐・張柬之・袁恕己・李多祚等の官爵を復し、斜封官を罷め、幽州に經略節度大使を置き、薛仁貴の子訥を以て之に任ず。節度使の名、此に始まる。宋璟を以て、吏部尚書となし、姚元之を兵部尚書となす。二人心を協せて、中宗の弊政を革め、忠良を進め、不肖を退け、賞罰盡く公、請託行はれず、紀綱修舉す。當時翕然として、復た貞觀永徽の

都督府の設置

風ありとなす。

景雲二年、使を遣し、十道を按察せしめ、山南を分つて東西兩道となし、隴右を分つて河西道となし、又天下を分つて二十四都督を置き、揚益幷荊の四州を四大都督となし、汴兗魏冀蒲綿秦洪潤越十州を中都督となし、齊鄜涇襄安潭遂通梁夔十州を下都督となし、各所部刺史以下の善惡を糾察せしむ。太子右庶子李景伯・舍人盧倩等、上言す、都督生殺の柄を專にし、權任太だ重く、或は其人に非ざれば、害をなすこと、細ならず、今御史、秩卑く、望重く、時を以て巡察すれば、姦宄自ら禁ぜむ、とすてにして、竟に都督を罷め、四大都督府、故の如し。但だ按察使を置く、道各一人、その後、廢置數回、しかも長く存ぜり。

太平公主の誅除

太極元年八月、帝、位を太子に傳ふ、是を玄宗皇帝となす。帝を尊んで太上皇といふ。太平公主は、帝の叔母なり。沈敏にして權略多し。武氏、以て己に類すとなし、獨り愛幸す。張易之を誅するに及び、公王與つて力あり、中宗の世、韋后安樂、皆之を畏る。又帝とともに韋氏を誅し、すでに屢ば大功を立て、益す尊重せらる。睿宗かつて之